

天正三年六月二十八日

三一六

猶々折々可申儀、因無差儀、乍存疎意候、意外候、有御心得御取合頼入候、
當年未申通、疎遠背本意條、貴殿江捧書狀候、聽而雖可令啓候、越中表へ可有御出馬之
旨承、矯遲候、併無沙汰之至候、可然御取成任入候、就中關左平均之由、珍重候、越中寺島
雖逆心候、早々被相靜満足候、次、上方信長、勝頼於三州去月廿一日一戰、甲衆失利、敗北
候、於時宜從信長注進之條、不能詳候、仍雖微乏候、苦茗一箱進入候、表一儀候、尙使僧可
申候、恐々謹言、

六月廿八日

輝盛(花押)

直江景綱

直江大和守殿

御宿所

(上色)飛州大原城主江馬常陸介

〔參考〕

〔越登賀三州志〕故墟

越中射水郡

寺島牛助
ノ居城

小泉 在淺井郷小泉村領、或云、増山ノ別

邑傳、寺島牛助居セリト、郡瀧山條下、

婦負郡

瀧山 富崎 福山 三名一跡也、在長澤村、富崎村、古謂之福山、又以南山有

永祿中、神保長職居ス、時ニ謙信ノ爲ニ敗レ、蓮華寺村ノ深沼ニテ戰死、古墳今猶存ス

牛助等佐
々成政ニ
屬ス

ト、其後寺島牛助、水島甚助居タルニ、天正六年成政ノ爲メニ攻メラレ、野積谷高嶺大

道村へ退キテ和シ、是ヨリ成政ノ將トナルト云、按寺島等傳、父謂西野隼人、越中賊將也、

一男謂甚助、氏春改姓槻尾、二男謂左内、出家住越中勢田、號船湖、甚助、槻尾、甚之助、俱事瑞龍公、甚助

賜二千石、牛助賜千五百石、三男謂西野、出家住越中勢田、號船湖、甚助、槻尾、甚之助、俱事瑞龍公、甚助

是月、謙信、和田六郎右衛門ヲ、越後荒井町問屋ト爲シ、傳馬宿送ノ事ヲ掌ラシ

〔新井和田氏文書〕○越後 三上字一耶氏所藏

定

右大崎郷荒井町問屋之儀、其方相定候、就而者、傳馬宿送無油斷町中江急度可申付候、

若下知ヲ違背之族於有之者、曲事之由被仰出者也、爲後代仍如件、

天正三年乙亥

六月 日

柴田尾張守(花押)

竹俣參河守(花押)

齋藤下野守(花押)

天正三年六月是月

三一七

荒井町問屋
和田六右衛門

急度申遣候、仍傳馬并人足宿送之義、我々墨付無之、爲下申付候テ、少モ不可有承引候、其爲如此候也、
(慶長四)
二月十三日

秀治(花押)

荒井村代官中レドモ、便宜茲ニ附收ス、

〔参考〕

〔越前〕
〔越前〕
〔越前〕

信濃街道

中山通驛次 信濃街道

新井驛

高田驛 高田城下札ノ辻ヲ里程ノ本杭トス、横町、府古町ノ間ニアリ、
略

新井驛 高田ヨリ 當驛ノ儀ハ新驛ニテ、往古國府并春日山城昌盛ノ頃ハ、古府ノ地

ヨリ高田次キ、高田ヨリ十日市、五日市邊ヲ、關川信濃渡リ、三本木等ヲ經テ、今ノ關

山驛ノ西ニ出テ、杉ノ澤等ヲ經テ、信濃國二ノ倉ト云所ヘ街道通シケルト云、
略

當驛ノ問屋和田氏ニ傳ル處ノ、天正年間ノ古書文如左、
○文書ハ、前掲ト、同文ニ付キ略ス、

七月 大西朔

四日、庚子織田信長、越前ニ入り、朝倉氏ノ餘黨及ビ一向一揆ヲ攻ム、是日、越前北

庄總老原吉親等、連署シテ救援ヲ謙信ニ請フ、

〔武州文書〕三 府内下

畏而言上候

抑當國之儀、(朝倉)義景、御敗軍以後、既從大坂殿上使被差下、士卒之散落被相靜、國漸順謐之

様御座候刻、(織田)重而信長出張候而、令亂邑、于今國不輒候條、各加州表江引退、時剋雖待申

候、尾州勢依爲勇兵、越前諸牢人加州之士卒、雖致武威之行、戰功未成候、御屋形様、非御

出勢者、各難遂還國之望候、則從加州諸侍中、以連署御出馬之儀被申入之由、目出度珍

重奉存候、早速彼表へ於御出陣者、致御案内者、抽粉骨、各馳走可仕段、乍恐當庄之諸卒

謹而奉得御意候、猶委細之儀、此罷下候老共可申上候、恐惶敬白、

越前北庄

七月四日 (天正三)

惣老(花押)

土藏 新介(花押)

天正三年七月四日

三一九

義景滅後ノ越前

謙信出軍スルニアラザレバ還國ノ望ナシ

北庄惣老

土藏能勝

天正三年七月四日

河嶋次正
石場惣老

河嶋彦左衛門

次正(花押)

石場惣老(花押)

小木吉通

小木彦兵衛

吉通(花押)

印牧正秀

印牧小三郎

木田惣老

木田惣老(花押)

原吉親

原吉親(花押)

○謙信年譜ニ收ムルモノ、宛所ヲ河田豊前守殿トス、月日九月八日トアルハ編者ノ杜撰ナランカ、

〔信長公記〕^八

天正三年八月廿三日、^(越前)一乘谷へ信長被移御陣、參陣ハ賀州迄、稻葉伊

豫父子維任日向守、羽柴筑前守、永岡兵部大輔、別善右近打入之趣、御注進有、八月廿八

日、豊原へ被寄御陣を、去程堀江小黒の西光寺連々申上る筋目在之、御赦面之御禮申

上候、賀州能美郡江沼郡二郡、屬御手之間、檜屋城大正寺山二ツこしらへ、別喜右近、佐々權左衛門并堀江相加被入置、十餘日の内に、賀越兩國被仰付、御威光中々ニ無申計、

〔附録〕

〔伊勢古文書集〕^{三上}

伊勢

朝倉景嘉
越前再興
ヲ圖リ越
後府へ赴

去春ハ致參宮種々御馳走、尤快悅之至存候、仍御神樂料等之儀、越前某在所中村新右衛門高橋十允のニ以書狀申置候、聊不可有別儀候、先書如申候、越前國再興遅々候條、越後府へ罷下候、然者、猶越前表一城可預之旨ニ、謙信別而入魂^(候カ)於時宜者可御心安候、至迄同進候、進馬候、本意不可有程候、彌御祈念所仰候、此方御用之儀可承候、疎意存間敷候、猶來翰之時候、恐々謹言、

七月十五日

景嘉判

西村八郎兵衛尉殿

同 一郎次郎殿

(上包)

〔西村八郎兵衛尉殿

天正三年七月四日

天正三年八月十五日

○本書年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

八月丁卯盡朔

十五日辛巳、本庄宗緩、窪某退轉セルニ因リテ、其屋敷地ヲ、青海河右馬丞ニ返附ス、

〔歴代古案〕七

窪方退、轉ニよつて、彼屋敷所先代之筋目被仰分候間、則無相違相返申候、彌々別

儀有間敷候仍如件、

天正參年

本庄入道

本庄宗緩

宗俊緩

八月十五日

青海河殿

尙々、精芳春公へ申條早々申候、以上、

廣泰寺

窪方名跡ニ付而、先代之筋目を以御懇比承候程者、千萬存候、殊廣泰寺□異見ニ候條、任其意候處ニ、御一札ニ預候、満足存候、精自芳春公可被申述候間、早々及御返事候、恐々謹言、

八月十五日

宗緩

青海川馬丞殿

十月丙寅盡朔

三日戊辰、楡井親忠、先例ニ依リテ、越後福昌庵ニ地ヲ寄進ス、

〔新編會津風土記〕十卷一百一十六所收

如先々、觀音領五貫文之所進之候、仍如件、

楡井修理亮

天正三年十月三日

親忠花押

福昌庵

〔參考〕

〔新編會津風土記〕卷一百十六 魚沼郡雷土村 古跡

板木城跡

城跡、村北三町許、板木村ト入逢ノ山上ニアリ、板木城ト云、頂ニ平ナル所アリ、又空陸ノ跡殘レリ、楡井修理亮親忠ト云フ者住セシ所ナリト云、親忠ハ天正ノ頃ノモノナ

リトシ、○同書、板木村ノ部ニ、親忠討死ノ地ヲ記載セリ、

〔南魚沼郡誌〕

石動山淨光寺ハ、東村大字門前ニ在リ、○中開基ノ年曆詳ならず、中略當寺内に在る觀世音は、上田札所二十五番なり、傳ふ天正の頃、赤羽に福昌庵と云

天正三年十月三日

三二三

三二二

天正三年十一月二十三日 十二月十五日

三二四

ふ寺あり、板木城主楡井修理亮、正観音一躰を收め、供養料を寄進せしが、何時の頃にや、観世音と共に同庵を浄光寺に合併せりと云ふ、左の文書は昔時より赤羽村甚兵衛の所藏なり、○文書、前掲ト同、文ニ付キ略ス、

十一月丙申朔

二十三日、戊午政實姓闕、今井彌七郎ノ請ヲ容レテ、復、地藏堂屋敷ノ地ヲ宛行フ、

〔菅與吉氏所藏文書〕○越後

今度、わひ事よおよひ候あいた、本地(地藏堂)、ちさうたう屋しき、出之候(向)、きやうこ(後)、やうこ(奉)、かんよふ候、仍如件、

天正三年

霜月廿三日

政實(花押)

今井彌七郎とのへ

十二月乙丑朔

十五日、己卯是ヨリ先、能登守護畠山氏ノ將游佐盛光等、越前加賀ノ狀況ヲ謙信ニ報ズ、是日、盛光等、河田長親ニ答報シテ、謙信ニ斡旋センコトヲ請フ、

〔歴代古案〕○七羽前

就越賀表之儀、令啓上候處、尊書拜見忝奉存候、猶重而可申上候間、宜預御取成候、恐々謹言、

温井備中守

温井景隆

極月十五日

景隆

長九郎左衛門

長九郎左衛門

長綱連

綱連

平加賀守

平加賀守

平高知

高知

三宅備後守

三宅備後守

三宅長盛

長盛

游佐四郎右衛門

游佐四郎右衛門

盛光

河田(長親)前守殿

○長綱連等、謙信ニ出兵ヲ請フコト、四年二月二十日ノ條ニ見ユ、是歳冬、足利義昭、使僧ヲ謙信ニ遣シ、京都ノ回復ヲ囑ス、

天正三年十二月十五日

三二五

天正四年二月二十日

三二六

使僧富藏院

〔歷代古案〕四羽前

舊冬、差越富藏院候處、種々入魂之由、尤快然候、中越甲相三和之儀、謙信於被應上意（義昭）者、御入洛可爲眼前候、○下略、全文ハ、四年五月十六日ノ條ニ收ム、

（天正四）五月十六日

（三寶院）義堯

（景連）長殿

天正四年丙子

紀元二千二百三十六年

二月小乙丑朔盡

二十日、甲能登畠山氏ノ將、長綱連等、謙信ノ兵ヲ、同國ニ出サンコトヲ希望シ、是日、越後ノ將色部惣四郎・齋藤朝信等ニ、コノ旨ヲ謙信ニ傳ヘンコトヲ託ス、

〔歷代古案〕一羽前

態令啓入候、先以于今御在陣之由、御太儀令存候、將復越府々御出馬之儀、如何未相知候哉、今程御馬被出候者、御本意眼前ニ候、拙者式別而御先手仕、御馳走可申上候、此旨越江可被仰上候、恐々謹言、

溫井備中守

（天正四）二月廿日

景隆

溫井景隆

平加賀守

高知

平高知

遊佐四郎左衛門

盛光

長九郎左衛門

綱連

遊佐盛光

色部惣四郎殿

齋藤（朝信）下野守殿

岩井（信能）民部少殿

小倉伊勢守殿

五十公野右衛門殿

〔參考〕

〔越登賀三州志〕

（天正二）鍵藁餘考七

今年、游佐續光ハ、其君義隆聰明ニシテ、我威ヲ張ルヲ能

ハサルヲ以テ、溫井景隆ト姦計ヲ設ケ、義隆及ヒ飯川肥前ヲ、續光カ私亭ヘ請待シテ、鳩殺ス、而シテ續光ハ、義隆ノ庶兄二本松伊賀守一本ニ實名、ヲ立ントス、是ヨリサキ、

天正四年二月二十日

三二七

游佐續光
溫井景隆
相計リテ
其主義隆
ヲ殺ス

齋藤朝信
岩井信能
小倉伊勢
守
五十公野
右衛門

天正四年三月十七日

三二八

義隆ノ遺臣黨ヲ立テ相争フ

能登七尾城將畠山義隆死ス

義隆屬續ノ際、伊賀守及ヒ長綱連ヲ招キ、嫡男式部大輔義春幼名春丸、此時僅ニ三歳也、母能登郡豐田村左近ノ女ト云、ヲ嗣立トナスヘキノ遺囑アリ、依テ、二士遺命ヲ守テ、義春ヲ立テ、伊賀ハ七尾城ニ入テ後見ヲナス、綱連モ同ク入城シテ、專ラ國政ヲ執リ、二人義心ヲ合セテ補弼スレハ、續光本意ヲ失ス、故ヲ以テ、游佐ノ黨服セス、藩臣ノ心一致セス、略下

〔上杉輝虎公記〕

(天正四)

二月四日、能登七尾城主畠山義隆、其臣長對馬等ニ鳩セラル、部下

黨ヲ立テ相軋ル、溫井景隆、長高、連平、高知三宅長盛、遊佐盛光等我ニ屬シ、而テ對馬等、信長ニ通ズ、是ニ於テ公終ニ信長ト絶ス、

三月大甲子朔盡

十七日庚辰、越中日宮城主神保長職、援ヲ謙信ニ請フ、仍リテ、謙信、同國ニ入り、是日、神通川ヲ渡リテ將ニ守山、湯山ノ二城ヲ攻メントス、

〔長文書〕

○越中史料一所收

如被申越長職色々被歎候間、不圖出馬、十七日(越中)神通越河、十九三日之内、敵地悉落居、内々守山、湯山可擬落處、六同寺斷而水増故、于今不被越河候、於時宜者可心安候、被入心御飛脚早々喜悅候、可加懇意心中ニ候間、同意肝心候、恐々謹言、
(天正四)三月廿日 謙信

溫井兵庫助 長綱連

溫井兵庫助殿 長九郎左衛門殿

平新左衛門 遊佐孫太郎

平新左衛門殿 遊佐孫太郎殿

○謙信、越中梅尾、増山ノ二城ヲ陷レ、湯山城ヲ攻圍スルコト、九月八日ノ條ニ見ユ、蓋シ、謙信、一旦歸國シ、再ビ越中ニ侵入セルナラン、

〔參考〕

〔越登賀三州志〕

韃毳餘考七

○上略、天正四年三月ノ條

夫ヨリ又、越中ニ來リテ、富山城ヲ攻城、主神

守山城 神保氏信 増山城ヲ守ル

保安藝守氏(氏張)春、其男清十郎、同姓、越中守正武、富山城ヲ棄テ守山城

在射水郡詳ニ保シ、

城邊ニ湖水ヲ激入ノ固守ス、石黒左近ハ木舟城ニ礪波在テ之カ援勢ヲナス、神保兵

庫氏信氏春ノ叔父、増山城ヲ守ル、一説、此時謙信増山ヲ陷シ、氏信自殺ト云、景周又古記ヲ考ル、號スルハ、此因テ、謙信、小笠原右馬助、上杉民部ヲ富山ヲ守ラシメ、神通川ヲ涉テ射

水郡ヘ亂入ス、神保ノ黨久世、但馬、益木中務、游佐信濃、小島倉光、鞍智寺崎、唐人小島以下古記名、等、關野高岡ニ出張之ヲ拒ム、謙信、夜之ヲ撃テ追拂ヒ、賀州ヘ向フ、略下

天正四年三月十七日

三二九

天正四年三月三十日 四月十日

射水郡

湯山城

井口 湯山 森寺 在八代庄三名一蹟也、今村唱ニハ井山古城ト號スレモ、井山ニ非ス、湯山トモ云、本丸縱十七間、横十間、二丸縱四十八間、横二十八間、本丸ノ西ニ調馬場跡三間ニテ、餘アリ、又、洞井アリ、此地今皆爲陸田、自森寺邑六七町、自高岡五里強アリ、

天正五年閏七月、有坂備中ヲノ湯山左衛門續甚島山家ノ、ノ湯山城ヲ攻取、河田主膳一作ヲ置ニミユ、七年五月長連龍之ヲ攻ルユヘ、城主河田降ヲ乞テ京師ヘ退去ス

一、見長氏家記

三十日、巳、癸謙信、佐藤平左衛門ニ給分ヲ安堵セシム、

〔別歴代古案〕九

從前々持候さうふん、いづ物とく、まよやく共ニ出之候者也、仍如件、

天正四年

三月卅日 御朱印 (謙信)

佐藤平左衛門殿

四月 小、盡、甲子朔

十日、癸、西景勝、泉澤又五郎ニ地ヲ宛行フ、

〔歴代古案〕五 羽前

まいこの内、十貫、此外屋敷七けん出之候者也、仍如件、

天正四年

四月十日

五月 大、盡、癸巳朔

二日、甲、午三好家慶、安田頼家、上杉家作事方トナリテ誓書ヲ納ル、

〔上杉家文書〕精選古案

天(罰)つ(起)き(詩)ま(文)やう(事)もん(事)

右いしゆ(意、趣)の、こんど御さくち(作、事)よさしおかき(如、才)るきよし、おほせいたされ候(始、末)を、こしも

ふさたをそんし申(儀)ましき事、

一 おうせ(道、具)はけらる(御、力)き、そこし(同、然)もちよさいをそん(始、末)をぬしく事、

一 御さくち(路、次、透)よは(無、道)ひて、御あつけ(道、具)の御たう(御、力)く、お(同、然)くるとう(始、末)せん(始、末)にとり(始、末)ま(始、末)ぬつ申(始、末)るき事、

一 ろし(路、次、透)を(無、道)う(無、道)しの事(無、道)ハ、申(無、道)よお(無、道)よ(無、道)そ(無、道)す、そ(無、道)う(無、道)たい(無、道)、ふ(無、道)と(無、道)う(無、道)ら(無、道)う(無、道)せ(無、道)き(無、道)、げん(無、道)く(無、道)こ(無、道)う(無、道)ろ(無、道)ん(無、道)い

たすましき事、

一 なよ事におゐても、御うしろくらき事、そんをましき事、

天正四年五月二日

無沙汰ヲ存スベカラザルコト下命ヲ遵奉スルコト道具始末ノコトろしずかしノ事喧騒等セザルコト心事公明ノコト

天正四年五月十六日

三三二

上ニ者梵天帝釋四大天王、下ニ者堅寧地神、惣而日本國中大小之神起、殊ニ者日光月光、摩利支尊天、愛宕大權現、飯繩大明神、關三所權現、藏王權現、彌彥大明神、二田大井、八幡大井、春日大明神、府中六所大明神、天滿天神、可蒙御罰者也、仍起請文如件、

天正四年五月二日

三好又五郎

家慶(花押)

安田與左衛門

賴家(花押)

吉江資堅

(吉江資堅) 喜四郎殿

十六日、戊足利義昭、三寶院義堯ニ託シ、謙信ヲシテ、武田・北條二氏ト和シ、以テ足利氏ノ再興ヲ謀ラシム、是日、義堯、謙信ノ將長景連ニ、コレヲ斡旋セシム、

〔歷代古案〕四 ○羽前

富藏院 義昭海路 困難ナルヲ以テ東國ニ赴カズ 河伊

舊冬差越富藏院候處、種々入魂之由、尤快然候、則至東國、可被移御座處、海路難合期、故御延引、非御油斷通、得其意、可申越旨、被仰出候、越甲相三和之儀、謙信於被應上意者、御入洛可爲眼前候、然者、謙信以御覺悟、御當家御再興之條、年來被止宿意、入眼候様可被取成儀、併被對公儀、御忠切不可過之候、馳走之段、内々達上聞候、尙、河伊可申候、恐々謹言、

言、

(天正四) 五月十六日

(景連) (附記) 長殿(長左五衛門先祖)

(附記) (三寶院僧正也) 義堯

○義昭、京都ヲ没落スルコト、元年七月二十九日ノ條ニ、備後鞆ニ在ルコト、六月十一日ノ條ニ見ユ、

十八日、庚謙信、本願寺光佐ト和シテ、之ヲ加賀奥政堯ニ報ズ、是日、政堯答謝ス、

〔河田文書〕○羽前 河田親一氏所藏

謙信政堯ニ馬ヲ贈ル

就今度御一和之儀、御書畏而頂戴、并御馬拜領、忝奉存候、委細專柳齋申入候、此等之趣、宜奉得尊意候、恐々謹言、

(天正四) 五月十八日

(奥) 政堯

吉江資堅

(資堅) 吉江喜四郎殿

河田長親

(長親) 河田豊前守殿

鯨坂長實

(長實) 鯨坂清介殿

二十八日、庚織田信長、大坂本願寺ヲ攻ム、是日、加賀一向一揆洲崎景勝等、七里賴周等ニ請フテ、謙信ノ出援ヲ跂望ス、

天正四年五月十八日 二十八日

三三三

天正四年五月二十八日

〔笹生氏所藏文書〕○羽

態令啓達候、仍今度信長對大坂殿、雖及手遣、度度失大利候、然者御屋形(謙信)樣御出馬之儀、
(越後)越府江被仰越候樣承及候、様子如何之御事候哉、御出馬付而者、各致分別當表へ行可
在之候、若又御出馬御延引之由候者、左様之段承届、始末可致調談候、兎角早々御出馬
候様、御才覺尤可然存候、恐々謹言、

天正四

五月廿八日

藤丸新介 勝俊(花押)

德田志摩守

廣瀬伊賀守 重清(花押)

高桑源左衛門 貞清(花押)

奥近江守

武數(花押)

山本若狹守

政堯(花押)

家藝(花押)

山本家藝

窪田綱盛

鏑木賴信

石黒政長

洲崎景勝

坪坂伯耆
入道
廣濟寺

窪田大炊允

綱盛(花押)

鏑木右衛門

賴信(花押)

石黒土佐守

政長(花押)

洲崎藤八郎

景勝(花押)

七里(頼周)三河法橋御坊

坪坂伯耆入道殿

廣濟寺
參御宿所

六月小盡
癸亥朔

十一日酉、是ヨリ先、足利義昭、備後鞆ニ赴キ、安藝毛利輝元ニ倚ル、輝元、謙信ニ、
義昭ノ爲ニ京都ヲ恢復センコトヲ望ム、是日、謙信之ヲ諾シ、越前加賀ノ一向一

天正四年六月十一日

揆ト和シテ京都ニ上ランコトヲ報ジ、且ツ、輝元ニ上洛センコトヲ求ム、
〔南行雜錄〕

二月八日
義昭輶
赴ク

當國下向之事、對輝元(毛利)度々雖申遣、俱者織田依相談、加思慮之由、被聞召候、然者、信長逆
意既令露顯條、先到輶相越候、此節急度令異見、馳走肝要候、於京都可抽忠節旨、每度令
言上、此中疎略之體無是非次第二候、委細申含上野大和守(秀政)、小林民部少輔候、猶昭光可
申候也、恐々謹言、

二月八日
(天正四)

義昭御判

安國寺惠

安國寺

義昭各所
ニ流浪ス

〔安西軍策〕

大納言義昭卿、一色式部大輔飯河肥後守武田刑部少輔等計御供申、宇
治ノ真木ノ島ヲ出、紀伊國宮崎ニ落魄居給ケルガ、角テモ逆臣ヲ亡シ、天下靜謐ノ御
企モ難成思召、宮崎ヲ惑出、明石ノ浦ニ漕寄、宇喜田和泉守ヲ頼マレシカドモ、難面持
ケレバ、暫ノ御逗留モナク、其ヨリ備後ノ輶ニ著、輝元元春隆景ヲ偏頼思召ノ通被仰
下、三家其外ノ一族郎等集會ノ、僉議區々成シガ、終ニ頼マレ給ベキニ定リテ、頓御請
申サセ給ケリ、是ヨリソ、信長ト毛利家ト一向矛盾ニ及ケリ、

〔福山志料〕三十一 附錄

織田毛利
兩氏斷交
ス

北國ヲ平
定シ來秋
ヲ以テ西
上セン

上意承了、其表被成置御座、御入洛之儀、輝元頻而御憑候處、則御請、依之當方迄被凌遠
境、馳走可申由候歟、此以前越賀(一向一揆)一和、北國無別儀申付、來秋可打登調、聊無油斷候、此時
節被御取成、輝元於□□内上意□□被申御入洛、畢竟旁工夫可有之候、御□申届、輝元
依來札令馳一翰候、猶彼可有口上候、恐々謹言、

六月十一日
(天正四)

謙信(花押)

小早川左衛門佐殿

〔上杉家古文書〕

上意(足利義昭)樣、至當國被移御座、御入洛之儀被仰出候之條、可致馳走之通、捧御請文、既至泉、攝
表兵船被差上之趣、得貴意候處、先月十一日之御書、今月廿三日拜見仕候、越賀被遂御
和陸、北國衆被召具、急度織田方分國可有御出馬之旨、被仰聞候、致承知候、ハ、八月二日
收ム、ノ條ニ

七月廿七日

駿河守元春花押

謹上 直江大和守殿

先日捧書狀候之處、爲御返書去六月十一日、芳墨到來致拜見候、誠以珍重之至候、如仰

天正四年六月十一日

就公方様御動座之儀、致御請候趣、得御意候喜、御懇被仰下畏入候、抑貴國賀州被成御和融、當秋可被及御行之由、尤肝要存候、從上意様、去比以上使被仰進之條、漸可爲著國候、彌被應御下知、御馳走此節候、○下略、全文ハ、八月二日ノ條ニ收ム、

八月二日

(毛利)輝元(花押)

上杉殿

〔上杉家譜〕

參人々御中是ヨリ先キ、足利義昭事ヲ以テ信長ト隙アリ、兵ヲ舉テ之ヲ討ス、勝

信長安土ニ城ヲ築キテ越後ニ備フ

事能ハス、槇島城ニ據ル、城陷リテ若江ニ徙サル、後ニ和泉紀伊播磨諸國ニ流寓シ、終ニ毛利右馬頭輝元ニ依リ、備後鞆津ニ居ル、使ヲ越後ニ遣シ、輝虎ニ托スルニ回復ヲ以テス、越前ヨリ江州ヲ攻ムルヲ請フ、使書相續ク、輝元亦數書ヲ贈テ東西信長ヲ挾攻セントス、輝虎之ヲ聽ス、輝虎方ニ越中加賀ニ事アルヲ以テ、直チニ江州ニ入ル事能ハス、信長、柴田修理進勝家、前田又左衛門利家ニ越前ヲ與ヘ、江州安土ニ居城ヲ築キ、大ニ輝虎ニ備フ、

十二日、戊、甲足利義昭復、謙信ヲ促シテ、武田・北條兩氏ト和シ、京都ヲ回復センコトヲ求ム、又、武田信豊ヲシテ、コレヲ同勝頼ニ勸メシム、
〔上杉年譜〕十九

義昭謙信ニ内書ヲ送ル

今度至當國(備後)被移御座之處、毛利可致馳走旨言上、既海陸被及行候、此節越甲相被遂三和、可被勵忠功段、偏被頼思召候、仍被成御内書候、委細被仰含大館兵部少輔被差越候、猶得御意可申入由候、可得御意候、恐々謹言、

槇嶋玄蕃允

昭光

槇嶋昭光

(天正四)六月十二日

(上杉謙信)彈正少弼殿

人々御中

〔古今消息集〕

今度至當國被移御座、毛利出勢之事被仰出處、則捧御請狀、既海陸被及行候、委細輝元被申越條、勝頼可有御相談段、肝要被思食候、仍被成御内書被差越、大藏院候、雖御鬱憤繁多候、此節甲相越被遂三和、於被勵戰功者、尤可爲御感悅旨、對光祿可被加意見通、猶得其意、可申由被仰出候、恐々謹言、

六月十二日

(真木島)昭光判

(信豊)武田左馬助殿

武田信豊

使僧大藏院

公方様至當國被移御座、輝元可致馳走之由被仰出候條、存其旨通、捧御請文、既及海陸

天正四年六月十二日

天正四年六月二十日

三四〇

行候、然者、播州之事ハ、從此方申付候、其外五畿内并隣國之儀、御武略最中候、浦邊者今度警固船差上付而、爲始淡路屬一味候、仍貴國事此節可被抽御忠義之由、被成御内書候、被對申上意、急度境内御出勢肝要候、將又相州、越州御和睦之義、被仰操候之條、被應御下知、於一同之御働者、猶以當方可爲本望候、委細上使大藏院可有演說候、恐々謹言、

六月十二日

小早川隆景
福原貞俊
口羽通良
吉川元春

(小早川) 隆景判
(福原) 貞俊判
(口羽) 通良判
(吉川) 元春判

武田左馬助殿
御宿所

○謙信、義昭ノ依托ヲ諾スルコト、六月二十五日ノ條ニ、勝頼同ジク義昭ノ命ニ應ズルコト、九月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十日、謙信、本願寺光佐ノ請託ニ因リテ、將ニ兵ヲ京都ニ出サントシ、山崎秀仙ヲ越中ニ遣シテ、コレヲ河田長親等ニ傳ヘ、且ツ、加賀ヲ經テ大坂ニ到ラシム、是日、長親等答報ス、

〔吉江文書〕前羽

常上院ヲ
案内者ト
ス

御書謹而頂戴、來秋御調儀付而、爲上使(山崎秀仙)專柳齋被差登、以御條目被仰出旨、具承届奉得、其意候、折節御上使常上院滯留候、彼方大坂并賀國案内者御坐候間、兩人彼者相添賀州へ差越申候、返答之趣、委曲專柳齋歸參之剋、可申上候、是等之趣、宜預御披露候、恐々謹言、

河田豊前守

(天正四)
六月廿日

長親

鱒坂清介

長實

鱒坂長實
吉江資堅

吉江喜四郎殿
(資堅)

○謙信、本願寺ト和スルコト、五月十八日ノ條ニ、加賀一向一揆等、謙信ノ出援ヲ望ムコト、同二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔上杉輝虎公記〕 天正四年六月二十日、是ヨリ前、本願寺光佐、僧常上院ヲ遣ハシ援ヲ公ニ請フ、七里賴周等加賀ニ在リ、亦狀ヲ報ジ、援ヲ請フ、公許諾シ、秋涼ヲ期シテ京師ニ詣ントシ、山崎專柳齋、河田窓隣軒ニ命ジ、之ニ答ヘシム、因テ常上院ニ托シ、大坂

天正四年六月二十日

三四一

天正四年六月二十五日

三四二

及ビ加賀ノ先導ヲナサシム、
二十五日、謙信、足利義昭ノ依託ヲ受ケテ武田・北條二氏ト和シ、京都回復ノ事
ニ當ランコトヲ諾ス、是日、義昭コレヲ成福院ニ報ズ、

〔上杉家古文書〕

日珠
英快

藤安日珠馳上、北東和平之儀、謙信以無二之覺悟、可一著之段、被聞食訖、尤感悅不淺候、
彌頼入之通、可演說候、次英快事、于今滯留辛勞候、此表之儀、委細兩三人可申越候也、
(天正四)
六月廿五日
(足利義昭)
(花押)

成福院

今村猪介

今度條々被加上意候處、以朱印早速被及御請段、御感不斜候、御本意眼前候、彌火急御
入洛之儀、御馳走頼被思召之由、以御内書被仰出候當表之様躰、今村猪介仁申含候、期
來信候、恐々謹言、

八月五日

(三寶院)
義堯(花押)

不識庵

玉床下
○義昭、謙信ヲ促シテ、武田・北條二氏ト和シ、京都恢復ノコトニ當ランコトヲ求

ムルコト六月十二日ノ條ニ見ユ、

七月壬辰朔

二日、癸巳上杉政勝、越後鵜川神社祠官、軍役過怠ニ仍リテ、社領ヲ沒收スベキヲ赦
シ、更メテコレヲ授ケ、且ツ、安堵セシム、

〔鵜川神社文書〕○越

八幡田
八社

就軍役過怠、彼地八幡田之儀、可召放由存候へ、共様々致詫言候間、新而出之候、於向後
者、八社詫言仕候共、於彼地相違有間敷候、連々宮之儀取立可申候、仍如件、

天正四年

(上杉)
政勝(花押)

七月二日

千日大夫

千日大夫

〔白川領風土記〕

十六越後國之部二刈羽
郡鵜川庄鏡之郷批把島村

鵜川神社

○中天正四年七月二日、上杉七

郎政勝按、北越軍記、上杉左衛門尉政勝、參詣、神領相違ナク寄附シ、宮殿連々修造ノ判物ア

リ、○下

〔附錄〕

○左ノ文書二通、便宜附收ス、

天正四年七月二日

三四三

天正四年七月二日

三四四

八社神領

〔鵜川神社文書〕

○越後

千苧 此増百五拾參束苧

此米參俵貳升

長谷河

ちやう

天正十四八月廿五日

長谷河(花押)

ちやう(黒印)

神田信吉

(神田) 信吉(花押)

(社) 八志や

参 二日

苧羽郡鵜河庄繩討之一番

八社神領分

合而貳町八段貳百七拾坪

此代四貫九百拾貳文

笠原久家

天正十八

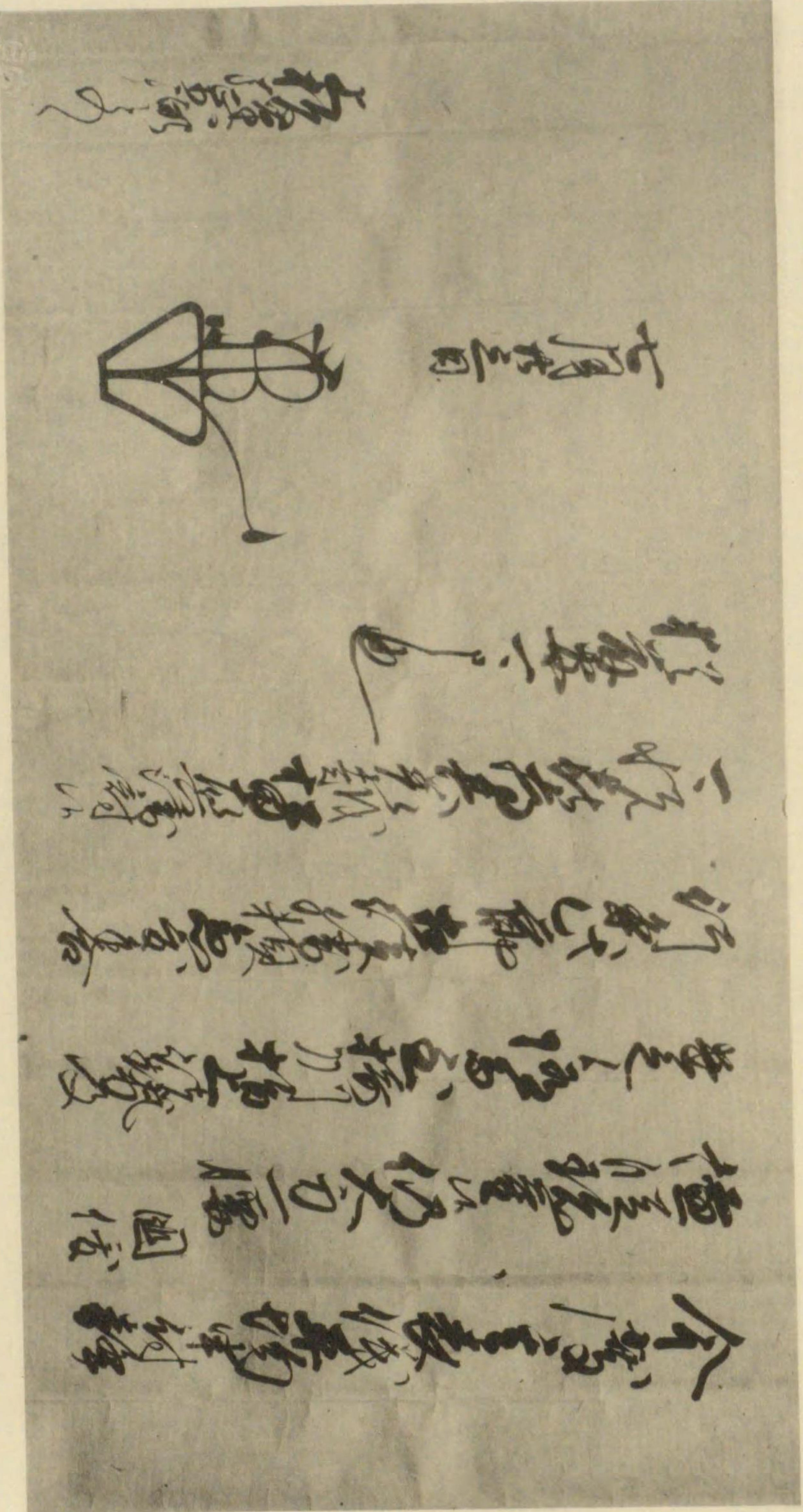
霜月廿八日

笠原大膳助

久家(花押)

丸田源丞

上杉伯爵家所藏



足利義昭内書

丸田盛房

八社大夫との

盛房(花押)

二十三日、寅足利義昭、兵ヲ攝津ニ出シテ、コレヲ謙信ニ告ゲ、武田勝頼ト協力シテ、京都回復ノ爲ニ力ヲ盡サンコトヲ求ム、

〔上杉文書〕〇羽前

義昭國俊
刀ヲ贈ル

今度其表儀、平均申付、靜謐段、珍重候、仍、太刀一腰、國俊遣之候、隨而至攝州、指上諸勢及行條、此節相談勝頼、急度手合可悦喜、爲其差越松田左兵衛尉候、猶藤安可申候也、

(天正四)
七月廿三日

(花押)
(足利義昭)

上杉彈正少弼とのへ

○毛利輝元、義昭ノ命ニ因リテ、兵船ヲ大坂ニ出スコト、及ビ、義昭、使ヲ謙信ニ遣スコト、次ノ條ニ見ユ、

八月 大辛酉 盡朔

二日、戌毛利輝元、兵船ヲ大坂ニ進メ、本願寺ヲ援テ織田信長ト戦ヒ、是日、ソノ戦況ヲ謙信ニ報ジ、且ツ、速ニ兵ヲ京都ニ出サンコトヲ求ム、

〔吉川家文書〕

天正四年七月二十三日 八月二日

義昭大坂
灣頭ノ海
戰ヲ賀ス
謙信トノ
聯合ヲ吉
川元春ニ
通セシム

天正四年八月二日

三四六

今度差上艦兵敵船早速切崩數多討捕段無比類旨對輝元可申聞爲其指下一色宮內(昭辰)
少輔候諸士粉骨神妙之由褒美肝要候次輝虎言上之通委細秀政昭光可申越候也

七月廿五日

花押(足利義昭)

吉川駿河守とのへ

加賀一向
一揆謙信
ト和ス

至大坂表被差上兵船敵即時被切崩數多被討捕之段無比類被思食候仍被成御内書
被差越一色宮内少輔候今度被勵戰功對諸士御褒美肝要旨將亦上杉加州和與之
儀被加御下知處被及御請既向越前口可致出勢由言上候委細被仰含昭辰候猶得其
意可申由被仰出候恐々謹言

上野秀政

七月廿五日

昭光(真木鳴)
花押(上野)
秀政(花押)

吉川駿河守殿

〔上杉家古文書〕

表書
上杉殿
參人々御中

毛利左馬頭
輝元

先日捧書狀候之處爲御返書去六月十一日芳墨到來致拜見候誠以珍重之至候如仰

大坂ノ戰
況
兵糧ヲ大
坂城ニ入
ル

就公方樣御動座之儀致御請候趣得御意候喜御懇被仰下畏入候抑貴國賀州被成御
和融當秋可被及御行之由尤肝要存候從上意樣茂去比以上使被仰進之條漸可爲著
國候彌被應御下知御馳走此節候將又此方事至大坂諸警固船差上於木津河口去十
三日敵船數艘切崩千余人射捕之至寺内兵糧入置之得太利候先以本望存候西口之
事如此無寸暇相催候早々賀州被仰談御出馬不可有御遲滯候於然者此御報嚴重示
預尙以當方海陸軍勞不可存油斷候猶小早川吉川并老共可窺貴慮候恐惶謹言

八月二日

輝元(花押)

上杉殿
參人々御中

大坂ノ海
戰

上意樣至當國被移御座御入洛之儀被仰出候之條可致馳走之通捧御請文既至泉攝
表兵船被差上之趣得貴意候處先月十一日之御書今月廿三日拜見仕候越賀被遂御
和睦北國衆被召具急度織田方分國可有御出馬之旨被仰聞候承知候當方之儀去十
三日大坂表警固船盪上候之處自敵方行爲可相支之大船十艘余構勢樓其外小船三
百余艘河口取切此方警固遂一戰敵船數百艘即時切崩信長警固大將爲始谷輪主馬
兵衛尉沼間伊賀守沼間越中守小畠大隅守和泉河内攝津國宗徒之者共貳千余討果

天正四年八月二日

三四七

元春甲相
ト和セン
コトヲ謙
信ニ勸ム
義昭藤安
及ビ大藏
院ヲ越後
ニ遣ス

得_レ太利大坂城中兵糧差籠、無所殘被申付候、定而可_レ被聞召付候、此口之儀一切不可存
緩條貴國之儀、甲越相御和融被仰談、可_レ被抽御忠儀事、尤珍重存候、爲_レ御上使大館殿大
藏院被差上候、漸可_レ爲_レ上著候條、御馳走肝要存候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、
七月廿七日
駿河守元春(吉川)花押

直江(景綱)太和守殿

六日、丙寅北條氏政、足利義昭ノ命ニ從ヒ、上杉、武田兩氏ト和センコトヲ諾ス、

〔南行雜錄〕

就_レ甲越相三和之儀、被指下大和淡路守、御内書謹致頂戴候、去春以陽春軒被仰出候砌、
如_レ及御下知之外、不可有之候、此旨可預御披露候、恐惶謹言、

八月六日

左京大夫氏政(北條)

眞木島玄蕃頭殿(昭光)

武田勝頼
三和ヲ諾
スル上ハ
異議ナシ

就_レ入洛之儀、武田勝頼可_レ及_レ行之旨申上候哉、然者一同可_レ致出勢趣、被仰出候、奉_レ存其旨
候、宜預御披露候、恐惶謹言、

八月六日

左京大夫氏政

眞木島玄蕃頭殿

就_レ三和之儀、被指下大和淡路守候、氏政是非共御下知之外、不可有之候、可_レ然之様御披
露頼入候、恐々謹言、

八月六日

左京大夫氏政

眞木島玄蕃頭殿

覺

一此度被仰出條々、過分至極、無是非事、
一三和之儀、甲越兩國者速相濟、畢竟越國へ可_レ相極御下知候、於_レ氏政者、拋_レ依所、御入洛
成就之儀付者、何様之儀候、共難澁申間敷候事、
一當表始中終様子之事、

氏政三和
ニ對シ主
張ヲ棄テ
同意ス

伊兵

石卷

伊兵

石卷

○義昭謙信ニ、北條氏ト和シテ、カヲ京都恢復ニ盡サシムルコト、六月十二日ノ

天正四年八月六日

天正四年八月十三日

三五〇

條ニ謙信コレヲ諾スルコト、同月二十五日ノ條ニ見ユ、
十三日西、足利義昭、加賀ノ一向一揆覺隙ヲ生ジテ、謙信ノ西上ヲ阻礙スルヲ聞
キ、本願寺ニ命ジテコレヲ諭サシメ、是日、コレヲ謙信ニ報ジテ、越前ニ進軍セン
コトヲ求ム、

〔歷代古案〕一羽前

就歸洛儀、即令出馬、兩國存分申付、手合相待由喜入候、殊對當家、彌無二覺悟旨、以內々
言上候趣、被聞召訖、寔賴母敷段、感悅候、然者、依賀州之儀、出陣相滯之由候間、本願寺達
而加異見、無異存候、此上者、急度至越前亂入肝要候、毛利于今遂在陣、方々得勝利、抽粉
骨之條、無油斷可動干戈事、可爲神妙候、重而大館兵部少輔差越候、猶輝元、隆景可申也、

(天正四)
八月十三日

(足利義昭)
(花押)

不識院

〔上杉家古文書〕

就御歸洛儀、最前被任御請旨、則有御出馬、加州逆徒等雖被屬御存分候、諸口不相調條、
先至能州御亂入、國中平均被仰付由、尤珍重被思食、殊被對御當家、彌御覺悟無二旨、誠
以御感悅此事候、仍被成御內書、重而被差下大館兵部少輔候、然者、加州之一儀付而、上

加賀一揆
トノ間調
ハズ兵ヲ
能登ニ出
ス

口御出馬相滯由候間、本願寺江達而被加御異見、被及御請候以上者、急度越前表御行
肝要旨、上意候、于今毛利被遂在陣、方々被得勝利、條此節御手合段、可爲御祝著候、猶得
其意、可申入由、被仰出候、恐惶謹言、

八月十三日

(二色)
昭秀(花押)
(真木島)
昭光(花押)

不識院大和尚法印御房

人々御中

〔石川縣廳所藏文書〕

〇加賀
記所收

謹而致言上候、當國之儀、數錯亂と乍申、去年既ニ信長亂入、港之川緣迄令放火、雖及一
大事候、北兩郡之義、堅固相抱、聊不存油斷、各竭粉骨、如形御本意之姿、御座候、然ハ爲御
上使七里(賴周)三河法橋御下國被成、御書并被加御袖判、御一書之御條旨も、御上使と成
水魚之思、互ニ可致相談之由、被仰下候、即金澤於御堂各被致頂戴、忝奉存、國中面々ハ
不及申、末々迄、七三(賴周)於御眼前加判形、一味同心申聞候、其後之御書度々之御狀も、御
上使と諸事以入魂、可致調談之由、被仰下候、然處ニ、今度鐮木右衛門身上之儀、逆意之
子細候條、可被加御成敗之由之儀、能美郡山内之人數被引出、既彼館へ被押寄、鐮木及
難義候、其後北兩郡へ預御觸狀、於石川郡逆意之輩在之條、可被打果之由、被成御坐候、

天正四年八月十三日

三五二

能美江沼
兩郡ノ陳
情
七里賴周
加賀ニ來
リテ一揆
ヲ督ス

賴周鐮木
賴信ヲ攻

天正四年八月十三日

三五二

右如申上候御條數之筋目令相違一度不被及御糺明不限彼一人石川河北之面々歷々可被討果之由御造意無隱候併逆意於必定者前代未聞之義候之條爲國中急度可申候自然於申掠者一人も大切之時分ニ候條鑄木逆意徹所并被仰出候御一書之筋目相違之處存爲可承屈北兩郡罷出候處七三諸事無謂御全歷然付而御退出候總別七三御下國以來所々用害之儀種々御斷雖申上候如何之御分別候哉兎角被仰延終於當國大敵可相防地利をも無御用意候條御身之上之儀始末見分不申候間右之以意趣可申達覺悟雖御坐候去年杉浦殿惡逆ニ付而御生害之時不奉憚上義之由内々被仰下候條致遠慮候隨而去年信長亂入之剋南兩郡之儀者無訛際候條北兩郡以誓詞血判奉守御誼一味ニ申合候處洲崎藤八郎相被彼誓詞諸事恣之條爲衆中如申合致成敗候兎角向後之儀定而種々從敵地計策可有御坐候歟自然如斯不被及糺明之義各歎々敷奉存候此上之義如何様之申掠御坐候共能々被遂御糺明被仰出候者各忝可奉存候宜得尊意候恐々謹言

蛭川重親

八月二日

蛭川新七郎

重親(黒印)

同組中

(花押)

洲崎景勝
ノ違背

杉浦生害

一揆頼周
ニ服セズ

廣瀬貞治

廣瀬伊賀守

貞治(花押)

同組中

(花押)

長谷川秀盛

長谷川勘十郎

秀盛(花押)

同組中

(花押)

伊藤政誠

伊藤宗次郎

政誠(花押)

同組中

(花押)

奥政堯

奥近江守

政堯(花押)

同組中

(花押)

龜田岳信

龜田小三郎

岳信(花押)

同組中

(花押)

天正四年八月十三日

三五三

天正四年八月十三日

三五四

高桑茂數

高桑源左衛門

茂數(花押)

同組中

(花押)

山壹番

總組中(花押)

山本若狹守

家藝(花押)

同組中

(花押)

六ヶ總組中(花押)

窪田大炊允

經忠(花押)

同組中

(花押)

西緣總組中(花押)

鏑木右衛門尉

賴信(花押)

鏑木賴信

窪田經忠

山本家藝

河合虎春

同組中

(花押)

河合虎春花押

同組中

(花押)

米當總組中(花押)

石黒土佐守

政辰(花押)

石黒政辰

同組中

(花押)

刑部卿法眼御房

參人々御中

〔参考〕

〔上杉輝虎公記〕

天正四年八月二十一日、是ヨリ前、七里賴周、加賀ニ抵リ、門徒ヲ統

督スルヤ、門徒或ハ服セズ、賴周乃チ其巨魁鏑木賴信、奥政堯等ヲ攻撃ス、是ニ於テ能

美、江沼兩郡ノ諸魁、之ヲ下間刑部ニ告訴ス、

九月

辛卯 盡

八日、戊辰謙信、越中梅尾・増山ノ二城ヲ陷レ、湯山城ヲ攻圍シ、又、飛驒口ニ二城ヲ

築キ、是日、コレヲ栗林政頼ニ報ジ、且ツ、關東口ノ警備ヲ嚴ニセシム、

天正四年九月八日

三五五

下間法眼

天正四年九月八日

三五六

〔栗林文書〕〇羽前

政頼關東ヨリ歸リ其情狀ヲ啓報ス

自關東歸陣ニ付而、飛脚到來喜悅候關左無事之由(肝)簡要候珍義茂候者、注進尤候其口人留之儀皆々談合候而、堅相留簡心候、吾分ハ案内者ニ候間、畢竟任置候、扱亦爰元備存分之儘ニ候、(越中)梅尾増山落居、飛州口ニ地利ニケ所取立、仕置堅固ニ成之、明日西表江進馬候、湯山も今明日之内ニ可落居候間、可心安候、萬吉重而謹言、

九月八日(天正四)

謙信(花押)

栗林次郎右衛門尉殿(政頼)

〔吉江文書〕〇羽前

七里頼周梅尾増山落城ヲ祝ス

急度令啓候、仍、(越中)梅尾増山落城、先以珍重之至、彌屬御本意申事、大慶此事候、〇下略、全文ハ、九日ノ條ニ收ム、

九月九日

頼周(七里)(花押)

吉江喜四郎殿(資堅)

御陣所

〔歷代古案〕〇羽前

織田信長形勢ニ依

至其表謙信就出馬注進之趣、聞届候、即、彼備飛脚差遣候、隨返事無事可相談候、不然者加勢之義急度可申付候、何偏不可見放候、其間之事、當城堅固可被相踏儀、簡要候、猶權

左衛門可申候、謹言、

九月一日

信長(織田)

リ加勢ヲ出サントス
水越左馬助

水越左馬助殿

〇謙信、越中ニ入り、守山、湯山ノ二城ヲ攻ムルコト、三月十七日ノ條ニ見ユ、蓋シ、謙信、一旦歸國シ、再ビ越中ニ入りシナラン、八月十三日ノ條參看スベシ、

〔附録〕

〇左ノ文書ハ、年次詳ナラザルモ、謙信ノ、越中戰鬪中ノコトナラン、仍リテ姑ク茲ニ掲グ、

〔歷代古案〕〇羽前

小四郎者ハ、彼飛脚申分ハ、今日道ニ合候由申候、其外未進之衆江ハ申届、重而可越候、扱亦、敵可一戰由申候、歟、これをこそ願事ニ候、可心安候、兎角實不堅、聞届、日限迄可爲聞候、少も其元江動候とて、取出間敷候、子細者候間、勝利眼前候、猶萬吉重而以上、猶々、敵之様子精聞届可申越候、以上、

九月廿四日

謙信

岩船藤左衛門殿

岩船藤左衛門

天正四年九月八日

三五七

天正四年九月九日

河田窓隣軒

河田窓隣軒

三五八

九日、己亥七里賴周、謙信ノ西上セントスルヲ聞キ、書ヲ吉江資堅ニ送り、加賀ノ叛徒ヲ糺彈シテ後ニセラレンコトヲ勸ム、尋デ、ソノ狀況ヲ河田長親ニ答報ス、

〔吉江文書〕前〇羽

(越中)

急度令啓候、仍、梅尾増山落城、先以珍重之至、彌屬御本意申事、大慶此事候、
一御出馬之儀、先書具令申候、此刻上口之御手圖無御遠慮様ニ御取成專一候、
一專柳齋其外當國境目迄御越之由承及候、如何之儀候哉様子承、爰許之儀致、分別度候、

秀仙等加賀國境ニ到ル

一國中逆心可有御糺明義、茂、大方ニ於御穿鑿者、可難遂糺決候哉、至于唯今、始終共

ニ無私曲、別儀有間敷之趣、雖令申候、更不可有異儀候、尙以其御心得專一候、

一御出馬相嫌申、墨付等常院江渡申候始末、可有御演說候、

一此表御出勢之儀、何篇急速ニ御行被成候様、御分別肝要存候、一揆等諸宰人至今

日迄御出馬之儀奉待事ニ候、所詮御才覺此節候、已上、恐々謹言、

九月九日

(天正四)

吉江喜四郎殿

御陣所

賴周(花押)

〔河田文書〕

前〇河田親一氏所藏

(越中)

謙信加賀ノ情狀ヲ頼周ニ問フ
謙信西上ノ阻礙ヲ除クニ苦心ス
松任城主鑄木頼信ヲ餘ス

御屋形様御直札忝令拜見候、仍至于貴國御出馬、梅尾増山落居、被仰付屬御本意之段、

御進發之御物裏珍重奉存候、然處京師の御行備等、御障無御座様、と依被申付、春以

來、篋本身上種々雖令異見候、無同心、終逆心不相止、如此次第候、若彼遺恨於有被押埋

者、御出馬之剋、必可成其妨之處、逆心之輩悉令成敗、召、鑄木一城寄責、既國中一統ニ罷

成候時者、至于只今、雖御出勢候、不可有異儀候條、滿足此事候、尤罷下御禮等可申上候

處、内輪取亂申故、不及其儀、慮外之至存候、此等之趣、宜預御披露奉仰候、恐々謹言、

九月十三日

(天正四)

賴周(花押)

河田豐前守殿

〇加賀一向一揆内証ノコト、八月十三日ノ條ニ見ユ、

二十八日、己未足利義昭、武田信豐ヲシテ、武田勝頼ニ勸メ、上杉・北條兩氏ト和シ、

力ヲ京都回復ノ事ニ盡サシム、是日、勝頼ソノ命ニ應ズ、

〔吉川家文書〕

至其表、公儀被移御座候、仍爲達上聞遊佐差下候、就其右馬頭、以一札申候、可然様被相

談、此刻急度可被遂御入洛事肝要候、然者此表之儀、紀州三ヶ寺申騒、不可有油斷候、隨

天正四年九月二十八日

三五九

天正四年九月二十八日

三六〇

而甲越兩國同入魂事候、於様子者、河内入道可申分候、當家之儀、別而御馳走憑入候、恐々謹言、

土岐賴英

(天正四) 五月十三日

(土岐) 賴英(花押)

吉川元春

吉川駿河守殿

進之候

〔古今消息集〕

就御入洛之儀、甲相越三和之儀、并其表御動爲可被差急、委細被仰含、信興差越之候、仍被成、御内書候、此度被對太守被加異見、御入眼段、簡要由、猶得其意、可申由被仰出候、御馳走可爲尤候、恐々謹言、

一色藤長

(天正四) 八月三日

一色式部少輔入道

(信豐) 武田左馬助殿

藤長

御内書謹而奉頂戴、過分忝存候、仍至播州、中國之御勢被指立、既上月之地被責落、楯籠凶徒被加御退治之間、御上洛之行、被差急候、由誠天下貴賤歡喜不可如之候、然者、御手合御催促候、尤奉存其旨、無猶豫候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

武田左馬助

九月十三日

信豐

真木島昭

進上 真木島玄蕃頭殿

〔翁物語〕

條目

一 雖未申通候、被奉對公儀、一途ニ御忠節之由ニ候條、自今以後、貴國當方異于他、爲可申合、以八重森因幡守申候、御内意可爲本望之事、
一 向大坂織田取出之地利數ヶ所相築取繕之由、自然至彼地不慮之儀出來候、慥公儀御入洛之障妨眼前候之條、大坂堅固之内、到京表御動座被差急、御執持極此一使之事、

付、於當方者御一左右次第、到尾濃三遠、可令張陣之事、

一去比、大坂へ兵糧被相移候之砌、船軍御勝利、御武勇之至、無是非候事、

一越、相申三和之事、付、條々、

一對貴國、大友方辜負之由、其聞候、縱雖爲御宿意重疊、先被閣御野心、有和睦、御入洛御馳走專一候事、

勝頼輝元
ニ通ジ聯
合セント
ス

越甲相三
和ヲ諾ス

天正四年九月二十八日

三六一

天正四年九月二十八日

三六一

一向後者相互行儀等都鄙一同ニ可被相定事、

已上

(武田) 勝頼(印)

九月十六日

藝州江

〔松平義行所藏文書〕一色家證文之内

就相越甲三和之儀、三ヶ國へ上使被指下候之處、或徒淹留、或上洛之由候條、同名甲斐守儀、茂先令歸洛、重而可奉得御下知之旨候之間、任其意候、然而至當口去月出馬、行等任存分候、可御心安候、畢竟公儀被達御本意候様ニ、萬方御計略肝心候、勝頼於御手合者、努々不可有猶豫候、委曲雇彼口上候之間、不能具候、恐々謹言、

九月廿八日

(藤長) 一色式部少輔殿

〔吉川家文書〕

就移座當國各禮儀祝著之通、對輝元申遣之候、然者、入洛之儀、東北國手合請如形到來、彌不可有別儀候、就中大坂堅固之内、可相催也、西國諸士至吉田、令集會來春義兵之行肝要、猶昭光、昭秀可申候也、

義昭謙信
勝頼ト輝
元ノ聯合
ヲ勸ム

十月十日

吉川駿河守とのへ

(尼利義昭) 花押

先度爲御使至吉田罷越候處、御懇意段畏入存候、仍御出勢御請之儀、御祝著之通、頓雖可被仰出候、各御參會之砌、一人被指越、東北國并幾内御請等被仰聞來、春御行彌爲可被相急、御延引候、就其去夏向越後、被差越使者處、早速令歸國、殊被表之儀、慥被聞食御感候、尙以此刻、始但丹兩州被廻御計策、御進發之御供奉肝要之旨、被仰出候、恐々謹言、

十一月十五日

(真木島) 昭光(花押)

吉川駿河守殿

〔吉川家文書〕

就來春御行之儀、中國諸士至吉田被召寄、御出張模樣尙以可被相下、由候キ、雖然、于今遲引旨候間、急度各被相催、可被遂御相談事、專一被思食候、彌於相下者、東北國御手合之儀、追々可被仰越候、隨而淡州岩屋之事、當時信長上洛之間、種々可廻計策候、此節爲御油斷者、不慮可令出來之條、御加勢等火急被指籠、無越度様可被仰付段、肝心旨上意候、爲其被差越飯尾大和守候、尙得其意、可申由被仰出候、恐々謹言、

天正四年九月二十八日

三六三

謙信義昭
ノ命ニ依
リ上洛セ
ントス

十一月廿八日

吉川駿河守殿

昭光(花押)

○義昭、勝頼ヲシテ、上杉北條兩氏ト和シテ、力ヲ京都回復ニ盡サシムルコト、六月十二日、廿五日、七月二十三日、八月二日ノ各條ニ見ユ、

十月大庚申朔

十五日、甲斐ノ僧教雅、紀伊高野山ニ在リテ、甲斐ノ國情ヲ越後上條談議所ノ僧空陀ニ報ジ、且ツ、老衰ノ爲ニ、越後ニ來リテ謙信ニ見參スルコト能ハザルヲ憾ム、

〔羽後成就院所藏文書〕

○歴代古案六所收

の便之條、令啓札候、抑、及廿ヶ年不遂、向顔、一瞬一刹那不存忘、御床敷候、先年越前迄預貴札候、其以後一兩度愚札ヲ進候キ、參著候哉、然者逐日眞俗繁榮之由、其聞候、拙身本望不過之候、
一拙者、越前より歸國已後、根來寺蓮花院ニ住寺候鶴、然者院家十萬極不辨、殊獨身大僧正候上、衆徒之同座不罷成、彼是指合六ヶ敷候間、今年春中、高野山令籠居候間、今者一段身上心易候、萬一大師へ御參詣被成候者、愚拙へ直ニ御尋有へく候、五日も

教雅根來寺蓮花院ニ住ス

十日も昔語申度念願迄候、

謙信ハ日本無雙ノ名大將
武田信玄謙信ヲ推稱ス

長篠戰後甲州人物乏シ

一其國之太守謙信、大方於太刀者日本無雙之名大將ニ而御入候由、(武田)信玄入道時々剋々愚拙へ物語ニ而候キ、如御存、我等も生得物數奇ニ而候間、一度者見參申度願望候、然共、年齢より令老衰候間、不及下向候、此儘相果候ハん事、無念至極候事、
一甲州衆者、去年三州ニ而討死候、相殘衆者、武田四郎同孫六、彦五郎、西山、小山、跡部、又八郎此六人迄ニ候、野々山道空、子共兵部ハ、先年果候相殘三人皆々死亡候、飯富源四郎、公藤源左衛門、少も名之有る者ハ、一人も不殘候、信州又同前ニ候、定而可有其聞事、

信玄彦五郎ニ迷沈

信玄ヲ調伏ス

一府中板垣客殿ニ而晚鐘之時分、貴老へ物語如申、信玄、彦五郎ニ迷陣(沈)いと、拙者へ種々狼藉無申計候キ、去程ニ令義絶歸寺候鶴、拙身企調伏候而、年々月々、千座萬座様々祈禱仕候キ、然共五十三ニ而死亡仕候、武信命期者六十五ニ而候、十三年命をつゝめ候、哀ニ候、此不とまて甲州より種々申子細候得共、拙身不差上候事、
一爰山住山萬一不辨至極ニ而、勘忍不罷成候者、爲勸進乞食ニ其國并出羽、奥州可令下向候、申迄ふき事ニ候得共、一宿等之事頼入候事、
一此左馬助ハ、若衆之時、我々室ニ而手習を志とる人ニ而候、唯今ハ人々之不めとる

天正四年十月十五日

若衆左馬之助

天正四年十月十五日

三六六

諸經ヲ註
解ス

氣分ニ候、諸事懇切所仰候事、
一拙身ハ今年五十七ニ而候、定而御存候へく候、去年夏中ハ、此所ニ而、瑜祇經を七十
餘日談議仕候、日々之坐毎ニ、貴所之事存出候而、聽聞させ申度候キ、其次瑜祇經五
卷之註を付候、乍恐末世の珍寶とるへく候、懸御目度事ニ候、入來春ハ、必藏經を談
し候へく候、是も七卷歟十卷歟の註を付へき分ニ候、大方今之世ニ、人々之一向齒
之、ハぬ經論ニ註を付度大願ニ候、此人々年々音信可被申候條御用も候は、可
承候、不可有疎意候、恐惶謹言、
(天正四)
十月十五日

甲州

教雅

長福寺
空陀法印

越後上條談義所
空陀法印御房

(附記)右書ハ、甲斐國圓昌坊ヨリ、越後國賀茂(前橋郡)ノ長福寺へ到來候、現ニ今、羽州最上吉次宮
成就院ニ有之、

〔參考〕

〔米澤地名選〕

瑠璃山長福寺、寺領二十五石、中越後加茂と云所に、此寺號あり、談義

所と名づく、

十一月小庚寅朔

十六日、乙本願寺光佐、謙信ノ求ニ依リテ、下間侍從法橋ヲ加賀ニ遣シ、一向一揆
ノ内訌ヲ鎮ム、謙信、亦光佐ノ望ニ依リテ、松任城兵及ビ奥政堯ヲ赦スヲ諾ス、是
日、加賀四郡ノ一揆等、鱒坂長實、吉江資堅等ニ、光佐ノ命ニ從フベキコトヲ答報
ス、

〔歷代古案〕七羽前

御書謹而致頂戴候、仍大坂御門跡へ被仰届、下間侍從法橋下國之儀、各満足奉存知候、
然者、(越中)松任出城之輩、並奥近江守被赦免之由奉得其意候、如何様共御門跡次第奉存
知候、委曲者河田窓隣軒可有御申候、此等之趣宜預御披露候、恐惶謹言、
(天正四)
霜月十六日

賀州四郡

鱒坂備中守殿

吉江喜四郎殿

河田豊前守殿

○足利義昭、本願寺ニ命ジテ、加賀一向一揆ヲ諭サシムルコト、八月十三日ノ條

天正四年十一月十六日

三六七

天正四年十二月十九日 二十四日

三六八

二見ユ、

十二月

大 己未朔

十九日、丁謙信、能登ヲ經略シテ、七尾城ヲ攻圍ス、是日、コレヲ越中勝興寺ニ答報ス、

〔寸金雜錄〕

就至于當國進發、態預音問祝著候、定而可有其聞得候、當州悉屬本意、七尾一城ニ被成候、城中逐日無力候、落居不可有疑候歟、於時宜者可御心易候、猶各申届候、恐々謹言、

(天正四) 極月十九日

謙信(花押)

勝興寺

〔長家記〕

天正四年十一月、上杉謙信率壹萬餘兵、亂入能州、依之、○本書、又、于時國主昌山式部義春、就于少年ヘリ、長綱連、引拂累代之居城穴水、與父續連弟四人、杉山伯耆則直、孝恩、寺新、右衛門連、常次、兵衛連、盛其餘一族并諸將、共各捨居城籠城、七尾守保、昌山義春、至翌五年三月、數度遂防戰、堅固相保、七尾城、○下二十四日、壬午謙信、能登石動城ヲ築キ、直江景綱等ヲシテコレヲ守ラシム、是日、景綱等連署シテ忠勤ヲ誓フ、

長綱連等
昌山義春
ヲ擁シテ
七尾ニ籠
城ス

〔歷代古案〕

○羽前

一上口無二被懸御心、殊當國能州被思召詰上者、此人數一騎一人無闕詰置、御詫次第可走廻候、此内御軍役候者、涯分召寄可申事、

十一增人數之義、是も御詫次第召寄來從、正月十日之内御用ニ罷立様ニ可申付事、付御後聞覺悟、表裏不存、不惜身命、是非共御詫次第可走回事、

一御普請并武前ニ而走廻候儀、御見除立見無之不存、如在、大小事共ニ可走廻事、付無道狼藉、又、越中賀州者不及申、當國も御手ニ付候郡郷、濫妨仕間敷事、

若此旨於偽申者、○以下神文略ス、

山吉米房丸

天正四年

米房丸

十二月廿四日

吉江喜四郎

吉江資堅

資堅

河田吉久

河田對馬守

吉久

直江大和守

天正四年十二月二十四日

三六九

天正五年二月十日

三七〇

杉原盛綱

柳新右衛門

舟見宮内大輔代
杉原彌左衛門

盛綱

舟見代
柳新右衛門

〔上杉年譜〕十九

天正四年冬十月中旬、能州石動城ヲ經搆在テ、直江大和守景綱ヲ城主ニ命シ給ヒ、小林左京亮河田對馬守吉江喜四郎ニ軍士ヲ相副、關東信州兩口ノ御令ヲ仰付ラル、是ハ定テ信長ト御手遣アラン爲ナルヘシト評議ス、同年冬十二月、石動城ニ指置レタル直江大和守ヲ始メ、他日ノ軍事ニ付、連署ヲ呈上ス、其詞曰、○誓ニ付キ略ス、

天正五年丁丑

紀元二千二百三十七年

二月 己未朔

十日、辰謙信、將ニ加賀ニ入ラントシテ、諸將ヲ召集ス、是日、越中ノ將神保氏張コレニ應ズ、

〔直海文書〕○上杉輝虎公記所收

御書拜見候、賀州未落居付而、被進御馬之由、尤奉存候、手前之義分際相當嗜、不可存油

斷候、此等之趣可預御披露候、恐々謹言、

(天正五)

二月十日

神保安藝守

氏張

吉江資堅

吉江喜四郎殿

〔歷代古案〕○羽前

就屬加州御手、被成御書被下、忝次第、即及御請候、御出馬之上、馳走可申上と被仰出、手前之儀聊不存、油斷候、可然様御取成之儀、奉頼存候、猶重而可得御意候、恐々謹言、

五月十三日

(小島職鎮)
小六左

小島職鎮

吉喜

參御宿所

十六日、戊甲梶原政景、北條氏政ノ關東侵略ヲ報ジテ、援ヲ謙信ニ請フ、佐竹義重、里見義弘、宇都宮廣綱、結城晴朝等亦コレヲ請フ、

〔上杉古文書〕○羽前

新年之御吉慶、千喜萬悅候、爲御祝儀、雁俣卅枚、進獻併奉表、御一儀迄候、仍、去年以來、兩三度以脚力、雖申達候、往還斷絶、故從半途罷歸候、當口之儀、無二被奉守御當國候、此節頓速御越山、令念願候、因茲從、(佐竹) (宇都宮)佐宮、結城被及使者候、委曲長與口門申含候、條奉略候、恐

天正五年二月十六日

三七一

關越路通
セズ

天正五年二月十六日

三七二

義弘ノ書
ヲ轉送ス

追啓達、舊冬從太田結城、以書狀被仰述候、并從義弘拙者へ之書中、爲御披見奉進覽候、

(天正五)
二月十六日

梶原源太

政景花押

越府

〔吉川金藏氏所藏文書〕

〇羽前

氏政上總
ヲ侵ス
兩酒井氏
氏政ニ降ル

其以後者、往還不自由故、遙々絶音問候、仍舊冬氏政當國東西へ相搖其上號有木地取立、椎津爲物主、下總捻番手ニ加、相州衆相抱候、兩酒井も、去年氏政ニ一味候、然而謙信去冬御越山相待候處、越中筋御陣故、無其儀、當春有御越山、氏政被相押候者、兩酒井并有木之地、押詰達本意度候、將亦加賀、越中能登迄御本意之由、其聞得候、一身之大慶此事候、急速有御越山、當年中厩橋ニ御在陣候付而者、上野之間、悉相調可申候間、武相之間迄も可有御調儀候、何篇御越山火急ニ相極候、委旨可有彼口舌候條、令省略恐々謹言、

二月廿八日

(里見)
義弘花押

直江大和守殿

〇謙信關東諸將ノ請ニ因リテ、兵ヲ上野ニ出サントスルコト、三月十八日ノ條

ニ見ユ

〔附録〕

〔歷代古案〕

〇羽前

其以往不申承候、去時分以脚力申入候キ、參著如何末罷歸候、抑新田手詰ニ付而、伊勢崎之地從南方近日普請被申付候、兵糧以下も差越由候、北源者小山物主落著、去月以來在城、是茂普請專ニ候、我等父子劬勞可爲御察候、御越山可爲何比候哉、當春夏之間御調義至子御遲延者、伊勢崎之儀者從南方入念候條、近年之御功作も不可有其曲候、何篇新田桐生手詰不及是非由候、千言萬句當春夏之間御越山相極候、御屋形へ雖可申達候、片便之間、無其儀候、仍此客僧愛宕へ有立願、毎年相立候、路次無相違様被加御詞任入候、諸餘期來音候、恐々謹言、

三月廿八日

梶原源太
政景

河田豐前守殿

柿崎和泉守殿

天正五年二月十六日

三七三

梶原政景
謙信ノ出
馬ヲ請フ

天正五年二月十六日

三七四

長尾遠江守殿

竹俣三河守殿

桐澤但馬守殿

神餘隼人殿

吉江喜四郎殿

水原彌四郎殿

安田治部少殿

○以下二通、年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

〔蓼沼文書〕○羽前

源太進退抛思慮(大和守直江景綱)入候處ニ被召出之由直江殿迄入念馳走不尋常由源太書

面ニ候愚老祝著難露紙面候彌馳走頼候源太子共者爰元ニ先々預置候是も今年中

移可然候源太事ハ屋形様有御膝下何向ニも愚老名字殘候様ニ意見專一ニ候此度

之御厚恩者六十餘州ニも改間敷候間御分國中ニ骨を殘し候へうしと愚存ニ候其

趣意見專一ニ候餘事後便ニ可申遣候間閣筆候謹言、

五月廿一日

(佐野天徳寺) 寶衍(花押)

蓼沼日向守

蓼沼日向守とのへ

十七日、亥謙信、萩田孫十郎ニ一字ヲ授ク、

〔武州文書〕七橋樹郡

依一字望長與出之候謹言

天正五年丁丑

貳月十七日

謙信(花押)

萩田孫十郎殿

○孫十郎、景勝ニ屬シテ、御館亂ニ戦功アルコト、七年二月一日ノ條ニ見ユ、

三月己丑朔

十五日、卯謙信、飯田與三右衛門ニ、能登小泊・伏見等ノ地ヲ知行セシム、

〔飯田文書〕○上杉輝虎 公記所收

於能州出候知行之覺

一(珠洲)鈴郡藏見之内小泊村

一同伏見村

一同細谷分

以上

天正五年

天正五年二月十七日 三月十五日

三七五

細谷分

天正五年三月十八日

三月十五日

飯田與三右衛門殿

謙信(朱印)

三七六

〔上杉年譜〕二十

天正五年春三月十五日、飯田與三右衛門ヲ召テ、年來ノ軍忠ヲ賞

シ、能州ノ内、鈴郡藏見ノ内小沼村、同伏見村、細谷村ヲ玉ハリ、菜邑トナサシム、

○飯田與三右衛門ノ知行ヲ注記シ、軍役ヲ定ムルコト、十一月十六日ノ條ニ見

ユ、

十八日、^丙謙信、結城晴朝等ノ請ニ因リテ、將ニ兵ヲ上野ニ出サントシ、是日、コ

レヲ晴朝等ニ答報ス、

〔相馬文書〕^野○下

就越山再三示給喜悅之至候、如啓先達北國無殘所納手裏候之條、越山令必然、分國中

關東出兵
ノ陣觸

及陣觸候、來月中旬至沼田、厩橋可打著之條、味方中被示合御手合肝用候、猶露條目候

間、不能具候、恐々謹言、

追啓、段子^{貳卷}到來快然候、是も一儀斗白布拾端進之候、

己巳、^(天正五)三月十八日
結城左衛門督殿

謙信(花押)

〔渡邊秀二氏所藏文書〕^後○藏

就越山再三示給喜悅之至候、如啓先達北國無殘所納手裏候之條、越山令必然、分國中

及陣觸候、來月中旬至沼田、厩橋可打著之條、味方中有諷諫手合肝要候、恐々謹言、

三月十八日

水谷伊勢守殿

謙信(花押)

水谷勝俊

○晴朝等關東諸將ノ、謙信ニ出援ヲ請フコト、二月十六日ノ條ニ見ユ、

〔蠹簡集殘編〕^六○土佐

如來札、三日以前、於結城外張際取切所、敵出入衆候條、先衆四手五手申付追崩、隨分之

者數百人討捕候、委細安房守可申遣候、恐々謹言、

潤七月八日

富岡六郎四郎殿

氏政判

二十七日、^卯織田信長、紀伊雜賀ヲ攻ム、是日、足利義昭、其虛ニ乘ジテ、兵ヲ京都

ニ出サンコトヲ謙信ニ求ム、尋デ、毛利輝元亦コレヲ請フ、

〔上杉文書〕^四○羽前

先度如申越、始毛利中國諸卒、既令出勢上者、此節拋萬端可及手合段、肝要候、次至紀州

天正五年三月二十七日

三七七

毛利氏兵
ヲ出ス

氏政結城
ヲ攻ム

天正五年三月二十七日

雜賀、雖織田相働、失軍利引退候、委細輝元隆景可申候也、

三月廿七日

(足利義昭) (花押)

三七八

不識庵

〔吉江文書〕

○羽前

至紀州雜賀、雖織田相働、彼地堅固付而失利候、次去十六日、始毛利分國諸卒、既出勢之上者、度々如申舊候、此節拋萬端手合肝要旨、對謙信申聞令馳走者可喜入候、次、卷物貳端遣之候、猶、昭光、昭秀可申越候也、

三月廿七日

(足利義昭) (花押)

吉江喜四郎とのへ

(裏書) (マ、)

中納言

〔歷代古案〕

○羽前

爾來御無音之條、被成下御内書御面目之至候、抑、信長至紀州雜賀相働、雖送數日候、地下城墾堅固之故、失軍利引退候、海陸依遼遠、則時懸付不討果無念候、雖然、如令兼約候、此堺之儀、去十六日、令出張、近日至播州表、擊越候、其表之儀、急度至越江、御亂入肝心候、不可有御油斷候、猶、吉事重疊可申承候、恐々謹言、

輝元出陣セントス

(天正五) 卯月朔日

(毛利) 右馬頭輝元

謹上 上杉彈正少弼入道殿

〔北越軍記〕

四下

天正五年丁丑、四十八歲、正月、大和國多門志貴兩城主松永彈正少

(顯カ)

弼久秀、信長ニ怨多シ、去年ヨリ大坂門跡建如上人光佐ヲ攻ン爲、天王寺ニ附城ヲ信長ヨリ被取立、佐久間右衛門信盛父子進藤山城守筒井順慶ト、同ク松永モ天王寺ニ罷有候カ、越後へ兩使ヲ以テ内通仕候ハ、天王寺附城ヲ引拂、和州へ引籠可申候間、謙信公ハ北國通ヲ越前へ御働可被成候、毛利右馬頭輝元へモ申合候、東西南北牒合セ、京都へ可攻入旨、誓紙ヲ以テ申入候ニ付、謙信モ約諾、返狀遣シ被申候、

松永久秀 謙信ニ内通ス

〔上杉年譜〕

二十

天正五年春二月、勢州長島ノ本願寺ヨリ告來ル趣ハ、今度紀州雜賀ニ於テ、將軍家へ心ヲ屬スル軍士兵革ヲ催ス、紀州ノ軍徒、貝塚ニ塞ヲ構へ、其外要害ノ地利ヲ考へ、嶮岨ニ便テ楯籠ル、信長コレヲ聞テ、先上洛ス、相伴フ人々ニハ、嫡子秋田城介信忠、次男北畠中將信雄、三男神戶三七信孝、織田上野介信包、コノ人々ヲ紀州ニ遣シケル、其要害ハ、岸絶、地僻ニシテ、寄手近付ヨスレハ、城墾雲上ニ峙チ、兵砲ヲ以テ攻ントスレハ、其矢萬仞ノ谷底ニ落、如何ナル武術ヲ出シテ責ルトモ、切岸ノ邊ニモ近ツカス、寄手ハ若干ノ勢トイへ共、何程ノ事カアルヘキト、敵ヲ見アナトリ、各

本願寺雜賀ノ戦況ヲ報ズ

雜賀城ノ要害

天正五年三月二十七日

三七九

天正五年四月十二日

三八〇

棧ヲ張り、心ヲ專ニシテ攻戰フ、矢ニ中テ疵ヲ被リ、石ニ打レテ骨ヲ碎ク、佐久間右衛門モ、天王寺ノ城ヲ守リ居リシカトモ、信長ノ下知トシテ雜賀ノ城ヘ差向ラル、大坂ノ本願寺門跡ノ軍兵等ハ、天王寺ヲ責ントナリ、此城ニハ木下藤吉郎秀吉ヲ入替守ラシメ、大坂勢ハ、敵ヲ小勢ト見アナトリ、驀直ニ押寄、先斥候ノ敵ヲ懸散シ、大將ニ寄合テ勝負ヲ決セントス、秀吉カ副將中村式部少堀尾茂助ト云者、兵旗ヲ進テ向之、主客相戰フトイヘ共、大坂ノ勢武威ヲ震ヒ、意氣不撓、是ニ依テ此一戰并雜賀ノ戰モ、信長利アラスト告來ル、

〔附録〕

〔吉川家文書〕

來二月、上口御行之儀、被及御請候、然者、此節各被遂、在吉田、急度海陸御働之御相談、肝要被思食候、既至東北國、茂御手合之儀、堅被仰出候條、被抛萬端於御催者、可爲御祝著通、猶得其意、可申由被仰出候、恐々謹言、

正月十六日

吉川駿河守殿 ○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

四月 戊午朔

昭光花押

十二日、本願寺光佐、書ヲ謙信ニ送ル、

〔歷代古案〕

當年吉慶雖事舊候、不可有盡期候、仍其御屋形へ從御門跡被成御書候、并畠山殿遊佐新次郎遊佐美作守以一札被申候、可然様御取成之段、宜預御披露候、恐々謹言、

卯月十二日

川田豐前守殿 ○光佐ノ書、狀傳ハラズ、

弼長

謙信、守兵ヲ能登富木、熊木、穴水諸城ニ置キテ、越後ニ歸ル、尋デ、長綱連等コレヲ攻取ス、

〔長家記〕

五月、綱連、率一族并畠山之諸將、發七尾、陷富木、熊木之兩砦、押詰穴水城、

〔吉江文書〕

去朔日之御書、同四日謹而頂戴、仍大呑口働、各早速罷出致放火旨、御喜悅之由、被仰出候、則御書各爲致拜見候處、冥嘉至極、由何茂申候、就中御一左右之内、當郡在陣之儀、奉得其意旨申事候、於様體者、林邊致見聞候間、可申上旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

鱈坂備中守

天正五年四月十二日

三八一

天正五年四月十二日

六月八日

長實(花押)

三八二

吉江景賢

吉江織部佑

景資(花押)

河田長親

河田豐前守

長親(花押) ○以下斷簡、吉江

〔越登賀三州志〕

考八

天正五年丁丑三月ニ至レテ、七尾城堅固ニノ陷ス、因テ謙

信之ヲ攻ス、能登ノ故堡趾ヲ取立、或ハ七尾ニ集ル諸將ノ居堡ノ空間ヲ規ヒ、之ヲ奪

テ守將ヲ置、蓋シ熊木在鹿島郡、俗呼中島堡、今ノ上野村邊ト云、堡主熊木左近ト云フ、二三

寶寺平四郎齋藤帶刀本越中ノ地土也、天文二十三年、魚津城、内藤久彌七杉(鳳至郡、木ノ誤カ)、小傳次富木

遺跡不詳、藍浦長門穴水在鳳至郡、ニ長澤筑前甲山在鳳至郡、ニ轡田肥後平子和泉唐人式

部、正院在珠洲郡、ニ長與市景連也、景連、長ノ庶流、有故越後ニ屬シ、黑瀧ニ居ス、故ニ號ニ黑瀧

ノ遺像トテ、今石動山別當靈山寺ニ在リ、其緣起ニ黑瀧ノ與市景連、此參河守ノ勇名ヲ慕ヒ、自

傳、又石動山ノ戍トノ麻嵩麻、一作朝、在鹿島郡、ニ上條織部ニ畠山將監ヲ副テ之ヲ置、既ニノ謙

信上州へ發向、四月十二日越後へ班軍、今年五月十六日、長綱連七尾ノ兵ヲ將テ、北越

千トアリ、熊木堡ヲ圍ム、數日甲斐庄家繁七尾將間計ヲ以テ、齋藤ニ降ヲ乞シム、七杉

石動山

黑瀧長

甲山

富木

穴水

能木

自裁シ、内藤三寶寺モ亦降ル、因テ仁岸石見ヲノ堡ヲ受ケ、降將ヲ七尾ノ寶幢寺淨土

猶在、ニ於テ誅ス、又富木堡ヲ譽田彈正長十郎左衛門杉原和泉藤尾左近等、薄攻シ、藍

浦自双堡陷、此時謙信ノ輕卒將寺崎掃部政、是ヨリ譽田等穴水ニ向ヒ、同月下浣、綱連モ

諸軍ヲ率テ、併圍ス、略

二十八日、足利義昭、謙信ニ、毛利輝元等ノ出陣ヲ報ジテ、速ニ越前ニ進撃セ

ンコトヲ求ム、

〔歷代古案〕一羽前

就御行之儀、御手合段、度々被仰出候、定而可爲參著候、仍去廿三日、至播州室津兵船悉

被差上候、陸路之儀者、始宇喜多、其外中國軍士出張候、淵底此仁見聞候條、具不及申候、

然者于今能州表御在陣由候、既毛利小早川出馬之上者、被閣萬事、此度向越前、謙信頓

御亂入肝心被思召候、被得其意急度可被申達、旨候諸口御働於、不相揃者、凶徒御退治

可爲延引候歟、所詮不被移時日、輝虎爲御出馬者、御本意眼然候、不可有御油斷之通被

仰出候、恐々謹言、

(二色) 昭秀

卯月廿八日

天正五年四月二十八日

三三三

毛利小早川兩氏上洛ノ途ニ

天正五年四月二十八日

三三三

天正五年五月十二日

(真木島) 昭光

三八四

河田豊前守殿

鱒坂清介殿

五月戊子朔

十二日、謙信、本田辨丸ヲシテ長信ト呼ビ、孫七郎ト稱セシム、

〔狩野文書〕〇東京

依一字望、長興出之候、亦假名者孫七郎尤候、謹言、

天正五年

五月十二日

謙信(花押)

本田辨丸殿

本田右近ノ子

〔上杉年譜〕二十

天正五年夏五月十二日、本田右近カ嫡子辨丸、御前ニ於テ長ノ御

一字ヲ賜リ、假名モ孫七郎ニ改メ、本田孫七郎長信ト號ス、右近ハ若年ヨリ近侍ヲ勤

メ、恩眷モ又淺カラス、壯年ニ及テ處々ノ陣中ニモ鞍馬ニ扈從シ、武名モ世ノ聞ヘア

レハ、今此御一字ノ源委ナキニアラス、

〔附録〕

〔歷代古案〕〇羽前

かへせく、むつらいとく、やうまやうん用ニ候、また當地ニてふたう候ハ

と、よくく、きとておんみつよてきのを候へく候、

むつらいよくく、やうまやうまへく候、こゝろもとふく候ま、申越候、おららハ

とおと、のくらくのり(金)五まいくれ候、よくく、うけとりふうをつけ候て、はうも

とニコすへく候、九郎太郎ところへあつ候候ハ、さたゑてもたぞこすへく候、

四月四日

謙信公御書

本田右近丞とのへ〇年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

七月丁亥朔

二十九日、謙信、越後龍澤庵ニ、門前五軒ノ諸役ヲ免ズ、

〔龍澤庵文書〕〇越後

門前五間、諸役令免許者也、仍如件、

天正五年

七月晦日

(南魚沼郡樺之澤) 龍澤庵

(謙信) 朱印

天正五年七月二十九日

三八五

〔參考〕

〔新編會津風土記〕

四十 外編越後國魚沼郡之 龍澤庵境内、二十間、樺野澤村ニアリ

山號ヲ福城山ト云、上野村關興寺ノ末寺、臨濟宗ナリ、應永二十一年、本山三世不藏カ

開基ナリト云、本尊文珠客殿ニ安ス、又、文珠ノ像アリ、文祿十年、上杉景勝ノ母堂仙桃

院此像ヲ奉納シ、祈禱料五十石ヲ寄附アリシト云、略

是夏、謙信、兵ヲ佐渡ニ出ス、

〔北越軍記〕

四下 天正五年七月ニ、佐渡國侍下尾佐渡守本間山城守逆心、水畑城ニ

籠リ候ヲ、黒川備前守山吉孫次郎本庄美作守色部修理新發田（長真）因幡守ヲ遣シ、攻平、即

靜謐、佐渡國侍澤根瀉上羽茂、佐原田四人ハ、元ヨリ謙信味方ニテ候、羽茂參河守高信

ハ、長尾爲景姪聲也、

〔上杉家譜〕

天正五年四月、佐渡亂ル、黒川備前守實爲新發田尾張守長敦ヲ遣シ、

討テ之ヲ平ク、

〔上杉年譜〕

二十 天正五年四月、佐州ニ於テ叛逆ノ輩、所々ニ蜂起スル由、佐州ノ所

司代蓼沼右京亮、羽檄ヲ飛シテ言上ス、右京自ラ兵士ヲ引卒シテ防戦ス、一揆ノ徒甚

豪勇ニシテ、蓼沼利アラヌ討死ス、於是神洞城主甘粕藤右衛門景繼ニ、數多兵士ヲ副

景勝ノ母
文珠像ヲ
奉納ス

黒川實爲
等ヲ遣シ
テ佐渡平
定セシム

佐渡所司
代蓼沼右
京亮

甘粕景繼

ヲシテ佐
渡ヲ平定
セシム

隨心ノ佐
渡城主

元龜四年
佐渡征伐
ノ説

テ、佐州へ被差向、一揆ヲ退治ナサシム、景繼公命ヲ重ンシ、武術ヲ勵シ、降ル者ハ賞シ、

不降者ハ殺戮ス、從是佐州平均スレハ、管領モ景繼カ軍功ヲ勸賞シ玉フ、景繼本登坂

氏ニシテ、戰場ニ於テ度々忠義アリ、甘粕孫右衛門病死シテ無實子故、則藤右衛門景

繼ヲシテ家督相續ナサシム、夫、佐州一揆凱旋ノ後、味方ニ隨心ノ輩ニハ、羽茂城ニ本

間太郎左衛門高信、吉田城ニ三川氏某、雜太城ニ本間山城守、河原田城ニ本間孫太郎、

太田城ニ本間但馬守秀氏、俱慈城ニ本間與十郎、吉岡城ニ本間遠江守、澤根對馬守高

秀、瀉上彌太郎秀光等、咸ク降參ス、

○謙信、兵ヲ佐渡ニ出スコト、他ニ確證ナシ、今、北越軍記、上杉家譜、上杉年譜ニ據

テ、姑ク茲ニ掲グ、

〔參考〕

〔北越家書〕

元龜四年癸酉、略中輝虎公四十四歲、三月下旬、佐州ノ國侍羽茂三河守

高持、澤根刑部丞廣綱、瀉上喜八郎利忠、連署ノ目安ヲ捧ケ、目代下尾カ陣代、井本間驕

奢ヲ究メ、私曲ヲナスノ罪狀ヲ訴フ、公則頭人評定衆ヲ召テ、糺明ノ御沙汰アリ、下尾

本間モ亦是ヲ傳聞テ、不虞ノ凶害ヲ恐レ、伴黨及銀山ノ相會所ノ獵者共ヲ水畑城ニ

集テ、防戦ノ用意ヲナシ、若又阨ニ迫リ、據ヲ失フニ於テハ、（佐渡）小比叡山ニ楯籠ルヘシト、

内々其手配ヲ調義ス、左アレハ此夏穩便ナラス、急キ誅ヲ加ラルヘシトテ、三島沼垂、蒲原磐船四郡ノ民主共へ、俄ニ陣觸アリシ、喜平治景勝主上條式部少輔義春ニ先陣ヲ命セラレ、新發田因幡守治長山吉玄蕃允豐守色部長門守黒川豊前守栗林肥前守里見平四郎入道同姓兵部少輔甘粕備後守丸田伊豆守系魚川下條駿河守又采女登坂式部少輔菅野島津左京進勝久此月下齋カ男、此戰ニ討死、島倉内匠助能遠等ヲ差添ラレ、四月十三日、先達テ越府ヲ出勢ナサシメラル、公ハ同十五日府城ヲ首途シ玉ヒ、其日柿崎ニ著陣、翌日柏崎ニ到リ、妙樂寺ニ止宿マシマス、住持ノ僧異ナル智識ニテ、殊更武勇ノ健ナルヲ以テ、近年越中表御發向ノ砌、折々誘引シ玉フ、住持則吾家ノ高祖日蓮上人ノ書レタル曼荼羅ヲ捺物トシ、旗本ノ部伍ニ列シテ出陣シ、軍監ノ見積ナレトモ、功者ニテ、敵方ヘノ使節ヲモ勤、公中々ニ懇遇アリシ、今度ノ役亦驥尾ニ相從ヘリ、同十七日出雲崎ニ宿陣、是ヨリ公ハ伊夜彦社ヘ參詣マシマスベキ旨ニテ、詰朝爰許ヲ發セラレ、彼神社ヘ趣玉ヒ、登山ヲ遂ラレ、兵馬ヲ寺泊ヘ回ラシ班サル、此地ハ海陸ノ要津ニシテ、商民軒ヲ比へ、萬ツ自由ヲ得ル處ナリ、略中亦新發田道如齋カ采邑蒲原郡新瀉沼垂兩濱ノ町ノ長玉木屋大隅若狹屋常安、土産ノ景物ヲ捧ケ携ヘ御旅館ニ豫參シテ拜謁ヲ仰ク、渠儕ハ累代ノ商人トイヘ共、武遍ノ國風ニ慣ヒ熟シテ、干戈ヲ採

謙信ノ軍
柏崎妙樂
寺ニ次ス

伊夜彦社
寺泊

戰況

テ任俠ヲナシ、剩富千金ヲ保チ從者家抱多ク、先侯爲景主在世ノ頃ヨリ軍役ヲ課セラレ、騎馬廿人二夫鼠子ヲ召連、兩人替々地戰出陣ノ催促ニ應シテ、旗本備後ニ列シ、或ハ輕卒、或ハ道路警衛ノ事ニ預ル、公モ專温言ヲ施シ玉フト云々、扱先陣ノ軍勢ト一緒ニ成テ、敵城ニ押行玉フ處ニ、地利ノ險ニ據テ、敵兵人數ヲ分ケテ防キ拒ミ、味方ヲ險阻ニ引包テ、前後ヨリ討ント謀ル、本來不案内ノ敵地ナレハ、侮リ難ク、衆皆杭違ノ趣ナリシニ、公信ト御思案有テ仰ケルハ、先年武田晴信關東ニ在馬シ、新田足利邊亂入ノ砌、是ヲ以宿城ヲ燒、士卒ヲ自由ニ遣ヒナシテ、進退障ル義ナカリシト聞、證據旗ノ武略ゴサンナレ、古老ノ信玄用ル處、我其規ヲ執ム、爰ニ於テハ時機相應也トテ、先隊ヘ下知ヲ加ヘラレシカハ、次第ヲ追テ其令ヲ守リ、諸軍安々ト小比叡山ヘ推著、手寄り々々ニ隨ヒ、平推ニ押登テ、爰彼ニ放火ヲナシ、息ヲモ繼ス、攻立ケレハ、一揆姑ク防トソ見ヘシ、元來無法ノ奸賊共、忽ニ氣ヲ折カレ、或ハ降り或ハ逃去、蓮花寺ノ僧徒等手ヲ束テ、山院ノ無爲ヲ歎キケル故、公又宥恕ヲ施サレ、夫ヨリ西佐渡ヘ御幢ヲ向ラル、本間山城守資久、三千五百餘ノ勢ヲ以テ、川原田城ニ楯籠リシカ、景勝主上條以下既ニ發向ノ告ヲ聞、城外ノ地ノ利ニ打出、相支テ勇戰ヲナス、此時本間カ一族ノ武主ニヤ、十六日結ノ紋付タル水色ノ旗押建、上下廿余人、小高キ岳ニ備テ、勝負ノ

色ヲ伺居タルヲ、新發田因幡守カ同心山崎五郎兵衛ト云徑庭ノ者、備ノ中ヲ拔出、細
 ヲ傾ケ突テ懸ル、味方三四人はニ續テ、見ルカ内ニ彼敵ヲ追散シ、山崎二ヶ所ノ劔ヲ
 蒙リ、武主ト覺シキ老兵ノ首ヲ捕テ、新發田ニ見セタリケレバ、因幡守大ニ悦ヒ、則公
 ノ本陣ヘ獻シ、實檢ニ入ル、輝虎公旨趣ヲ聞召、山崎カ拔駆其手柄神妙也トイヘ共、軍
 法ヲ背クノ科亦甚重シ、法ヲ以テハ理ヲ破リ、理ヲ以テハ法ヲ害スル、豈能ハス、然レ
 ハ、法犯ス者、予ニ於テ用捨セサルナレハ、三軍ノ見懲ニ梟首スヘシト宣ヒケル故、新
 發田不便ニ思ヒケレ共、公命力及ハス、山崎ニ腹伐セ、其頸ニ勝ヲ副テ獄門ニソ梟タ
 リケル、又新發田カ被官ノ中ニ謁テ勇力ノ攬ヲ顯ス、相次テ波多野忠右衛門秀綱、箕
 手彌左衛門、劍持市兵衛、久留川隼人正ナト云陪臣、能働仕而公ノ御感ニ預ル、斯テ本
 間モ力竭テ降參シ、佐渡三郡平均シテ、公越府ヘ歸陣シ玉フト云々、

佐渡平定

閏七月丙辰 朔

八日、癸亥謙信、能登ヲ平定セントシテ、越中ニ陣ス、是日、河上定次ヲシテ、其主江
 馬輝盛ニ勸メテ、織田信長ニ備ヘシム、尋デ、定次、信長京都ニ在リテ、北向ノコ
 トナキヲ答報ス、

〔河上文書〕○上杉輝虎
 公記所收

謙信魚津ニ到ル

態用一翰候、仍、能州爲調儀當地到(越中)魚津出馬候、然處、信長(織田)出張之由申廻候間、累年之望
 此節ニ候間、無二可付、實否由令覺悟候、年來申合首尾此時候間、其口出様ケ間、敷候、去
 年如約、一際輝盛馳走候様、諷諫任入候、諸口於擬者、可心安候、猶、節々様子珍儀委可被
 申越候、目出重而謹言、

(天正五) 壬七月八日

謙信

(定次) 河上強内殿

〔歷代古案〕○羽前

御書畏而致拜見候、抑、能州爲御調儀被出御馬旨、輝盛ヘ御札、則御報被申候、此剋、能州
 可應御下知、與珍重奉存候、次上表之事、仰候、賀州筋ヘ可有行様ニ申成候、如何與存知
 置候處、去五日ニ信長京上之旨、慥承候、然上者指義御坐有間敷候、輝盛儀如前々聊不
 被存疎意候間、不替御芳意可忝候、上方珍說候ニ付而者、可申上候趣可預御披露候、恐
 々謹言、

信長上京

(七) 閏五月十六日

(河上) 定次

(長親) 河田殿

〔附錄〕

天正五年閏七月二十三日

三九二

使者ヲ美濃ニ遣ス

〔鈴木悌次氏所藏文書〕○佐渡

爲年頭之祝義輝盛ヨリ使喜悅候、彌々日出可申候、爲自分料紙喜入候、仍濃州江、明日指越使候、路次中無別義様ニ、馳走可爲大慶候、近日存分之儘ニ候、定而自中務所(河上當信)可申候、恐々謹言、

二月九日

謙信(花押)

河上合内殿(強) ○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ付收ス、

二十三日(戊寅)、織田信長、伊達輝宗ヲシテ、本庄繁長ヲ誘フテ、謙信ニ叛カシメントス、

〔伊達家文書〕

信長謙信ヲ惡口ス

就謙信惡逆、急度可加追伐候、本庄兩順齋被相談別而粉骨專一候、猶追々可申候也、謹言、

閏七月廿三日(天正五)

信長(朱印)

伊達左京大夫殿(輝宗)

〔建勳神社文書〕○山城

就謙信惡逆、急度可加誅伐候、本庄兩順齋相談、別而可抽軍忠事專一候也、

遠藤基信

閏七月廿三日

遠藤内匠助とのへ(基信) ○伊達氏家臣

〔織田信長〕
朱印

〔伊達家譜〕

天正五年、織田信長、我ニ命シテ上杉謙信ヲ伐タシム、輝宗隙ヲ覘テ未ダ兵ヲ出サズ、○性山公治家記 八月ニ係ク、

二十四日(卯)、謙信、再ビ能登七尾城ヲ攻撃ス、是日、長綱連、弟孝恩寺連龍ヲ近江安土ニ遣シテ、援ヲ織田信長ニ請フ、尋デ、信長、柴田勝家ヲ將トシテ、瀧川一益、羽柴秀吉等ト與ニ赴キ援ハシム、勝家等乃チ加賀ニ入ル、

〔越登賀三州志〕鍵藁餘考八

長綱連屠熊木堡、高山義春病死、游佐敷殺長父子、

○上 天正五年閏七月、謙信再ヒ能登へ發旗セント、先ツ越中氷見庄此解在來因一巻へ出張シタリケレハ、十五日二本松、温井、七尾ヨリ檄ヲ飛ノ綱連へ急ヲ告グ、因テ綱連穴水ヲ解圍ノ七尾ニ歸陣セントス、平子、轡田等之ヲ聞キ、新崎在鳳至郡一へ出張ノ綏路ヲ遮撃シ、又奥郡ノ兵衆モ從撃ス、此時孝恩寺兵ヲ勵シ、却テ敵ヲ破リテ利アリ、但長ノ然レトモ、綱連隊伍嚴ニノ亂レス、徐々トノ七尾へ引入ル、肥前義清、游佐四郎右衛門義房、中軍ハ綱連、後殿ハ三宅長盛也、平子、轡田及ヒ長澤、白小田等、彼是千四百人許ノ敵兵、七尾ヲ重圍ス、十七日ニハ、謙信兵九千ヲ以テ天神河ニ抵リ、平子等ニ力ヲ合セテ攻メカクレハ、正

天正五年閏七月二十四日

三九三

平子、轡田敵ヲ遮斷ス

十七日七尾ヲ重圍ス

天正五年八月九日

三九四

天疫流行

門赤坂口ハ綱連背門大石谷ハ温井木落口ハ赤坂大石谷木落ハ其比不詳游佐各強防メ相抗ス然ルニ天疫流行シ城主義春五歳ニノ同月廿三日七尾城ニ於テ天ス因テ城兵憂嘆兵氣頓ニ沮ミ越兵ト持スルノ術量リ難ケレハ綱連援軍ヲ信長公ニ請ント翌廿四日孝恩寺ヲ安土へ上ボセテ委曲ヲ告グ○下文ハ九月十五

〔長對馬守續連事蹟〕

天正五年綱連父連龍續連孝恩寺并義隆主ノ臣等穴水城ヲ攻ム謙信ノ臣長澤

守之城主能防キ能戰テ城陷ラズ此時謙信又マサニ來ントス因茲續連圍ヲ解テ還ル于時甲山ノ城兵新崎ニヲイテ續連ヲ擊ントス此時孝恩寺カ計ヲ以テ勝之既而

謙信再ヒ七尾城ニムカフ對馬守并綱連孝恩寺及遊佐神保温井三宅平譽田防戰ス雖然謙信大軍ヲ以テ圍ムノ故ニ綱連弟孝恩寺ヲ以テ援兵ヲ信長公ニ乞フ是ヨリ先キ續

連カ謀ヲ以式部信長公ニ從フ故也

〔信長記〕

天正五年八月八日柴田修理亮大將として北國へ御人數被出候瀧川左益

近羽柴秀吉筑前守惟住五郎左衛門齋藤新五氏家左京亮伊賀伊賀守稻葉伊豫不破河内

守前田又左衛門佐々内藏介原彦二郎金森五郎八若狹衆賀州へ亂入○下

○謙信七尾城ヲ攻ムルコト四年十二月十九日ノ條ニ見ユ

八月大西朔盡

九日辰壬七里賴周加賀御幸塚ニ在リテ織田信長ノ軍ヲ防ギ援ヲ謙信ニ請フ是日謙信賴周ヲ勵マシ能登末森城ヲ攻略シテ後赴キ救フヲ待タシム

〔水野生圓氏所藏文書〕○尾張

如註進者至于其國信長出張之段申廻候哉就之出勢之儀被申越候幾度如申北國之備興云大坂江之屈興云於謙信此度も表裏見除有間敷候至于其儀者重而之依一左右末守森お可打上候彼筋火手可被爲見置候兎角ニ御幸塚普請幸ニ候間國衆同心堅固ニ被相抱肝心候彼地被打明候而者比興ニ候謙信打著間之備候間油斷有間敷候爲其成福院相賴河田實清軒差添越條入魂候而國衆江被申斷尤候目出吉左右待入候恐々謹言

河田實清軒

八月九日天正五刻午

謙信(花押)

七里三河法橋房賴周

○謙信末森城ヲ攻略スルコト九月十七日ノ條ニ見ユ

九月小乙卯朔盡

十三日卯謙信諸將ヲ能登七尾城外ニ會シテ月ヲ賞シ詩ヲ賦ス

〔北越軍記〕四下

天正二年甲戌○中謙信ハ七尾城ヲ九月十一日ニ乘取直ニ此城

天正五年八月九日 九月十三日

三九五

和漢ノ會
和歌ヲ詠
ズ

へ入、兩日人馬ヲ休、十三夜ハ明月ナレハ、諸大將ヲ集、和漢ノ會アリ、謙信モ絶句ノ詩
并和歌一首ヲ被賦、十四日ニ七尾ヲ立、柴山ニ陣ヲ被取、國中仕置有之、○下

〔北越軍記〕七下

天正二年八月、能登陣ナリ、七尾城ヲ九月十一日ニ謙信攻落、同月十三夜明月ナレハ、
七尾城ニテ詩歌ノ會アリ、謙信ノ作、

露滿軍營秋氣重 數行過雁月三更 越山併得能州景 任他家鄉念遠征

〔古老物語〕

(五)

天正二年七月、能登國主畠山修理大夫義隆、十八歳ニテ死去、家臣遊佐

彈正溫井備中長對馬ヲ始十一頭、人數二千餘ニテ、七尾ノ城ニ籠リ、信長ヘツク、義隆
伯父上杉彌五郎義春、越後ニ有テ此亂ヲ聞、謙信ヘ訴シニ付、則一萬三千ニテ發向シ、
七尾ノ城ヲ、八月二日ヨリ被攻圍、上杉彌五郎先手ニテ、粉骨ヲ盡シ、九月十一日ニ攻
落シ、城中宗徒ノ兵千餘討取、信長ヨリ柴田勝家父子、前田利家、佐々成政、金森五郎八、
一萬八千ニテ、後詰トノ加賀ノ御幸塚マテ來ルトイヘテ、七尾落城ヲ聞、早々引返ス、
落城三日ノ、九月十三夜、謙信諸將ヲ集、名月ノ詠詩歌ノ會アリ、謙信ノ詩ニ、
露滿軍營秋氣重 數行過雁月三更 越山並得能州景 任他家鄉念遠征

〔參考〕

〔歷代古案〕一羽前

○上 偕亦、當地七尾、吉日之間、廿六、鍛立爲可申付、令登城、見流候得者、從聞及候名地、賀

七尾ノ風
景

能越(要)金目之地形、與云、要害山海相應、海頰嶋々之躰迄も、難寫繪像、景勝迄候、

九月十九日○二十九日ノ誤記カ、全文ハ、二十六日ノ條ニ收ム、

謙信

長尾和泉守殿

〔翁草〕

霜滿軍營秋氣重 數行過雁月三更 越山併得能州景 任他家鄉念遠征

〔常山紀談〕四

露滿軍營秋氣清 數行過雁月三更 越山並得能州景 任他家鄉念遠征

〔龜田鵬齋書幅〕

露下軍營秋氣清 數行過雁月三更 越山并得能州景 遮莫家鄉思遠征

〔武邊嘶聞書〕

霜滿軍營秋氣重 數行過雁月三更 越山并得能州景 任他家鄉念遠征

〔日本詩史〕

江村北海著

露下軍營秋氣清 數行過雁月三更 越山并同能州景 遮莫家鄉念遠征

〔日本外史〕十一 賴山陽著

霜滿軍營秋氣清 數行過雁月三更 越山併得能州景 遮莫家鄉憶遠征

〔本朝戰國策〕十七

霜滿軍營秋氣重 數行過雁月三更 越山併得能州景 遮莫家鄉思遠征

〔北越略風土記〕

霜滿軍營秋氣清 數行過雁月三更 越山併得能州景 不管家鄉懷遠征

十五日、謙信能登七尾城ヲ攻メテコレヲ陷ル、

〔歷代古案〕一 羽前

續光內應 我兵ヲ導ク謙信親ク城ニ入ル 長續連ヲ族誅ス

當陣之模様無心元候間、内々以飛脚可申越候處ニ、此表仕置執綜令延引候、如啓先書、當月十五、遊佐美作守年來以奏者之好、令忠信彼者之線輪へ當手可引入、由申候間、何歟も不入、愚入乗移、一日も不抱作七尾城主ニ候、長對馬一類一族百餘人討取、實城乘取、其外溫井備中三宅備後同藤三平以下身命計相扶、七尾存分之儘ニ入手ニ、○下略、二十六日ノ條ニ收ム、

九月十九日

長尾和泉守殿

謙信

七尾落城 長續連一 族ノ死亡

〔長家譜〕

天正四年、越後主上杉輝虎入道謙信能州へ發向、七尾城被取詰候、此節國主畠山式部大輔義春、少年ニ付、續連對馬并嫡子綱連及畠山之諸臣七尾城ヲ守保仕候、其後上杉氏能州退散有之、重而同五年七月、能劬へ出張、七尾城ニ被押詰候、同九月、遊佐美作續光溫井備中景隆三宅備後長盛等、逆計ヲ上杉氏へ内應仕、同月十五日敵ヲ引入及落城候、依之續連父子及家族等於城中死亡仕候、云々、

〔參考〕

〔越登賀三州志〕

越登賀三州志鍵彙餘 〇上文ハ、閏七月二十、閏七月廿六日、二本松伊賀守モ亦疫疾ニ罹リ、畠山義深ヨリ十一世ノ社稷絶テ、又嗣立スベキ主胤ナシ、猶綱連ハ義隆屬

十三夜觀 月ノ詩 謙信續光ヲ誘フ

續光續連ヲ誘殺ス

之ヲ攻ムル、略謙信ハ攻城既ニ兩三月ニ及へ、凡、陷城セサルヲ倦ミ、謙信七尾ニシテ九月、露滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、任他家鄉念遠征、詩調優暢、英雄ノ氣象、暗ニ超越ス、此詩本朝詩選ニ載ス、按ルニ此七尾攻撃ノ比、軍營中ノ作ナルヘシ、九月十日、上條織部等ヲシテ、游佐父子へ反書ヲ密貽シ、内應セシム、因テ游佐攜貳、忽テ蕭牆禍ヲ生シ、同十五日、長對馬續連、同新右衛門連常、同治兵衛連盛等ヲ、游佐七尾城中ノ二丸へ伴リ招キ、游佐續光ノ妻ハ、平加賀女ニテ、長連龍從弟也、又兵ヲ以テ切カシ、皆自刃セシム、綱連ハ赤坂口ニ在テ、防戰中ニ之ヲ聞キ、單騎ニテ七尾ヲ指馳ルニ、此時赤坂口ハ

天正五年九月十五日

三九九

天正五年九月十五日

四〇〇

綱連戰死

謙信七尾城ヲ受取ル

諸將ヲ部署シテ諸城ヲ守ラシム

謙信能登ヲ發ス

加賀ノ諸將謙信ニ降ル

家老合田民部 温井中路ニ兵ヲ伏置之カ爲ニ戰死ス、此時伏將小南内匠、月刀ヲ以テ綱連ヲ鞍上ヨリ薙墮ス、黨朋才阿彌交搏セントスルヲ、綱連其首ヲ撈殺ス、然レドモ衆力ニ抗シ難ク、戰死ス、又此時杉山伯耆ノ病中也、其家ヘ敵兵亂入ニ、飯川左京ト一所ニ引決ス、綱連ノ子竹松、彌九郎、杉山三郎、城中ノ女房ト云アリ、五歳、乳母抱持シテ、越中ニ退キ、隱レ、後ニ金澤卯辰山心蓮社ノ開基トナル、故菊丸ト云アリ、五歳、乳母抱持シテ、越中ニ退キ、隱レ、後ニ金澤卯辰山心蓮社ノ開基トナル、故

ニ長族ノ首七級續綱連、連盛、竹松、彌九郎、杉山三郎也、ヲ越將島津淡路マテ送ル、此時淡路大念、此時謙信ハ石動山大宮坊ニ止宿シ、河田豊前有坂備中ヲノ、七尾城ヲ受取シム、爰ニ七尾ノ將松波常陸義親ハ、七尾ヲ去テ、神保周防河野肥前熊木兵部等ト同意ノ居城松波

珠州ヲ守ルトイヘトモ、長澤強攻スルヲ以テ、神保河野熊木ハ戰死シ、松波ハ自刃シ、義親先祖島山常陸介義智ハ、島山義統ノ子也、文明六年能州松波郷ヲ領シ、三千貫餘ト云、其子義成、其子義遠、其嗣常重、其子松波義龍、其子義親ト、松波城ニ相續シ來リ、今年此ニ死ス、義親享年四十一ト云、此末、城陷、是ヨリ能登闔州謙信ノ有トナリ、謙信國政ヲ執、七尾城ニ有坂備中ヲ主トシ、直江大和松川兵部等ヲ副置、石動山ニ古海三助、穴水ニ長澤白小田善兵等ヲ置、正院ニ長與市島倉伊勢熊倉吉藏、甲山ニ平子轡田ヲ置テ守衛セシメ、上條織部、高山將監モ、七尾ニ置、同廿九日謙信能登ヲ發ス、此時謙信、崩黃純子ノ胸肩衣ニ、白手拭ニテ頭ヲ包ミ出ツルト

ナ、此時游佐等今タヒ内應セシ恩賞ノコト、能州ニ於テ先領ノ地ハ勿論、長家ノ一跡、并ニ彼氏族ノ所領沒收ノ地、越後歸府ノ後沙汰スヘシト、馬上ニテ高聲ニ之ヲ演、此時游佐ハ、謙信ノ殿威ヲ見テ、戰栗敬服シ、後日嫡孫游佐孫太郎景光ヲ、夫ヨリ謙信加州津幡

謙信越後ニ歸ル

ニ著陣ス、其步騎三萬ト云、加州賊魁洲崎光德寺、龜田、鈴木、平野、若林以上ノ傳皆在ニ上文、皆謙信ト相和ス、相傳、此内平野、神右衛門、鷹巢堡主ナルカ、謙信堡ヲ除ケ、越後ヘ引取ト云、又此トキ名ケ、且山狀ヨリ金城ヲ臨ンテ、君所萬歳白山社、臣守四方金澤城ノ一聯句ヲ賦ス、又金澤尾張町々人、淺野屋惣右衛門祖傳、右衛門家ニ謙信止宿シ、小脇刺下、謙信著セシ織物ノ肩衣ヲ賜リ、子孫惣右衛門傳來、家寶トス、此小脇刺ノ作ハ、京ヨリ信國也、其後故アツテ、信國ノ作、謙信ニ傳ハ、右衛門ニ傳ハル處、磯部屋ノ縁者ヘ之ヲ贈リ、夫ヨリ後ハ不知云、景周按、信國ノ作、謙信ニ傳ハ、信國ト銘アリ、越後ノ住人ニ、山村右京亮正信ト云者、京ノ信國ノ弟子ニテ、正信ノ作ニモ、山村ハ、此時謙信著甲冑、肩衣ヲ傳右衛門女ニ、與ヘ、今ニ傳來也、肩衣ハ、淺黃純、謙信長族ノ首ト子トアリ、按ルニ、此淺野屋家ハ、今ヨリ五十年前絶テ、今ハ其家族モナシ、純、謙信長族ノ首トモヲ掠、部濱在石川郡、世本作大野濱、ニ梟シ、是ヨリ松任城ニ向フ、此時河田豊前モ、八千ノ兵ヲ將テ馳向フノ處ニ、安土ヨリ七尾ヘノ援軍來ルト聞キ、謙信城ヲ信傳在上文、急ニ攻陷シ、越後ヘ歸國ス、松任本誓寺記ニハ、此時謙信攻レドモ、城不拔、因ニ灯明寺ヲ頼ミ和成ル、木田張ノ所ヲ、謙信謀テ、鎬木及ビ燈明寺ヲ殺ストアリ、可追考、又此時ノコト、北越軍、因テ游談、北越太平記、本朝通紀、春日山日記等、種々紛紜ノ異說ヲ載ス、後人贗作、今惣テ不取、因テ游佐温井等越後ヘ如テ、謙信ニ謁スルニ、游佐ハ長ノ讐魁タレハ、越後ニ在留セシム、温井三宅ハ謙信ノ與力トシ、采地ヲ加恩シ、能登ヘ返シ、所々ニ在城セシム、○下文ハ、九月二十三日

〔越登賀三州志〕

能登國守享歷

四〇一

〔越登賀三州志〕來因概覽四

天正五年九月十五日

天正五年九月十五日

四〇二

能登國守

永和康曆九十九代後圓融帝、ニ至テ、畠山義深號兵張守、從四位下、畠山式部大輔、家國ノ二月卒、執事ハ遊、始テ能登ニ守タルヨリ、其子基國以下宗義ニ至ル迄、代其子滿則、其子

義忠、其子義統、其子義氏、其子宗義、其子義續號能登守、兵部少輔、修理大夫、天文十二年調立、

利、其子義則號修理大夫、永祿八年、〇十二年其子義隆號右京大夫、左衛門佐、永祿八年其子義

七尾城創設

春、號式部、天正二年二歳ニテ病死、ト十一世畠山氏相續、能州ヲ領スルコト、凡ソ二百年所

也、以上畠山氏ノ委曲ハ、景周別ニ畠山譜一卷滿則以來能登郡七尾城七尾築城ハ滿則能

又自是三十年後永享ノ頃築クトモ云、並ニ口牌也、此地、我國祖今ノ所、口村領小丸山ニ轉城、

松尾、龜尾、虎尾、竹尾、梅尾、龍尾、菊尾、ニ據テ國府ヲナス、天正百七代正親町帝、五年丁丑秋

七月、二十義春七尾城ニ病死、是ニ於テ畠山氏宗祀湮泯、復其祖ヲ繼ベキ人ナク、況ヤ

上杉謙信、客歲以來、七尾攻城、諸守將堅壁防備ノ時節也、長綱連ハ號九郎左衛門、對能

登從前ノ故家、時ニ義將ナレハ、畠山氏ノ遺臣多クハ之ニ適從、七尾城ヲ守ル、然ル

ニ、姦將游佐續光號美作、義謙信ニ内應、長氏父子六人ヲ六員ノ名欺キ殺シ、謙信ニ

降ル、因テ七尾城謙信ノ有トナリ、越將有坂備中等ヲ置、是ヨリ能登、關州上杉領トナ

落城

遊佐續光

〔上杉年譜〕二十

天正五年八月、能州七尾城主畠山修理大夫義隆ノ家臣、遊佐美作（續光）

等謙信ニ通ズ

守潛ニ使价ヲ以テ密通ス、往年以來、長對馬守、溫井下總守、酒井左近丞、上田紀伊守、三

宅備後守、同藤三平加賀守、溫井備中守、池田彌次郎等、信長ニ志ヲ通シ、管領ニ對扞ス

ヘキ企アリ、サレ共、三宅備後守、平加賀守、溫井備中守、時世ヲ見合セ、混ラニ敵味方ヲ

覬覦ス、義隆死去以後、義隆ノ嫡子イマタ幼稚故ニ、累代ノ家臣共己々カ權威ヲ爭ヒ、

家門ヲ守護スヘキ心ナク、專ラ自家ヲ興サントス、是偏ニ畠山ノ家斷絶スヘキト耳

語ケル、就中今年ニ至リ、家中ノ騷動止事ナシ、此故ニ彼輩猶又越府ニ志ヲ通シケル、

長九郎（綱連）左衛門方ヨリモ、遊佐トヒトシク密札ヲ以テ内議シ、逆徒計亡スヘキ時至レ

リ、近日御出馬有テ退治然ルヘシ、然ラハ七尾ノ落居、豈兵馬ヲ勞スルニ足ンヤ、此上

ハ義隆ノ男御取立、畠山ノ家ヲ繼シメ玉ハルヘシト、腹心ヲ開テ申シ送ル、管領モ此

事尤理ニ當レハ、則能州ニ出張シ玉ヒ、賊士ノ面々其罪ヲ責テ、雜兵百餘人刑罰セリ、

叛臣對馬守ニ一味スル、溫井備中守、三宅備後守、同藤三平加賀守以下各其不忠ヲ悔

テ、長遊佐ニ依リ、頻ニ降ヲ乞、質ヲ出シ亡命ヲ免ル、幾程ナク、渠等カ舊領モ返シ玉ハ

レハ、彼降人等心外ノ仁慈ニ浴シ、彌恩賞ヲ感戴ス、

〔參考〕

〔上杉家記〕 菅屋長賴、長連龍等、遊佐美作守續光ノ我ニ屬スルヲ惡ミ、之ヲ七尾城

天正五年九月十五日

四〇三

菅屋長賴

畠山家中騷動ス

ニ族殺ス、初メ輝虎ノ七尾ヲ取ルヤ、續光首ニ我ニ屬ス、而テ連龍ノ父兄織田信長ニ屬シ、以テ我ニ抗ス、舉族屠殺セラル、獨リ連龍免ルヲ得タリ、因テ深ク續光ヲ憾ム、長頼ノ能登ニ入ルヤ、溫井景隆三宅長盛等、長頼ヲ迎ヘ、七尾城ニ入ル、續光禍ノ及ヲ懼シ、竊ニ鳳至郡ニ匿ル、是ニ於テ捕斬セラル、太田和泉日記、三州志、上杉古文書、

十七日、辛未謙信、能登末森城ヲ攻略シ、山浦國清、齋藤朝信ヲシテ、コレヲ守ラシム、

〔歷代古案〕〇羽前

〇上 七尾存分之儘ニ入手ニ、(九月)同十七、號末守(能登)與地モ入手ニ、是者賀能之間之地ニ候間、(山浦國清)朝信源五殿、齋藤籠置、當國一變ニ申付候處ニ、是を信長一向ニ不知、一八、賀州湊川迄取越、〇下略、全文ハ、二十六日ノ條ニ收ム、

九月十九日

謙信

長尾和泉守殿

二十三日、丁丑謙信、織田信長ノ軍ヲ、加賀湊川ニ追撃ス、

〔歷代古案〕〇羽前

〇上 (九月)同十七、號末守與地も入手ニ、是者賀能之間之地ニ候間、源五殿、齋藤籠置、當國一變ニ申付候處ニ、是を信長一向ニ不知、十八、賀州湊川迄取越、數萬騎陣取候所ニ、兩越、

兩越能ノ諸軍ヲ先鋒トシ謙信之ニ次グ
信長ノ軍夜ニ乘ジテ退キ水ニ溺ル
謙信其怯懦ヲ笑フ

能之諸軍勢爲先勢差遣、謙信事も直馬之處ニ、信長、謙信後詰ヲ聞届候哉、當月廿三夜、中令敗北候處ニ、乘押付千餘人討捕、殘者共悉河へ追籠候ケル、折節洪水漲故、渡無瀬、人馬不殘押流候、誠如此之萬方仕合、年來信心歡喜迄候、重而信長打出候間、一際可有之與、令校量候處ニ、案外ニ手弱之様躰此分ニ候者、向後天下迄之仕合心安候、〇下略、全文ハ、二十六日ノ條ニ收ム、

九月十九日

謙信

長尾和泉守殿

〔信長記〕

天正五年八月八日、柴田修理亮大將として、北國へ御人數被出候、〇中略賀州へ亂入、湊川手取川打越、小松村本折村、阿多賀富樫所々燒拂在陣也、(秀吉)筑前御届をも不申上、歸陣仕候段、曲事之由、逆鱗、迷惑被申候、北國加州表へ被指遣たる人數、國中、之耕作難捨、御幸塚普請丈夫に拵、佐久間玄蕃を入置、大聖寺是亦普請申付、何れも柴田修理亮人數被入、十月三日、北國表之諸勢歸陣也、

〔北越軍記〕

四下天正五年九月、謙信ハ松永手合ニテ越後ヲ打立、越中ヲ通り、能州穴水城ヲ攻落、長九郎左衛門父子四人ヲ打取、加州へ亂入、小松城安宅城、山道山城ヲ攻被申候、松永彈正ハ、天王寺附城ヲ立除、和州信貴城ニ楯籠候ニ付、是へハ信長公嫡

天正五年九月二十三日

四〇五

秀吉告ゲズシテ退軍ス
松水久秀ト手合

信長ト對陣ストノ

子城介信忠ヲ指向、信長ハ安土ヲ立、越前へ打出、加賀國へ入、謙信ニ指向申候、謙信ハ小松安宅、山道山ノ城ヲ攻落、直ニ石動橋ニ陣取被申候、信長公ハ、柴田勝家、徳山五兵衛、原彦次郎、金森五郎八、瀧川太近、前田又左衛門、舟羽五郎左衛門、不破彦三等四萬八千ニテ謙信陣所ヨリ、一里半近所ノ川ヲ越、陣取申候、此時信長ハ殿馳ニ來ル侍大將ノ真似シテ、其夜中ニ川ヲ越テ、先手へ加被申候、信長向ト知セテハ、曳口大事ト考ル故ナリ、功者ノ大將ト後日ニ褒申候、謙信ヨリ鬼小島彌太郎ヲ使者ニテ、信長方へ遣シ、明日卯ノ刻ノ一戰ト被定候、信長公ハ其夜ニ陣拂シ、引取被申候テ、越前ノ金津迄馬ヲ納被申候、此段謙信聞テ大ニ笑、流石ノ信長カナ、其儘居候ハ、悉蹴散シテ川へ可切入者ヲ、一段功者也、(下)稱美セラレ、ソレヨリ信長跡ヲ追テ越前ノ内迄働、丸岡ノ城下燒拂セラレケルニ、信長公ハ長濱迄引取、謙信ニカマイ不申候、

丸岡城下ヲ燒拂フ

〔越登賀三州志〕

難囊餘 〇上文ハ、九月十五、日ノ條ニツマク、

殺害ニ罹ルノ旨、巷説流聞アルユへ、半怒半哭、情ニ堪ズ、愈ヨ援ヲ丐テ止ズ、因テ援兵ヲ指下サルノ沙汰アリトイヘトモ、頃者東南ノ戰事多端ユへ、此議延滯ス、然レトモ諸將ニ命アツテ、援ノコト定ル、蓋其援將ハ柴田勝家、佐久間盛政、惟任長秀、長谷川藤

信長ノ救援軍

手取川ヲ渡リテ七尾城ノ陷落ヲ知ル

孝恩寺秀吉ニ依リテ援ヲ請フ

五郎秀一、瀧川伊豫守一益、一作、羽柴秀吉暨國祖高德公、(前田利家)謹考、公此時未ダ加賀ニ封候タラズトイヘ、加州ヲ踏玉フ者、之ヲ始メトス、徳山五兵衛則秀、佐々内藏助成政、不破彦三、金森五郎八、堀久太郎、秀政、稻葉伊豫守通胤、柴田伊賀守勝豊等也、信長記、即チ甲兵四萬八千、(春日山日)鼓行シ、手取川ヲ涉リ來ル、然ルニ水島川(在石)ニ於テ、掠部ノ梟首ノコトヲ聞キ、孝恩寺ヲノ梟首ノ實否ヲ見セシムルニ、父兄ノ首ナレハ、秀吉之ヲ議シ、七尾既ニ陷城ノ上ハ、彼地へ如モ益ナシトテ、是ヨリ安土へ旋旆ス、此時信長公自カラ出軍ノ、春日山日記、北越太平記、本朝ナシトテ、是ヨリ安土へ旋旆ス、通紀等ニ載スレ、織田記、柴田記、豊臣譜及ビ我諸錄ニ見ヘズ、後人ノ蛇足不レ可疑、故ニ此ニ刪除ス、又有澤永貞ノ略譜ニ、此時織田方ノ諸將無言、秀吉其利害ヲ演説アルヲ以テ、總軍退キ歸ル、其誤リ秀吉一身ニ歸シ、此言解ノ爲、中國ノ征伐ヲ望マ云々、因テ孝恩寺、秀吉ニ就テ、父兄ノ讐戰ヲ頻ニ乞フ、秀吉其孝志ヲ感シ、菅屋長頼ヲ以テ、信長公ニ告、公歎美有テ、勝家ニ援助スヘキノ命アリ、孝恩寺即チ北庄(前越)ニ至リ、加勢救援ヲ勝家ニ乞ヘトモ、延議事果ザルユへ、先ツ自カラ兵士ヲ募フ、景周按、北越上杉家左祖ノ輩編スル者ニテ、懸疣ノ文多ク不レ可舉、數日、謙信我三州ニ出軍アル、天文十五年ヨリ今年マデ凡十度也、蓋シ、出軍ノ費用莫大、必シモ如是連年容易ニ兵ヲ動カス、不可有按スル者アルト見ヘタリ、讀者猶實錄ニ徴シテ、取捨シテ可也、

〔常山紀談〕

天正五年、畠山修理大夫義隆毒殺せられ、家臣七尾の城ヲ據テ、信長ヲ屬シ、能登大ノ亂れけ、義隆ノ伯父上杉彌五郎、義春、越後ニ在テ是を聞、謙信ヨクと告、謙信即兵を出シ、義春先陣して、七尾の城を攻落セ、此時長九郎左衛門重連、七

天正五年九月二十六日

四〇八

謙信松任
城主下和

長連龍

尾ふて、畠山ケ長臣温井三宅ヲ殺され、重連の弟(孝恩寺ノ誤)恩光寺使僧とふりて、信長に此由を申せど、柴田勝家丹羽長秀長谷川某前田利家羽柴秀吉瀧川一益氏家卜全等、四萬をありふて打立、八月五日、加州手とり川を涉り、水島に陣取たり、謙信ハ能登一州悉く旗下ふつけ、八月朔日、兵をういして、加州ふて長か一族の首七つ、倉部、柏野の間ふる濱、竿のひ渡しうけ並へ、札を書て立られり、松任の城主、燕木右衛門大夫と和平し、信長著陣を聞、松任ふて軍評定し、一戦をへしと、手くそりあり、七尾既ニ落て謙信こそまて打向むたり、爰よて合戦無益ありとて、引退くへしと、信長の陣ニいろめき立、恩光寺人ノ首を見せるよ名のみふて、面貌異あり、上方の軍のおし來るをき、謀を以て、長一族の首をいつそり設るあらん、能州をきて、松任ふ在ハ、後詰を防んよめあるべしといふを聞て、さへぎもまつまりける、即夜戌の刻に及て、恩光寺柴田木下の陣へ行、先よハ味方一同よ敗北をへきあるを見て、さバうりて申せしふり、七ツの首ハ吾父兄弟よて候と、告あらせしうバ、爰よて合戦をべうらぞとて、信長引うへさる、恩光寺是非一軍と乞へども、聞入を、恩光寺ハ後信長の命よて還俗し、長九郎左衛門連龍といひしハ、此人ふり、

二十六日、賤謙信、加賀ヨリ能登ニ班リ、七尾城ヲ修築シ、鯨坂長實・游佐續光等

ヲシテコレヲ守ラシム、

〔歴代古案〕一羽前

謙信加能
兩國ノ戦
勝ヲ某ニ
報ズ

七尾落城

末森城ヲ
陷ル

信長ノ軍
ト戦フ

年來信心
ノ賜

信長ノ實
力ヲ知ル

二十六日
七尾城工
事著手

七尾ノ景
勝

當陣之模様無心元候間、内々以飛脚可申越候處ニ、此表仕置執綜令延引候、如啓先書、當月十五、遊佐美作(續光)守年來以奏者之好令忠信、彼者之繰輪へ當手可引入、由申候間、何歟と不入、愚入乗移、一日も不抱作七尾城主ニ候、長對馬一類一族百餘人討捕、實城乘取、其外温井備中三宅備後同藤三平以下身命計相扶、七尾存分之儘ニ入手ニ、同十七、號末(森)守與地モ入手ニ、是者賀能之間之地ニ候間、源五殿齋藤籠置、當國一變ニ申付候處ニ、是を信長一向ニ不知、十八、賀州湊川迄取越、數萬騎陣取候所ニ、兩越能之諸軍勢爲先勢差遣、謙信事も直馬之處ニ、信長、謙信後詰ヲ聞届候哉、當月廿三夜中令敗北候處ニ、乘押付、千餘人討捕、殘者共悉河へ追籠候ケル、折節洪水漲故、渡無瀬、人馬不殘押流候、誠如此之萬方仕合、年來之信心歡喜迄候、重而信長打出候間、一際可有之與令校量候處ニ、案外ニ手弱之様躰、此分ニ候者、向後天下迄之仕合心安候、偕亦當地七尾、吉日之間、廿六、鍬立爲可申付、令登城、見流候得者、從聞及候名地、賀能越之金目之地形、與云、要害山海相應、海頰嶋々之躰迄も、難寫繪像、景勝迄候、越中能州城々、何も各地共、手飼之者差置、敵味方之覺施、老後之面目候、吾分父子ニ爲見度迄候、要害能候間、普請手

天正五年九月二十六日

四〇九

天正五年九月二十六日

四一〇

關東出陣ノ準備

間入間敷候條、普請備申付歸府、其上其表越山之儀も可談合候、先吉左右候間、一筆用之候、目出彌可申候、謹言、

追而、先啓如申越、其味方中作毛悉取納候由候間、敵其表江打出儀者有之間敷候、歟、兎角明隙候間心安候、已上、

(天正五) 九月十九日○二十九日ノ誤記カ、

謙信

長尾和泉守殿

(附記)「此時上州深澤ニ被指置候時也」傳兵衛祖父

〔參考〕

〔上杉輝虎公記〕

按、本書○前掲ノ書 九月十九日トアリ、而テ二十六日迄ノ事ヲ記

セラル、蓋シ、二十九日ノ誤筆タル疑ヒナシ、又長尾和泉守殿ノ六字、後人ノ記入セシモノニシテ、公ノ眞筆ニアラス、恐クハ當時ノ反古紙ヲ得テ、姓名ヲ記入セルノミ、又追啓中、敵其表へ打出候儀云々、及ヒ吾分父子等ヲ以テ推考スルニ、厩橋城將北條輔廣父子ニシテ、所謂敵ハ北條氏政ヲ指ス歟、今茲佐竹義重里見義弘等、氏政ト成ヲ行フ、御列祖史略、古戦録等ニ見ユ、蓋シ公專ラカヲ西面ニ用ヒ、東方ヲ經營スルニ暇アラス、是レ氏政等ノ我カ東境ヲ侵サント欲スル所以ナルカ、之ヲ要スルニ、本書ハ

當時其日子ヲ誤筆シ、之ヲ破糊紙ニ付セラレタルモノニテ、其誰某ニ與ヘラレシモノタルヲ断定スル能ハス、

十月大 甲申 朔

二十五日戊申、謙信、能登諸城ニ制札ヲ掲グ、

〔朝陽私史〕○上杉輝虎公記所收

制札

條項

- 一 無道狼籍之事、
- 一 押買之事、
- 一 博知博奕之事、
- 一 見合相傳人かとひ之事、
- 一 前々の遺恨之或ハ親敵妻敵之事、
- 一 喧嘩口論至干有之、理非をいじ、双方共ニ成敗之事、
- 一 他の被官當國にて互ニ許容すへからし候、但、主人ならハ可加扶助事、
- 一 無用之奉公人、在々所々之寺院へ打廻り、徘徊無道之子細不可有之事、
- 一 一定置る、寺社領、貪り取へらさる事、

天正五年十月二十五日

四一一

天正五年十月二十五日

四二二

米計物ハ
鯨坂長實
遊佐續光
ニ管掌セ
シム

一 知行如被仰出可申付候、境論と號し、不請御意、間之押領公事沙汰有間敷事、
但、八木計物ハ、鯨坂備中守遊佐美作守如申付、無大小一國可自由、但、有多少者堅
固、糺明セヘキ事、
一 城々在々所々被仰付候政道之事、
一 毎々の役者、越後自被仰付候者、横目と號し、其邊海陸警固之事、
附、黄金商賣京目を以いとし候事、曲なる子細也、所詮田舎目ニ可申付事、
右之條々、於相背者、不嫌甲乙人、可被加成就云々、但、依入於背御諛者、可爲逆意、由被仰
出被成御印判者也、仍如件、

天正五年十月廿五日

(遊佐續光)
美作守
(鯨坂長實)
備中守

七尾城代
鯨坂長實

能登統治
方針ヲ上
條政繁ニ
訓示ス

〔石坂孫四郎氏所藏文書〕前〇羽

一 如此御制札萬端可被仰付候、亦實城様爲御代當地七尾ニ鯨坂備中守被差置上者、
大細事共ニ被相尋、有御入魂御備肝要候事、
一 初賀州、奥能登、其外他領寺社神領へ、御家風衆被差越間布候、於有御用者、眞手成者
如何ニも非分横合不申様ニ被仰付、每物被入御念、御用可被足之事、

能登衆ト
他國衆ト
ノ直接交
渉ヲ停ム

一 他領他國知行之境目之儀、被進候外ニ、御横合御無用ニ候、下々へも堅可被仰付候、
惣躰無道狼籍喧嘩口論博、博奕手堅可被仰付候、洩此御政道候者、不入理非も御
成敗、實城様へ之可爲御孝儀候事、
一 賀州懸助之儀も無御見除、被合力尤ニ候、下侍別而實城様御懇意候間、被仰通不苦
候事、

一 當國地衆、他國衆へ、實城様不被御下知、御入魂被仰合儀、御嫌ニ候、其分御心得肝要
ニ候事、
付、有御用者、我等兩人へ可承事、
以上

吉江信景

天正五年

吉江喜四郎

信景(花押)

(謙信)
朱印(拾一月十六日)

三條道如齋

信宗(花押)

三條信宗

(上條政繁)
彌五郎殿

十一月小寅朔

天正五年十月二十五日 十一月十六日

四一三

天正五年十一月十六日

四一四

十六日、謙信、飯田與三右衛門及ビ島倉泰明ノ、能登ニ於ケル知行ヲ注記シ、與三右衛門ノ軍役ヲ定ム、尋デ、泰明ニ印判ヲ示定ス、

〔歴代古案〕一 羽前

落著知行ノ覺
神保越中
上田紀伊
守分

- 飯田與三右衛門落著知行之覺
- 鈴郡内(珠洲郡) 一細谷村八拾九貫四百五拾七文 神保越中守分
- 同郡内 一伏見村五拾七貫文 上田紀伊守分
- 以上

合百四十六貫五拾七文

天正五年

十一月十六日

(謙信) 御朱印

軍役

- 一 鑓 七挺
- 一 馬上 貳騎 自分共ニ何茂腰差 自分金前後
- 一 鐵砲 一挺
- 一 小旗 一本
- 以上

○謙信、飯田與三右衛門ニ、能登ノ地ヲ知行セシムルコト、三月十五日ノ條ニ見

ユ、

〔島倉文書〕○上杉輝虎

(珠洲) 公記所收

久の利浦
温井下總
守分

- 一 鈴郷之内 久の利浦 温井下總守分
- 百四拾貳貫五百拾文

一 鳳至郡之内 南志見本郷五谷 酒井左近分

貳百七貫三百文

一 町野之内 鶴之町 長對馬守分 大箱

八拾貳貫六百七拾六文

以上

天正五年十一月十六日

(謙信) 朱印

島倉孫左衛門殿

〔歴代古案〕六 羽前

○羽前

御とふ候ハ、この御いんさんにておせいとさるへく候、うりことちと申を此ニ候間、こゝろへのとめ、うくのこことくニ候以上、

天正五年十一月十六日

四一五

天正五年十一月二十四日 十二月十八日

四一六

天正五年十一月廿六日

鳥倉孫左衛門殿

二十四日、謙信、能登一宮氣多神社領ヲ、七尾城將三宅長盛ニ預付セシガ、明年ヲ以テ、コレヲ社人ニ返付セシム、

〔氣多文書〕〇能

(羽咋郡氣多神社)

能州一宮之事、不知案内ニ付而、社務領當分三宅備後ニ御預候、然自然前々彼社之修造分之趣被聞、來年急度被返付之旨候、其外諸神領免田等、如先規全不可有相違之狀、依仰執達如件、

天正五年十一月廿四日

〔黒金〕
謙信

一宮總中

十二月 癸未 朔

十八日、謙信、能登ヨリ春日山城ニ旋リ、是日、畠山義隆ノ寡婦三條氏ヲ、北條景廣ニ再嫁ス、

〔濱崎文書〕〇上杉輝虎
公記所收

蘆名盛氏

態、以使令啓之候、今度謙信、能州、賀州被入手裏御納馬之由、誠目出、當方満足不過之候、

依之今般及御音信候、取成任入候、月九日、全文ハ六年正

〔天正六〕
正月九日

〔蘆名盛氏〕
止々齋

新發田尾張守殿

〔笹生源左衛門氏所藏文書〕〇歷代古

案四所收

景廣三十
ラニシテ娶

以別紙申候、如此之事迄、沙門之進退ニ而、不似合候得共、丹後守三十二成迄、足弱無之候、是者定謙信不合氣ニ者ニ好思慮故、于今縁邊無之、與校量申候間、様々雖躋娘候、結局、愚氣遣ふと候得者、父子共ニ可爲迷惑候間、此度七尾納手裏候時、畠山義隆御臺、息

一人有之候ツル、是者京之三條殿之息女ニ候間、年頃も可然候歟、與思、息をハ身之養

子ニ置、老母をハ丹後守ニ爲可申合、爰元江召連、則丹後守預置候、少茂不足之分ニ者

無之候、以衣鉢可申候、僞ニ無之候條、彼息謙信養育申上者、身之かゝへの好ニも成候

〔天正五〕
極月十八日

謙信〔花押〕

北條安藝守殿

二十三日、謙信、管内ノ將士八十餘人ノ名ヲ注記ス、

〔上杉家古文書〕

天正五年十二月二十三日

四一七

三條殿ノ
息女
畠山氏ノ
息ヲ子養
ス

北條輔廣

天正五年十二月二十三日

中	本	加	荒	菅	安	千	琵琶	山	小	竹	河	河	那	北
條	庄	地	川	名	田	坂	嶋	浦	中	澤	田	田	波	條
與	清	宗	彌	源	宗	對	彌	源	彥	山	伯	九	次	安
(景泰)	(秀綱)				(景元)	(景親)		(國清)	兵	城	者	郎	藝	(輔廣)
	七	七	二		八	馬	七		衛			三		
次	郎	郎	郎	三	郎	守	郎	五	尉	守	守	郎	郎	守
河	吉	柿	色	竹	五	齋	長	山	上	上	大	倉	後	北
田	江	崎	部	侯	十	藤	尾	本	杉	野	石	賀	藤	條
勘	喜	(信景)	(晴家)	惣	三	下	小	伊	十	中	惣	左	左	丹
	四	衛	家	七	(慶綱)	(朝信)	(景直)	(定長)	(景信)	(家成)	(芳綱)	(衛行)	(勝元)	(景廣)
五		門	門	河	衛	野	四	與		務		衛	京	後
郎	郎	夫	郎	守	門	守	郎	守	郎	丞	介	尉	亮	守

上杉伯爵家所藏

天正五年十二月二十三日
 上杉謙信

(終)

小條 小糸 波 河 丹 次郎 氏名
 小條 小糸 波 河 丹 次郎 氏名

(始)

上杉謙信筆將士氏名

齋	遊	小	土	鱒	村	和	小	大	山	船	河	安	山	三
藤	佐	嶋	肥	坂	山	納	國	川	吉	見	田	田	岸	條
	右	六	但	備	善	伊	刑				對	新	隼	道
	衛	郎	馬	中	左	豆	部				吉	太	人	如
	門	左	守	守	衛	守	少				久	郎	佑	齋
	尉	衛	尉	尉	門	尉	輔				守	守		
		門			尉									
		尉												

天正五年十二月二十三日

寺	石	神	計	吉	河	本	堀		鮎	松	新	北	新	竹
崎	黑	保	見	江	田	田	江		川	房	發	條	保	俣
	左	安	與	織	豐	右	駿		盛	繁	田	條	孫	小
	近	氏	十	景	長	近	河		長	下	尾	條	高	太
	藏	張	郎	資	親	允	守		敦	高	長	條	常	郎
	人	藝	守	部	前	守			張	總	守	條	六	
		守		佑	守				守	守	守	條		
		尉												

小嶋甚	寺島牛
上條彌五郎	直江大和守
長澤筑前守	平子若狹守
井上肥後守	長與景連
遊佐美作守	三宅備長盛
同小三郎	溫井備景隆
平加賀守	西野隼人守
畠山大隅守	同將監
下間侍從法橋坊	七里三河法橋坊
坪坂伯耆守	藤丸新介
瑞泉寺	勝木興守

天正五年十二月廿三日

法印大和尚謙信

天正六年戊寅

紀元二千二百三十八年

正月癸丑朔

九日、辛酉蘆名盛氏、謙信ノ、加賀・能登ヲ平定シテ凱陣セルヲ賀シ、併テ會津ノ事情ヲ新發田長敦ニ報ズ、

〔濱崎文書〕○上杉輝虎公記所收

態以、使令啓之候、今度謙信能州賀州被入手裏、御納馬之由、誠目出當方満足不過之候、依之今般及御音信候、取成任入候、然者、此口弓箭之儀者、限（岩代）守山悉入手裏候、石川之儀者、在城一ヶ所迄候、其外無殘入手裏候、以前之自弓箭猶如存分屬本意候、定可爲大慶候、猶彼口上可有之候、恐々謹言、

追啓、盛隆鼓數奇と申候、此口鼓皮拂底候、可然皮一枚可給候、

盛隆ノ爲ニ鼓皮ヲ所望ス

（蘆名盛氏）止々齋

正月九日（天正六）新發田尾張守殿

十九日、辛未謙信、結城晴朝等ノ請ニヨリテ、兵ヲ關東ニ出サントシ、令ヲ管内ニ下シテ將士ヲ徵集ス、尋テ、越中其他ノ諸將之ニ應ズ、

〔仁科盛忠氏所藏文書〕○羽前

乍便札、及一翰候、仍晴朝、越山度々催促、尤雖得其意候、去秋迄能州無據之間、打懸北國之是非候之條、專彼國令取刷候キ、先書幾度如啓之、能越賀存分之儘ニ申付、越前も過

天正六年正月九日 十九日

四二一

能登越中

盛氏ノ戦捷

天正六年正月十九日

四二二

加賀及比
越前過半
謙信ニ屬
ス
佐竹義重
ヲシテ晴
朝ト協力
セシム

半屬手候條、此上者、到關左越山爲可成之、先月從十九日令陣觸、無油斷其支度申付候、
左様ニ候得者、慥麥秋敵地郷損可然候歟、畢竟如先年(佐竹)義重家中衆、我儘ニ手筋陣場被
嫌候、而者有其詮、間敷候之間、父子晴朝へ有入魂調儀落著、其上謙信事も其行轅候、猶
北條丹後(景廣)父子可申候、以上、

二月十日

謙信(花押)以下

○本書宛名切斷シテ知ルベカラザルモ、文意ヲ以テコレヲ考ルニ、太田資正父
子ニ與フル書ナルベシ、

〔歷代古案〕

○羽前

爲御兩所様御承、近々南方表可被成、御進發御書頂戴、忝奉存候、就其自分嗜之儀、聊不

小島職鎮
徵集ニ應
ズ

可存油斷之旨、及御稟候、彌可然様御取成奉憑候、恐惶謹言、

二月九日

小島六郎左衛門

三條道如齋信宗

吉喜

參人々御中

〔歷代古案〕

○羽前

急度令啓達候、仍當國衆へ御陣觸之御書、并去月廿八日之御書中、今月九日刻午參著候、

吉江景資

上杉謙信書狀

朝ト協力
セシム

如例者有其詮問敷候之間、父子晴朝へ有入魂調儀落著其上、謙信事も其行、
北條丹後(景廣)父子可申候以上、

(天正六)
二月十日

謙信(花押)以下

○本書宛名切斷シテ知ルベカラザルモ、文意ヲ以テコレヲ考ルニ、太田資正父
子ニ與フル書ナルベシ、

〔歷代古案〕五
○羽前

小島職鎮
徵集ニ應

爲御兩所様御承、近々(關東)南方表可被成御進發御書頂戴、忝奉存候、就其自分嗜之儀、聊不
可存油斷之旨、及御稟候、彌、可然様御取成奉憑候、恐惶謹言、

(天正六)
二月九日

小島六郎左衛門
小六左職鎮

(三條道如齋信宗)
三道

(吉江喜四郎信景)
吉喜

參人々御中

〔歷代古案〕六
○羽前

吉江景資

急度令啓達候、仍當國衆へ御陣觸之御書、并去月廿八日之御書、中、今月九日、刺參著候、

上杉謙信書狀

此書札片一紙の意、乃、御書頂戴、忝奉存候、就其自分嗜之儀、聊不
可存油斷之旨、及御稟候、彌、可然様御取成奉憑候、恐惶謹言、
○羽前

二月十日



ノ名ヲ以テ越中諸將ヲ徵集ス

〔河田豊前守及景資〕河田豊某爲兩人可申届之旨、御先書ニ示預候、同卅日之御書中ニ拙者爲壹人可申觸旨、蒙仰候條、任其儀各へ相届、則御請共奉進上候、將又御書札河豊へも申越候、我等手前之儀、聊無油斷、致御陣用意候、可然様御取成奉頼存候、恐々謹言、
(吉江織部佐)

吉織

景資花押

二月十二日

〔吉江信景〕

吉喜

〔三條信宗〕

參御報

○謙信、加賀ニ戰フヤ、明春融雪ノ時ヲ以テ、大舉上洛シテ、織田信長ト雌雄ヲ決セントシ、歸リテ西上ノ軍ヲ集ムル說アレドモ、前掲ノ諸文書ニ因リテ、天正六年出征ノ舉ハ、先ヅ關東ニ向ハントセルコト明ナリ、

〔參考〕

〔北越軍記〕

四下

○上文ハ、五年九月ニ、然所ニ、十月十日ニ、(大和)信貴城落テ、松永彈正父子

討死ノ由聞候ニ付、謙信ハ此上ハ詮ナシ、其上次第ニ陰寒ツヨク、雪モ降積リ候ユヘ、謙信ヨリ新谷源助ヲ使者ニテ信長へ被申入候ハ、來春三月十五日ニ、必越後ヲ出、上洛可仕候間、其時分信長モ安土ヲ被出可被指向、兩家興亡ノ合戰可致トノ旨ナリ、信

天正六年正月十九日

四二三

謙信信長ニ合戦ヲ挑ム說

信長ノ返答

天正六年二月十五日

四二四

長公ハ、謙信ノ使者ニ對面シ、返答ニハ、武邊ハ誰モ致事ナレバ、謙信ノ御弓箭ハ摩利支天ノ所變ノ業ニテ、日本一州ニ長ヲ可、雙者覺不申候、來春謙信御上洛ニ付テハ、路次迄出迎、扇一本腰ニ指、一騎乘込、信長ニテ候、降參仕ルト申、夫ヨリ都へ案内者致ハ、流石ノ謙信モ、信長粉骨シテ治取候天下ヲ、被召上事有間敷候、左候ハ、信長ハ西國、謙信ハ東國ヲ被治、兩旗ニテ禁裡ヲ守護可仕旨、不構返事也、謙信ハ、十月廿三日越後へ歸陣ナリ、○中 同月廿五日ニ、上杉領分、越後、佐渡、飛驒、越中、能登、加賀、上野、出羽、信濃へ陣觸、來年三月十五日ニ、謙信上洛ノ首途ト定候ナリ、

上洛ノ首途ハ三月十五日

二月 癸未朔

十五日、西岩代大槻城將大槻政通、西方城將山内重勝ト共ニ、蘆名盛氏ニ叛キテ謙信ニ應ズ、是日、盛氏、政通等ヲ擊チテコレヲ殺ス、

〔八幡宮年日記長帳續〕

天正六年

寅

會津稻川庄野澤邑大槻ノ城ハ、前ノ永徳ノ頃、

伊藤長門守藤原盛定築之住、其後替リ々々住ス、永祿五年壬戌三月ヨリ、大庭太郎左衛門政通ト云者住ス、是ハ會津武士領始、文治五年ニ佐原十郎義連ヨリ出タリ、義連子盛連、其二男北田次郎廣盛、河沼郡ノ領金上北田ニ住ス、其次男大庭河内守廣連ヲ以大庭氏ノ祖トス、其子刑部少輔盛廣、四代太郎次郎政隆ニ至、不風俗故ニ代々三百貫

政通越後ニ逃レントス

地領ス、二百貫文ノ地ヲ被取放、殘百貫文地ヲ領ス、政隆ヨリ八代今ノ太郎左衛門政通也、又彼カ代ニ成、不屈有テ、其内七十貫文ノ地ヲ取揚テ、三十貫文地ヲ領、下野尻ニ二年住メ、永祿五年ニ移、大槻城、大槻太郎左衛門ト云、己カ罪ヲ不知、憤叱ヲ以謀叛ヲ企、幸西方嶋城主山内右近大夫重勝ハ婿ナリ、是ヲ頼テ山内ノ一族瀧谷、檜野、原、沼澤、川口中井本名、野尻、横田、其外伊南ノ河原田ハ横田ニ妹婿也、是ヲ合スレ者、輩名ニ不劣大軍也ト思、廻文ヲ遣ス、顯テ輩名盛氏ハ片門、柳津兩方ニ押寄テ、二月十四日ヨリ合戰始ル、大槻ハ片門戰敗メ、越後ニ落ル志、宮崎ノ山ニテ、十七日爲川口被討、西方ハ柳津ノ戰敗メ、十五日ニ居館ニ歸テ自害、三十、八歲、號翠襄院殿釋淀居士、西方邑ノ上ニ葬、西隆寺一苦ノ字ノ字ト成、

政通盛氏ノ冷遇ヲ憤ル

〔會津舊事雜考〕七

天正六年二月十四日、大槻太郎左衛門被戮、被會伐、武功多蔑上、

故稍貶祿、後僅領三十貫、居大槻邑、後移居於今客館之地、居三年、太憤貶祿、密令告于婿山内右

近、而黨内應于上杉謙信、而欲報怨、右近居西方邑、○下

〔新編會津風土記〕

八十、瀧谷組、陸奥國大沼郡之九、西方村、古蹟

館迹、村西六町山上ニアリ、本丸東西

七間、南北十五間、二丸東西九間、南北十七間、天文十四年、大石組沼澤村ノ地頭山内彦次郎俊興二男左馬丞氏信ト云者、始テ居住ス、氏信カ四代ノ孫右近重勝、天正六年大

天正六年二月十五日

四二五

西方館

天正六年二月是月

四二六

〔政通〕
槻太郎左衛門ニ語ラハレ、上杉謙信ニ内應シ、蘆名盛氏ニ叛ントス、事就スシテ自殺ス、野澤組野澤本町ノ條、下今村南ニ重勝カ墓トテ一堆ノ古墳アリ、石塔ハ後人ノ建シモノナリ、

是月、謙信、畫工ヲシテ壽像ヲ描カシム、

壽像銘文

〔上杉謙信壽像裏書〕

○紀伊高野山無量光院所藏

件之御壽像者、越後國太守前上相藤原朝臣輝虎、改稱謙信、依離俗出家之御志御法體、戒堅固、受秘密之深法、傳兩部之瑜伽、給遂阿闍梨之職位、給畢、然天正六年戊寅三月十三日未刻、頓滅、同日彼壽像出來畢、御歲四十九歲、

四十九年一睡間、御結頌、兼知死期、給歎、不可思議、高野山無量光院、依御并所被定、令安置之畢、傳授大阿闍梨法印、大和尚位、清胤、教授阿闍梨權少都澄舜、

〔不識公畫像記〕

○紀伊高野山無量光院所藏

紀州高野山無量光院藏不識先公畫像

〔景勝〕

〔二十一〕

〔二十九〕〔茂憲〕

覺上公所納、明治戊子罹災燒亡、丙申四月、敬齋公登山弔祭先塋、遂詣院見、大僧都津村教榮、示所齋先公畫像寫真三種、曰、此種畫像多藏於家、未知孰是、貴僧請就中選最相肖者、教榮改容熟視、探其一、再拜曰、此尊像面目鬚眉毫無所差、但嘗所藏爲御雲昇天之圖、此少異耳、願自今安置於佛壇、夙夜奉供、以傳

不識公畫像記

結頌
清胤
澄舜

景勝ノ無量光院ニ納メシ畫像燒失ス

上杉茂憲

上杉謙信畫像



東京帝國大學所藏

再ヒ畫像
ヲ納ム

無疆公悅乃賜焉、即此畫也、謹按家譜、天正六年二月、先公(謙信)在春日山、命藏田五郎左衛門、召畫工於京師、畫壽影、及畫成、偶薨、遺言贈無量光院大阿闍梨清胤法印、法印曾住越後法幢寺、先公所尊崇者云、今徵教榮之言、此畫亦成於同工筆、不可疑、家保當日扈從、因奉命紀其事如此、明治三十一戊戌年五月、家扶柿崎家保謹記、

京都ヨリ
畫工ヲ召
ス

〔上杉年譜〕二十 天正六年二月、藏田五郎左衛門ニ命シ、京都ヨリ畫工ヲ召下シ、御

壽像ヲ仰セ付ラル、此御壽影、御遺言ニ依テ、後、高野山無量光院大阿闍梨清胤法印ニ寄附セラル、管領離俗出塵ノ御志ニヨリ、法躰、戒律堅固ニシテ、秘密ノ深法ヲ受兩部ノ瑜加ヲ傳ヘ玉フ、武名ト云、修心ト云、二難兼合スルノ英將タリ、

繪像ノ後
影

〔古老物語〕 大將ノ心ニヨリ、物每替リ有、信玄ハ後影ヲ木像ニテ、不動明王ニ象トラレケルト也、上杉謙信ノ繪像ノ後影ハ、上ニハ雲ニ獨(鎧)銜ノ乗タルヲ書、下ニハサシ渡一尺程ノ朱ノ盃一ツヲ書タル計ニテ、像ハナシ、此盃則我後影也ト云レシ、日來酒ヲ被好故ナランカ、何様替タルト也ト、木戸監物語レリ、此監物先祖木戸玄齋ハ、謙信家老ニテ、大剛ノ人也、武州盃尾ノ城主ニテ、忍ノ成田長康ト度々ノ合戰有、近年名高(田脫カ)キ、佐川喜六モ、此玄齋小姓立成リシトカヤ、

謙信ノ容
貌

〔久國談話〕 移昌寺住持シヤテツ物語、越後の謙信ハ、當國の川田駿河よとく似

天正六年二月是月

とる人也(折脱カ)節謙信を見とりと言ひしり、駿河ハ猿眼の様ニ目つらたまし以恐流しき也し、

吉川元春使者ノ見タル謙信ノ形装

〔延徳太平記〕

略上 元龜三年二月半モ過行比、中吉川元春、佐々木源兵衛定綱(經カ)ヲ

召出シ、汝ヲ甲州ノ武田大膳太夫入道信玄北越ノ上杉彈正少弼入道謙信ヘ可遣也、

略中 夫ヨリ越後國ヘ立越シカハ、謙信ハ、河田(長親)豐前守ヲ取次ニテ對面有ケリ、時節、看

經シテ御坐シ、壇上ヨリ直ニ出逢給ケルカ、如何思ヒケン、山伏ノ躰相ニテ、大禪門頭

巾篠懸ニ、太刀シツカト刺堅メテ立出ラレタル形勢ヲ見レハ、音ニ聞シ大峰ノ五鬼、

葛城高天ノ大天狗ニヤト、寒毛卓堅スル許リ也、中下略、全文ハ、元龜三年二月是月ノ條ニ收ム、

二月 壬子朔

十三日甲子、從五位下彈正少弼上杉謙信、越後春日山城ニ於テ卒ス、

〔林泉寺過去簿〕

○羽前 不識院殿心光謙信大居士、上杉彈正大弼輝虎公、此時改長尾、

號上杉、天正六戊寅三月十三日、

〔高野山過去帳〕

○諸寺過 去帳所收 上杉彈正少弼藤輝虎、本姓平氏、長尾信濃守平爲景男、天正六年三月十三日卒、年四十九、不識院心光謙信、

法號

〔清淨心院過去帳〕

○高野山伊 權大僧都謙信法印、越後長尾景虎公、後仁號輝虎、天正六戊寅年三月十三日入寂、

〔新選和漢合圖〕

天正六戊寅年、越後太守輝虎逝、三月、四十九歳、

〔平等寺藥師堂題書〕

○越 天正六年ひの三月十三日、謙信(頓死)とんしニ付而、三郎殿喜平次殿御名代あらそ

頓死

ひ、國中いこくニ候、中下略、全文ハ、五月二十八日ノ條ニ收ム、本

〔上杉家古文書〕

態用ニ書候、爰元之儀、可(無脱)心元候、去十三日、謙信不慮之虫氣、不被執直遠行、力落令察候、

景勝謙信ノ卒去ヲ小島職鎮、蘆名盛氏ニ告グ

○下略、全文ハ、三月二十日ノ條ニ收ム、

三月廿四日

景勝(花押)

小島六郎左衛門とのへ中景勝、石黒左近藏人

態啓述、仍(三月)去月十三、謙信不慮之煩、不被取直遠行、恐怖可有御察候、中下略、全文ハ、四月三日ノ條ニ收ム、

卯月三日

景勝(花押)

蘆名四郎殿

天正六年三月十三日

未刻卒ス

天正六年三月十三日

四三〇

〔上杉謙信壽像裏書〕

○紀伊高野山無量光院所藏

略○上天正六年戊寅三月十三日未刻頓滅

○中略 御歲四十九歲是月ノ條ニ收ム

〔續本朝通鑑〕

六百

天正六年三月甲子上杉輝虎入道謙信卒於越後春日山城十四歲謙信欲以是月丙寅

日十五發國向洛一日如廁俄病病五日而終臨終語曰我一期榮一孟酒四十九年一炊夢生不

法印又有狂歌

〔供養塔銘〕

○上野利根郡桃野村大字上津如意寺境内

供養石塔

造立石塔一基

奉爲謙信法印

天正戊月□月□○此塔ハ上野中務丞家成ガ後閑ノ怨林寺ニ建テタルモノナルガ後ニ現地ニ移シタリト傳フ

〔本誓寺記〕

○越後

天正六寅年三月謙信四十九歳以て逝去有之候處略○本葬有之候

處超賢も謙信公逝去を殊之外被及愁傷大恩之國主ニ付本誓寺ニ而も門末被召呼

一七ヶ日之法會執行いとし候ニ付景勝も使者施物有之候春日山ニ而も超賢義

ハ數度拔群之勳功ニ付葬之節ハ勿論大法會之度ニ導師同様之尊敬ニ御座候

本誓寺ノ供養

〔上杉家譜〕

輝虎初景虎 政虎

系圖略歴

虎千代 平三 彈正少弼 宗心 謙信 實ハ越後府中城主長尾信濃守爲景天文十一年四月廿一

四日干壇野ニ戰死年六十六 二男母ハ越後栖吉城主長尾肥前守顯吉女永祿十一年五月七日卒享祿三年正月

廿一日越後府中城ニ生ル天文五年八月元服シテ平三景虎ト號ス同十八年ノ夏兄

晴景ニ代リ長尾氏ヲ繼ク同十九年二月廿八日足利義輝白傘袋毛氈鞍覆ヲ免許ス

同廿一年五月彈正少弼ト稱ス同廿二年閏二月上洛將軍義輝ニ謁ス四月十日參内

入道天杯ヲ賜フ同十二日亂ヲ鎮メ逆ヲ誅スヘキノ繪旨ヲ賜フ十二月八日紫野大德寺

徹岫法號ヲ宗心ト授ク永祿元年四月管領憲政來リ管領職及上杉氏ヲ讓ル固辭ス

同二年四月上洛廿七日義輝ニ謁ス五月參内昇殿ヲ許サレ龍顏ヲ拜ス天杯及寶刀

ヲ賜ハル栗田口吉光五且ツ勾當内侍ヲ以宣旨ヲ賜ヒ禁裏院中ヲ警衛スルノ功ヲ

褒セラル六月廿六日勅シテ菊桐紋ヲ許サル且義輝ヨリ文裏書塗輿朱柄傘屋形號

ヲ免許シ同朋珍阿彌ヲ賜フ同三年謙信ト改ム同四年四月廿一日鶴岡八幡社ニ於

テ假ニ管領職ニ即キ上杉政虎ト稱ス同五年十二月五日義輝大館藤安ヲシテ來ラ

シメ關東管領ニ拜スルノ命ヲ致シ且ツ諱ノ字ヲ賜ヒ輝虎ト改ム天正二年十二月

天正六年三月十三日

四三一

同朋珍阿彌 上杉氏ヲ稱ス 關東管領

再上洛

入道

上洛參内

長尾家ヲ繼ク

平三景虎

長尾爲景ノ二男

系圖略歴

天正六年三月十三日

四三二

剃髮灌頂
卒去

十九日剃髮護摩灌頂シ、法印大和尚ニ任ス、同四年、大阿闍梨權大僧都ニ任ス、同六年三月十三日春日山城ニ卒ス、年四十九、初メ上杉憲顯越後守護タル爾來、長尾一族國中ニ充滿シ、各城邑ニ據ル、輝虎ニ至リ憲政ノ讓ヲ受ケ、全ク越後佐渡ヲ領シ、加賀能登、越前、越中若狹、飛驒、信濃、上野、武藏、相模等ノ地ヲ略ス、一代武略、枚擧ニ遑アラザルナリ、

〔上杉家譜〕

附錄 古書の儘

三月九日
卒倒ス

天正六年三月九日、午之刻、謙信公俄ニ中風の御症を受玉ヒ、卒倒シ、人事を辨し玉ハ以御一族を始、諸士動轉せる事限りふし、其内諸大將并諸老臣中驚怖ニ堪えそ、内外の諸醫を招き、佛神之諸堂社へ代參を走らせ、祈療ふ手抜盡そといへとも其志るし、及し直江大和守景綱の後室御枕邊近く候して、高聲にて御跡目御相續へ何き候哉、景勝公ふて候哉と奉伺候處、最早御言舌を叶ヒ玉はされとも、うるはした御様子ふて、唯御首肯し玉ヒ々れハ、並居たる諸臣皆喜悅の眉をそ舒ふなる、同十三日、御病氣御叶無之、未之刻眠るう如く逝去し玉ふ、御年四十九、御辭世如左、

辭世ノ偈

四十九年一睡夢、一期榮華一盃酒、嗚呼柳綠花紅、

〔謙信一代記〕

天正六年戊寅、輝虎四十九歳、三月九日、厠ニ行テ初テ痛ヲ患フ、終已

春日山ノ
長維ニ葬ル

マズ、同十三日ニ薨去シ給フ、群臣悲泣シ、幕下ノ諸士貴賤上下ニ至マデ、歎惜ノ感涙ヲ流サスト云フナシ、其辭世曰、四十九年夢中醉、一生榮耀一盃酒、ト書給ヘリ、即春日山ノ長維此ヲ葬レリ、

〔本誓寺記〕

後越

天正六、辰年三月、謙信四十九歳ふて逝去有之候所、養子景虎、景勝

謙信ノ逝
去ト超賢

家督争ひ、合戦及數度、終ニ景虎打負退去、景勝家督ニ相成候上、本誓寺ニ相成候所、〔本誓寺〕謙信逝去を殊之外被及愁傷候、大恩之國主ニ付、本誓寺ニ而も門末被召呼、一七ケ日

之法會執行いとし候ニ付、景勝も使者施物等有之候、春日山ニ而も超賢義ハ、數度拔群勳功ニ付、葬之節ハ勿論、大法會之度ニ導師同様之尊敬ニ御座候、

〔上杉年譜〕

二十

天正六年春三月九日ノ午刻、管領卒中風ヲ煩セ玉ヒ、忽困倒シテ

九日午ノ
刻發病卒
倒

人事ヲ顧ミ玉ハス、御一族ヲ始メ、諸將群臣以下驚動スル事限りナシ、醫王善逝ノ誓約モ祈ルニ其驗ナク、華陀倉公カ異藥モ其施功ヲ失フ、時ニ直江大和守景綱カ室、御枕近ク候シケルカ、高聲ニ、御家督ハ彌景勝公へ御讓リ玉ハンモノト申演シニ、管領御言舌トマリ玉ヒシカトモ、御納得アレハ、只御首肯シタマフハカリ也、左右ニ列候ノ諸臣等、於是邦家安塔ノ思ヲナシ、羽翼成就ノ喜ヲ含ム、誠ニ愁裏ノ喜悅ト云ハ此ヲ謂ンカ、或ハ諸士ノ内、猶豫ノ族モ是アルト也、同月十三日未刻、御病惱相協ス、享年

言語通セ
ズ

享年四十
九

天正六年三月十三日

四三三

天正六年三月十三日

四三四

十五日葬
送
大乘寺長
海導師タ
リ

法號眞光
遺骸ニ甲
冑ヲ著ケ
不識院内
ニ埋葬ス

出軍準備
ノ最中ニ
發病

法號宗眞

四十九齡ニテ遠行シ玉フ略中

同月十五日、御葬送ノ經營有ヘシト事定リケル、管領素ヨリ眞言一宗ニ歸依シ玉フ故、御導師ハ春日山北丸大乘寺ノ住持長海法印ナリ、景勝公景虎政繁ヲ始メ、棺槨ノ左右ヲ守衛シ奉リ、元老諸士ハ先後ノ供奉ヲ相勤ム、其規式甚以テ嚴重タリ、於是顯密ノ高僧相議シ、舊名ニ依隨テ、奉稱號不識院殿眞光謙信法印大阿闍梨、管領ノ御遺言ニ任セ、御尊骸ヲハ甕内ニ納メ、平生ノ御武威ヲ不變、甲冑ヲ著サシテ、不識院内ニ葬埋シ奉リケル、越國ノ人民等、幾年カ此境ニ居住シテ、管領ノ御仁政ニ懷キ隨ヒシカハ、男女老若マテ父母ニ別ル、心地ニテ愁傷ノ顔コレヲ見ルニ忍ス、近國ノ敵兵等此費ニ乘シテ、如何ナル逆浪ヲカ翻スヘキト、老将各其備怠ラス略下

〔北越軍記〕四下

天正六年戊寅、四十九歲、正月ヨリ謙信上洛ノ用意彌以テ頻ナリ、加賀能登越中ノ軍兵ハ、謙信上洛ノ砌路次ニテ待付付供可仕飛驒ノ人數ハ、越中黒川ニテ、謙信出馬ニ參會仕ベシ、上野佐渡庄内信濃四ヶ國ノ軍兵ハ、越後春日山へ、三月五日前後ニ參著可仕トノ觸ニテ、二月下旬ヨリ馳集人數不可勝計、然所ニ、三月九日、一説、十一日ニ厠ヨリ腹痛ヲ煩出、晝ヨリ、謙信卒中風ヲ被煩著、色々醫療致候ヘ、次第ニ重リ候、中同月十三日ニ、謙信逝去、不識院殿權大僧都法印謙信心光宗眞大阿闍梨ト號ス、辭世

遺骸ヲ瓶
ニ入レ鹽
ヲ詰メル

謙信信玄
ノ比較

日、四十九年一睡夢、一期榮花一盃酒、嗚呼柳綠花紅、其後葬送ノ儀アリ、追善萬部ノ法華經種々ノ作善アリ、謙信遺骸ヲバ、瓶ニ入、鹽ヲ以テ詰之、棺ニ納略下

〔甲陽軍鑑〕二十

(天正六)

寅三月九日、謙信閑所待して煩出し、五日煩、則五日目十三日、謙信公四十九歲待して他界なり、辭世に詩を作り給ふ、追相尋可レさる程、謙信、信玄公一武道はさのミをとらぬ、名大將と申候へ共、御分別の才智、信玄公一は拔群おとり給ふ故、他界の日より、居城國の越後燥たつ、略下

〔關八州古戰錄〕十

上杉謙信逝去付春日山ノ城邑動亂事、越ノ上杉不識菴謙信ハ、去ル年丙子ヨリ去歲ニ至テ、越中飛驒加賀能登、及越前ノ豊原迄一遍ニ切從へ、今ハ早近江路へ亂入シテ、織田信長ヲ追討シ、帝都ニ旗ヲ建シ、事案ノ内ナリト地盤シ、是歲天正六年戊寅ノ春、領國ノ軍勢ヲ觸促シテ、既ニ越府ヲ首途セント用意專ラナリシ處ニ、三月十一日ノ黄昏ニ、厠ニ入テ卒中悶絶シ、同キ十三日、越後ノ國頸城ノ郡春日山ノ城ニ於テ逝去ス、春秋四十九歲、世舉テ不惜者ナシ、急病タルニ依テ、領知所務分ケノ遺命モナク、三下略、五月十日ノ條參看、

〔日本洞上聯燈錄〕卷第十

霜臺藤輝虎居士、本姓平氏、長尾之族也、後受上杉憲政之讓、改爲藤姓、天資勇敢、精練軍術、不與嬪侍同處、常習趺坐、永祿歲上京師、謁大元帥義輝公、

天正六年三月十三日

四三五

謙信禪ヲ
學ブ

遺命ナシ

厠ニ入テ
卒倒ス

天正六年三月十三日

四三六

林泉寺益翁ニ參ス

公命掌管領職、領北陸數州、暇日延諸山禪將、諮詢心要、士自以為得、由是自負、到處數資、談柄、聞林泉益翁謙禪師機鋒、不可觸、士擬抑之、即微服到山、隨衆入室、翁舉達磨見武帝公案、衆下語法戰交鋒、翁顧士曰、達磨不識意、旨作麼生會、士無對、翁曰、太守尋常口吧吧地、到這裏爲什麼不說破、士慚然汗下、始慙服、翁曰、此事要得相應、直須大死一回、始得、士退參數月、有省、徑往入山、翁見其來、即曰、且喜太守打透漆桶、士下拜、薙髮自名謙信、慕謙公之作也、天正六年三月嬰疾、十三日謂左右曰、四十九年夢中醉、一生榮耀一杯酒、言畢遂卒、號不識院、

法號原據

〔羽後成就院所藏文書〕

○歷代古案五所收

略○上 一其國之大守謙信、大方於太刀者、日本無双之名大將ニ而御入候由、(武田)信玄入道時々刻々愚拙へ物語ニ而候キ、如御存我等も生得物數寄ニ而候間、一度者見參申度願望候、然共年齡より令老衰候間、不及下向候、此儘相果候へん事、無念至極候事、○下略、全文ハ、

四年十月十五日ノ條ニ收ム、

甲州教雅

(天正四)十月十五日

(長福寺)越後上條談義所

甲州

教雅

信玄謙信
ヲ評ス
日本無雙
ノ名大將

地、到這裏爲什麼不說破、士憤然汗下、始慙服、翁曰、此事要得相應、直須大死一回始得、士退參數月、有省、徑往入山、翁見其來、即曰、且喜太守打透漆桶、士下拜、薙髮自名謙信、慕謙公之作也、天正六年三月、嬰疾、十三日、謂左右曰、四十九年夢中醉、一生榮耀一杯酒、言畢遂卒、號不識院、

〔羽後成就院所藏文書〕○歷代古案五所收

略○上一其國之大守謙信、大方於太刀者、日本無雙之名大將、而御入候由、(武田)信玄入道時、夕刻々愚拙へ物語、而候キ、如御存、我等も生得物數寄に而候間、一度者見參申度願望候、然共年齢より令老衰候間、不及下向候、此儘相果候へん事、無念至極候事、○下略、四年十月十五日、日ノ條ニ收ム、

(天正四)
十月十五日

(長福寺)
越後上條談義所

甲州

教雅

長尾景虎三首懷紙

春日同詠之自和秋

渾身武勇景虎

春月

少子やれはたふかえり
よの月のふらんかとり思
もりのありやん

雲雀

春の光も草のつらや
まのひらりすまの野の原り
からてるくさ

初戀

けしきも人よりあはれ
あはれも神よりほろと
けしきもあはれ

空陀法印

連歌

天正三年
正月十九日
連歌會
ヲ春日山
城ニ開ク

和歌

空陀法印御房

〔連歌百韻〕
○伯爵上
杉家所藏

第六

賦何世連歌

氣ふからは木毎におもふ一葉哉

〔謙信筆懷紙〕
○伯爵上
杉家所藏

春日同詠三首和歌

謙信
○上下
略ス

彈正少弼景虎

春月

雲雀
やハ、や羽、たうみ忍空了、春乃月の、うす見かたる忍、う夢ハありやせ、
な終もまゝ、草乃百くらや、ゆふひそり、すそ野の原了、おちてあくなり、

祈戀

此らう望し、人こそあらぬ、祈禱とて、神すも怪くそ見あふ、海う形、

〔伯爵上杉家所藏文書〕

天正六年三月十三日

四三七

春日同詠三首和歌
謙信筆懷紙

天正六年三月十三日

夏日詠夕立

風の音をまつさきたて、さゝの葉のみやまも迷ふ夕立の空、
旅行

あふ人をたひには友と、ことゝはん思ふ都のつてならずとも、

〔北越軍記〕^{七下} 天正二年八月能登陣なり、七尾城ヲ九月十一日ニ謙信攻落、同月

十三夜明月ナレハ、七尾城ニテ詩歌ノ會アリ、謙信ノ作、^{○中略、七言詩一首、天正五年九月十三日ノ條ニ收ム、}
其後、越前細呂木ニテ、謙信、

野伏する、鎧の袖も、楯の端も、みな白妙の、今朝のそり雪、
其以前、越中陣の時、魚津城ニテ、初雁ヲ聞テ、謙信、
武士の、鎧の袖を、かたまきて、枕もちろき、初雁の聲、

〔上杉家什寶目錄〕

^四經卷并佛像

一大般若波羅密多經卷第五百七十八 壹帖

平假名朱字謙信自筆

但、用紙紺紙、堅八寸三分、横三寸、表紙赤地金欄、見返撒金銀、表紙裏金紙堅二寸三分、横九分、中ニ、藤原輝虎トアリ、金刷、十六善神銀罨、前半葉五行、一行十七字、平假名朱字謙信公御筆、奥ニ、天文十九年^{庚戌}八月廿一日、般若經六百卷一筆、沙門秀快書之畢、卷末、曼陀羅寺常住持主奥、岩城住甚如之、ト金字アリ、帙萌黃銀欄、縮緬帛紗包、

一大般若波羅密多經卷第五百七十八 壹帖

但、用紙烏ノ子、無表紙、堅五寸、横二寸二分、無罨、墨書、前半葉四行、一行十七字、首尾朱假名謙信公御筆、

佛畫

一摩利支天尊 壹軸

但、用紙烏ノ子、堅一尺六寸七分、横五寸、梵字七字、紙表裝、縮緬帛沙包、箱内御自筆^(謙信)由緒書アリ、
一大乗妙典刊本

但、用紙烏ノ子、堅八寸六分、袖表淺黃緞子、裏金上下祿青、單罨、每行十七字、朱假名謙信公御直筆、軸銅減金、

〔官報〕

大正六年四月五日 文部省告示第七十二號

國寶指定 刀劍 丙種 劍

無銘、梵字及七星ノ金銀象眼アリ、
鞘十二支蒔繪、傳、上杉謙信所持、

山口縣米澤市南堀端町 上杉神社

○長一尺三寸七分、莖三寸九分、表ニ七曜星、上ニ梵字四十六字、裏ニ梵字六十三字、金銀象嵌、鞘金梨子地蒔繪十二支、明治二十六年、柄栗形盜難ニ罹リテナシ、上杉家記録ニ、禱祭御用御劍ノ儀、謙信公、摩利支天法御修行之際、護摩壇ニ於テ、御用被遊候品、トアリ、

〔林泉寺山門扁額〕

後

(其一) (木製彫刻) 堅四尺二寸五分、五分、横八尺二寸五分

春日山

天正六年三月十三日

筆蹟

國寶謙信護持ノ劍

天正六年三月十三日

藤原輝虎(花押)

(其二) (木製彫刻) 横前=同ジ

第一義

〔官報〕

明治三十五年四月二十九日
内務省告示第二十九號

上杉神社

山形縣羽前國米澤市南堀端町鎮座

祭神 上杉謙信

右神社ヲ別格官幣社ニ列セラル、旨四月二十六日仰出サル、

明治三十五年四月二十九日

内務大臣男爵内海忠勝

〔位記〕

○伯爵上杉憲章氏所藏

故從五位下上杉輝虎

贈從二位

贈從二位

明治四十一年九月九日(朱印)

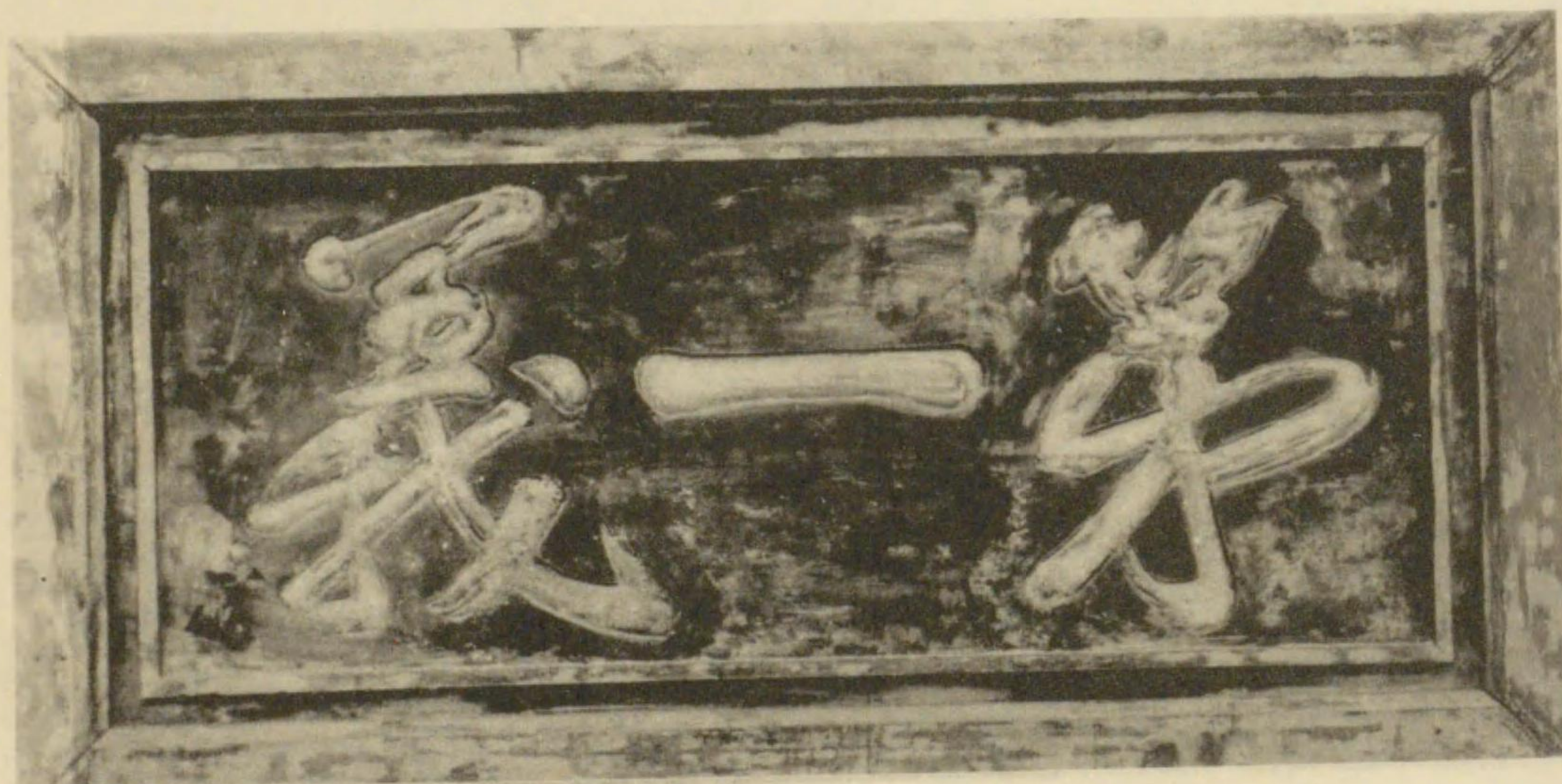
宮内大臣正二位勳一等伯爵田中光顯奉

〔贈位策命文〕

天皇乃大命爾坐世、彈正少弼從五位下上杉輝虎乃墓前爾、宣給波久宣留、汝命波、天文

策命文

上杉謙信筆蹟



越後 林泉寺所藏

永祿乃昔乃亂禮多治米牟爲且心乎竭志身乎効留我多中爾掛卷母恐支

後奈良院天皇乃御代波爾京都爾參上且利天盃並御劔乎賜且波利不服者等討罰牟倍由乃

勅乎蒙利掛卷母恐支

正親町院天皇乃御代波爾或波禁闕乃守衛乎仕奉利或波領邑乎獻且利宮室乎修理米

給布資爾充給牟波事乎請奉利又己我領知留禮國內乃戶每爾課且世伊勢乃皇大御神乃大

宮造留倍支資乎獻且良志

神爾君爾忠誠爾仕奉志利事乎字牟賀志美給比曩爾別格官幣社爾列給比志猶飽受思

志保今回特爾從二位乎贈且良世給比位記乎授賜布是乎以且山形縣知事正五位勳三等馬

淵銳太郎乎差使且如此乃狀乎宣給波久宣留

明治四十一年十月三日

○謙信壽像ノコト、二月是月ノ條ニ、墓所ノコトハ、慶長三年八月二日、上杉景勝

コレヲ會津ニ移葬スル條ニ見ユ、一代ノ事蹟ハ、享祿三年正月廿一日以降各條

ニ散見ス、

〔參考〕

〔北越華押叢〕 上杉輝虎

天正六年三月十三日

早虎馬

○本誓寺文書(越後)
永祿十年二月八日

獨虎馬

○志賀樞太郎氏
所藏文書(羽前)
永祿十二年七月二十九日

藤虎馬

○志賀樞太郎氏
所藏文書(羽前)
七月二十九日(元
龜元年カ)

〔附録〕

○左ノ文書ハ、年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、他ハコレヲ略シテ載セズ、

〔上杉家文書〕

爲新春之嘉祥、卷數并青蚨三十疋到來、快然之至候、恐々謹言、

謙信(花押)

正月八日

(三島郡逆谷)
寛益寺

寛益寺

○寛益寺草創ノコト、天平勝寶元年二月二日ノ條ニ、本堂再建及ビ本尊薬師如

天正六年三月十三日

天正六年三月十三日

四四六

來像ノコト、竝ニ二王像銘文ノコト、寛永元年十一月十一日ノ條ニ見ユ外ニ謙
信ノ、同寺ニ宛ツル書狀ニ通アレドモ、茲ニ略ス、

〔歷代古案〕〇羽前

紙之寸法

一壹尺五寸五分

一五寸五分ハ

包紙之寸法

一七寸

一貳寸八分

長 幅

摩利支天
法千座

摩利支天之法千座申付處ニ、嚴重修卷數目出候、此度此口存分之儘ニ候條、可心安候、
彌、抽精誠尤候、恐々謹言、

九月十日

謙信

大乘寺

大乘寺江

〇景勝、大乘寺ニ萬部執行法度ヲ管掌セシムルコト、十八年三月朔日ノ條ニ見ユ、
〔菅谷寺文書〕〇越後

今月之有祈念、卷數并爲音信、紅燭如員數、珍重之至候、恐々謹言、

天正六年三月十三日

四四六

來像ノコト、竝ニ二王像銘文ノコト、寛永元年十一月十一日ノ條ニ見ユ、外ニ謙信ノ同寺ニ宛ツル書狀ニ通アレドモ、茲ニ略ス、

〔歷代古案〕一 羽前

紙之寸法

一 壹尺五寸五分

一 五寸五分ハ

包紙之寸法

一 七寸

一 貳寸八分

横 長 幅

摩利支天之法千座申付處ニ、嚴重修卷數目出候、此度此口存分之儘ニ候條、可心安候、彌、抽精誠尤候、恐々謹言、

九月十日

謙信

大乘寺

大乘寺江

〔菅谷寺文書〕

○越後

○景勝、大乘寺ニ萬部執行法度ヲ管掌セシムルコト、十八年三月朔日ノ條ニ見ユ、今月之有祈念、卷數并爲音信、紅燭如員數、珍重之至候、恐々謹言、

謙信印章

○木製八顆 伯爵上杉憲章氏所藏

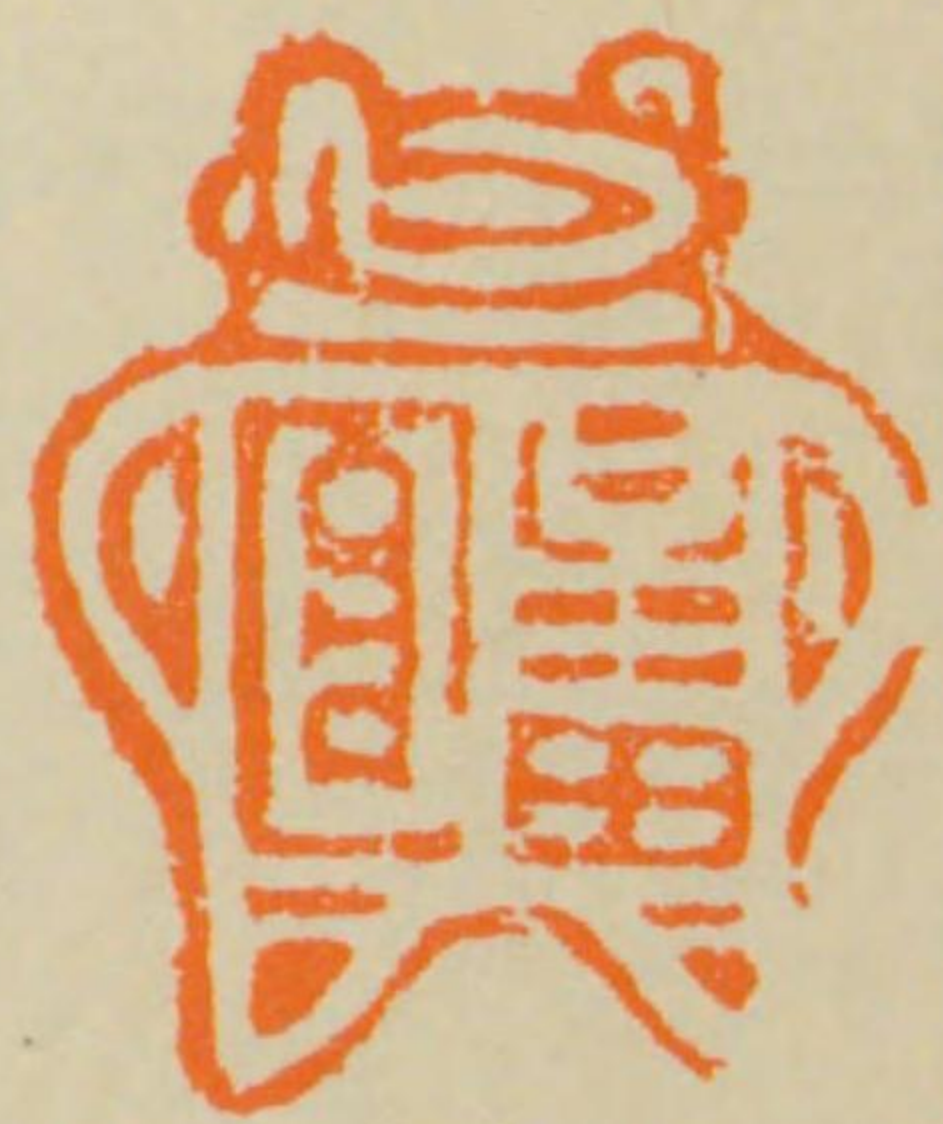
勝軍地藏
摩利支天
飯繩明神



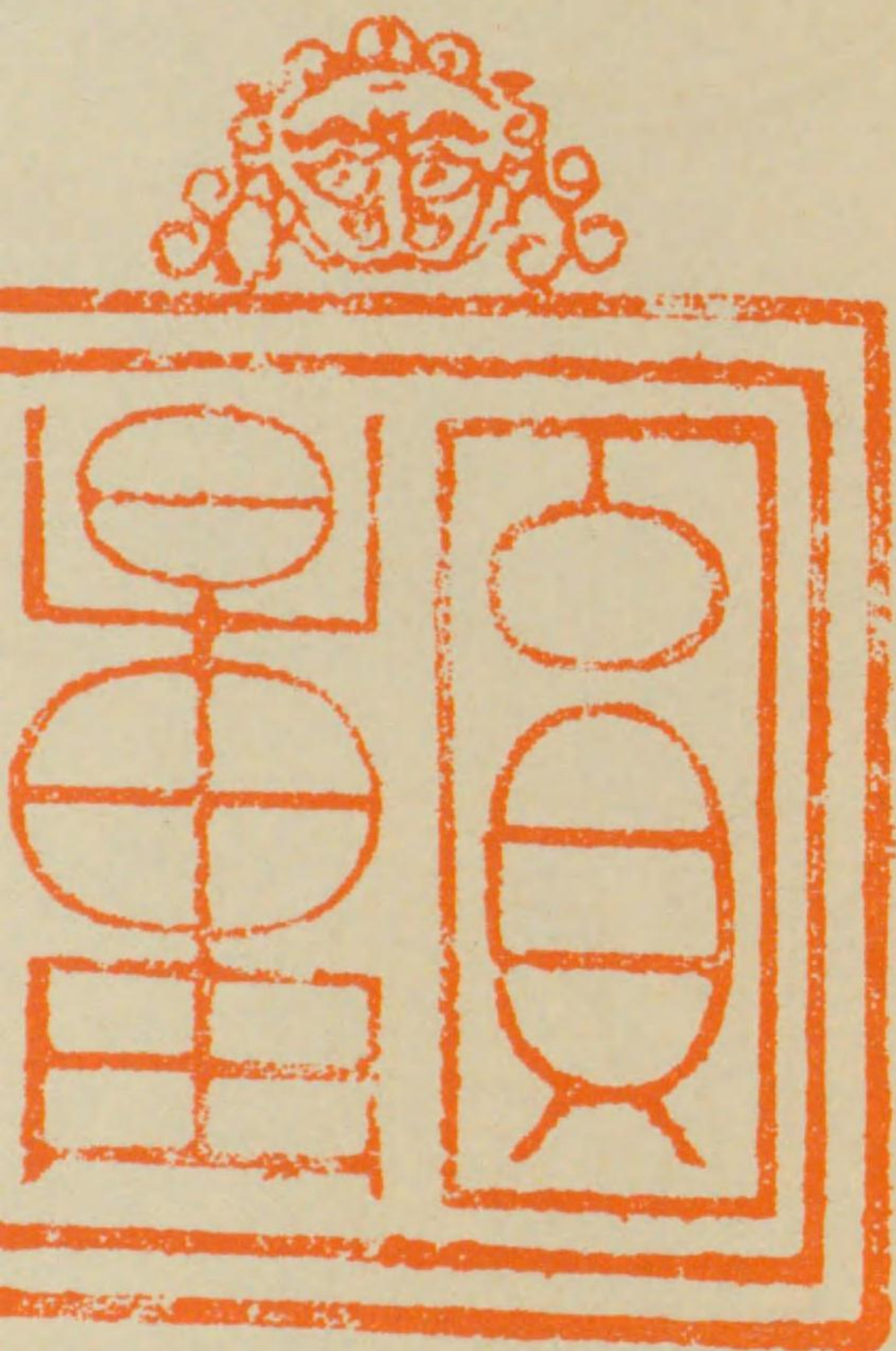
寶在心



圓量 (左文)

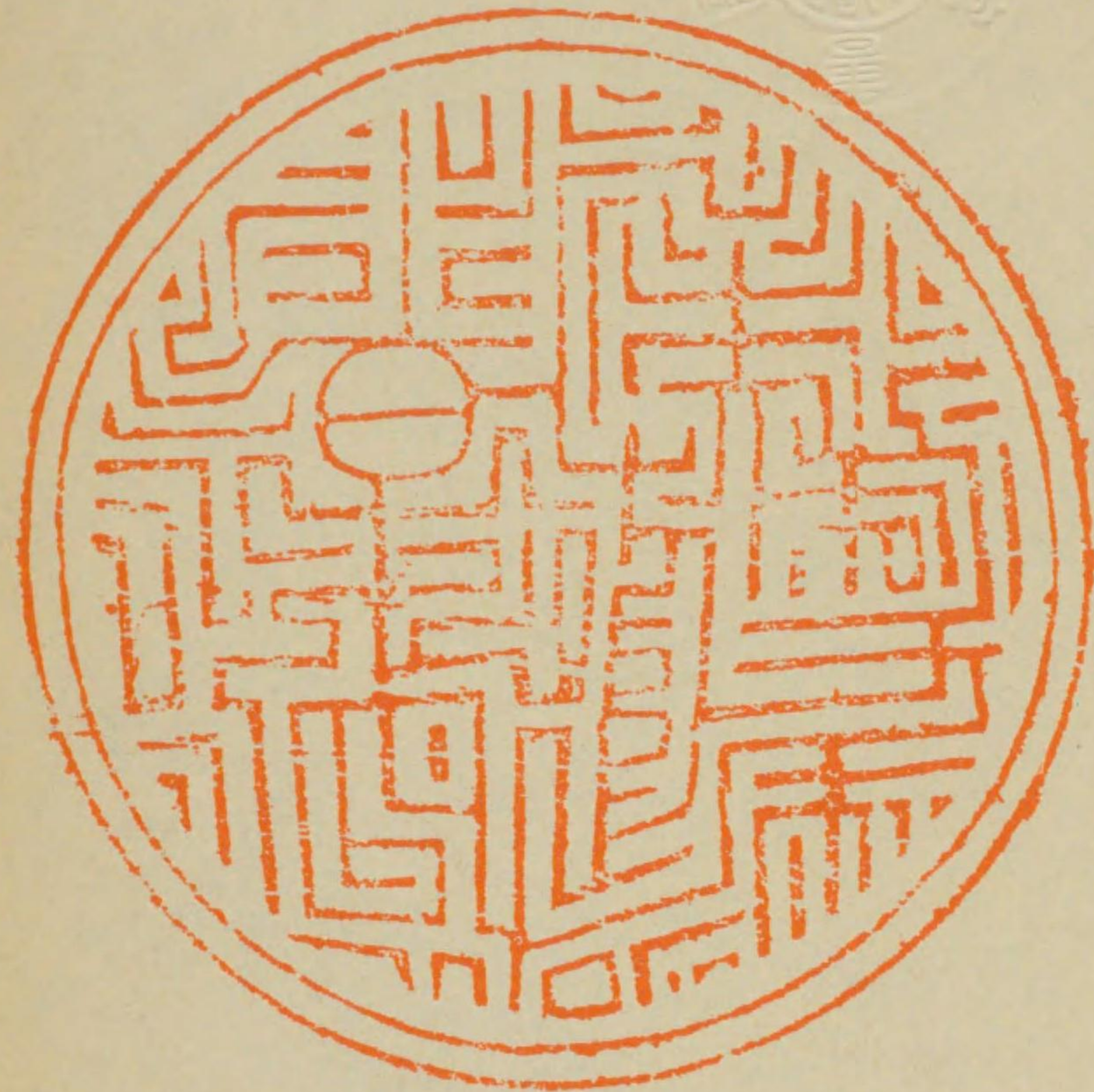


圓量





摩利支天
千手千眼
勝軍地藏



森歸掌裡



森歸掌裡



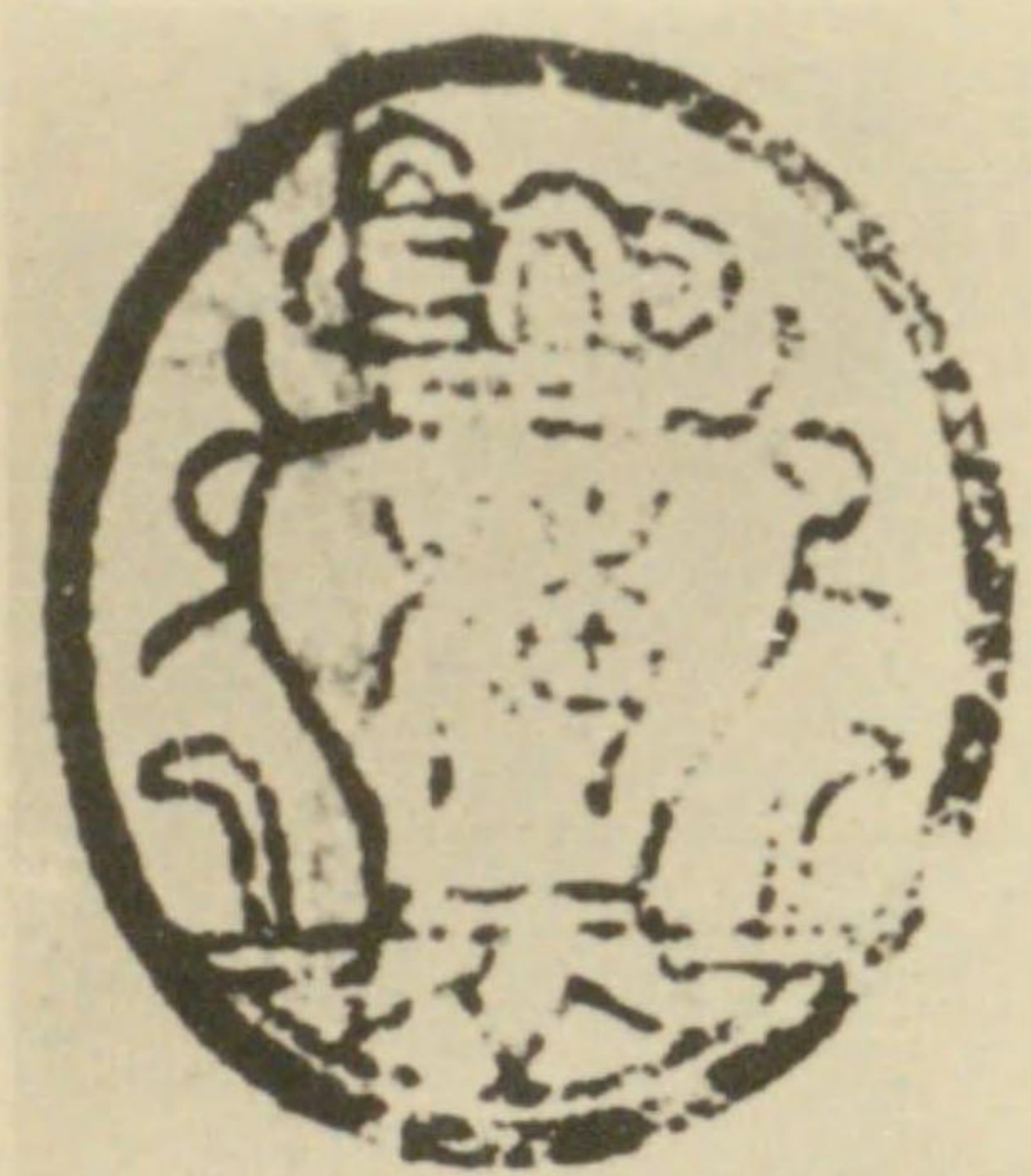
阿彌陀
日才天
辨天



圓量 (左文)



圓量

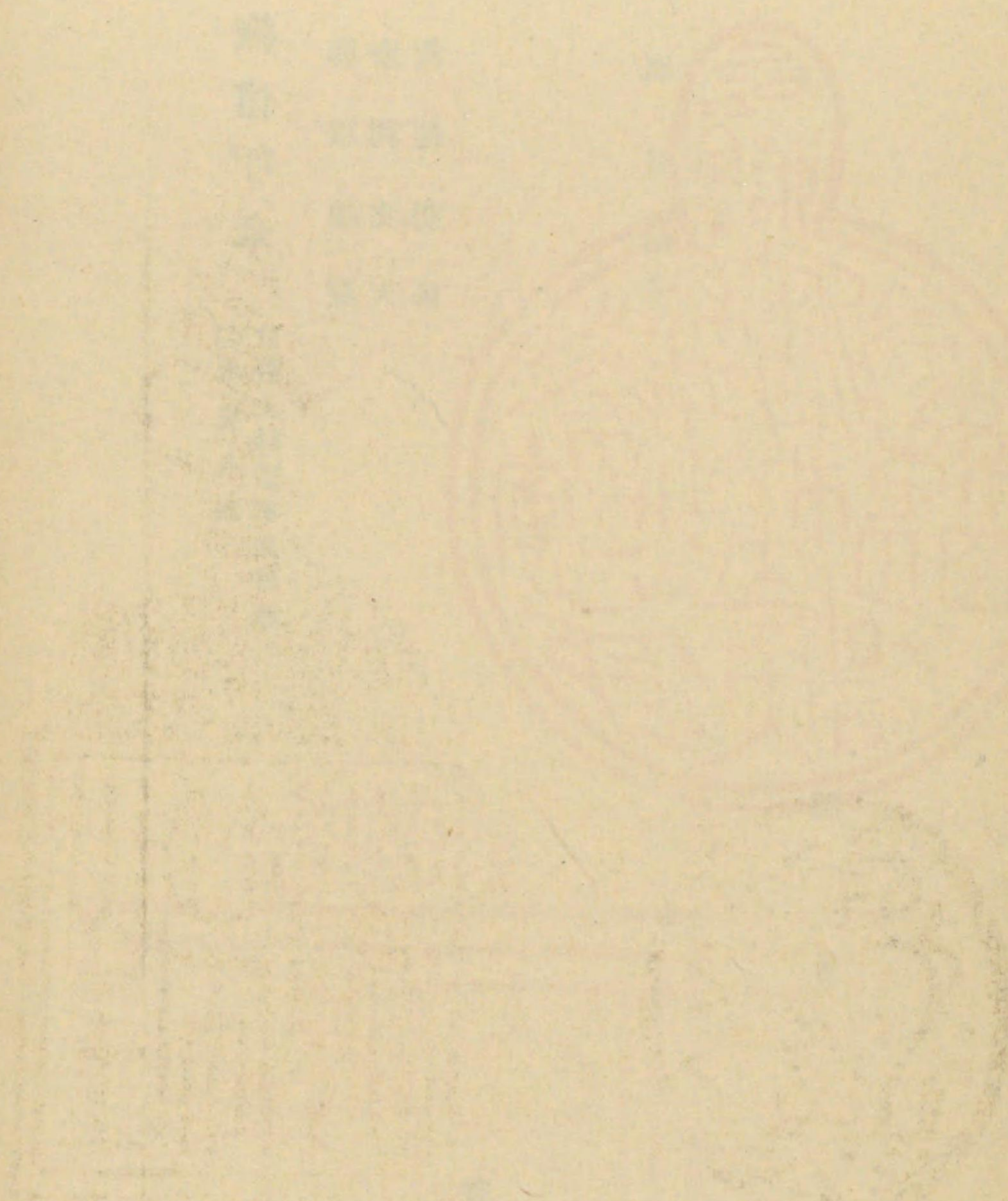


○ 吉江文書(羽前)
永祿九年二月二十一日、印文梅、



○ 本成寺文書(越後)
年次不明、印文地帝妙、

謙信印章 (朱印)



菅谷寺

五月十一日

謙信(花押)

(北蒲原郡菅谷村)

菅谷寺ノコト、建久六年十月十一日ノ條ニ見ユ、

〔上杉文書〕一羽前

寶幢寺八幡別當兩僧ノ加持力不足ヲ責ム

便宜候間申候、寶幢寺八幡別當ニ可申様者、夏中千手之法を、千座五十餘日爲行候處、吉事者無之、結句如此分國未落居ニ而、身之爲擗馬之腹候、偏兩僧(加持)力之無足ニ候歟、此時者(肝膽)かんたんをくといて、留守中分國無何事、無事長久堅固ニ、於當陣得大利有存、儘納馬候様之祈念、夜之目を寐ず、歸陣之内可被抽城(守)誠、由、此書中其方持兩寺江急度可被申付候、さるとてハ兩僧惣別之祈念申付候條、替身命可被祈由可被申届候、萬吉々恐々謹言、

留守中無何事、祈念第一候、爰元者見詰候間、勝利眼前候、以上、

八月廿四日

謙信(花押)

發心坊

〔歷代古案〕四羽前

態使者差遣候、彼者ニ申含條々具聞届、分別候て取變專一二候、河田(重親)伯耆守ニも彼者

天正六年三月十三日

四四七

發心坊

河田重親

天正六年三月十三日

四四八

召連、厩橋へ打越、其方父子にて調談可取、由申付候間、談合にて時分一相證候様ニ、引詰而成就候様被稼、簡要候、猶、彼者可有口上候謹言、

正月十五日

謙信

北條高廣父子

北條丹後守殿

北條安藝守殿

〔上杉文書〕

〇羽前

其元無力之旨、無余儀候、因茲北條丹後守所江具申越候、近日可爲越山候條、其内堅固之仕置、專一候、猶、萬吉重而可申越候、謹言、

三月廿三日

謙信(花押)

赤堀上野守

赤堀上野守殿

上表存分之儘ニ有之而納馬候、定而可爲大慶候、扱亦、其元無別義、由簡要候、雖無申立候、北條父子有相談、堅固之備、專一候、謹言、

追而、無力ニ付而、合力之義申越候、委細令得其意候、近日可差遣候間、可心安候、以上、

五月十八日

謙信(花押)

赤堀上野介殿

〇謙信、赤堀上野守ニ領地ヲ宛行フコト、元龜元年三月二十二日ノ條ニ見ユ、

〔上杉文書〕

〇羽前

佐藤筑前守申越分者、有其地、走廻由、誠ニ無比類候、何様本意之上、可及其勇候、如何共有堪忍、彌々可相稼事、簡要ニ候、恐々謹言、

七月廿六日

謙信(花押)

興津大膳亮

興津大膳亮殿

〔歷代古案〕

〇羽前

自新田之取出、丸山之地へ入計策、燒落候由、雖不初儀候、無油斷稼心地好候、彌入情敵地へ調略肝心候、仍南甲手成如何、無心元候、甲南之凶徒何方へ茂可相動様ニ候歟、又動間敷様ニ申唱候歟、實所能々聞届節々可申越候、晝夜案事候間、如此申候、隨而關東之手成細々可申越候、其方計者大儀候間、飛脚番帳お越候、此番帳ニ而飛脚可申付候、猶、萬吉重而可申越候、謹言、

三月廿四日

謙信

天正六年三月十三日

四四九

上野丸山ヲ燒落ス
北條武田兩氏ノ動靜ヲ探報
飛脚番帳

軍功ヲ褒ス

天正六年三月十三日

河田重親

河田伯耆守殿

四五〇

〔秋田藩採集文書〕十五

内々疾ニも可及使者處ニ萬方取籠故延引物遠之様ニ口惜候仍有用所旨萩原差越候可然様ニ取成頼入候萬吉彌可申候恐々謹言

七月七日

謙信(花押)

河井備前守

河井備前守殿

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕前〇羽

急度申遣候其方家中之證人吉江織部(景資)佑預置候處此内須河原證人織部佑召使佐山與申者之妻をひつくゞい歴然候殘而之證人共見聞申候雖然檢其方忠信を存續候得者縱如何様之大罪を申候共免其方候條色部彌三郎(顯長)ニ彼須河原子預置候馬鹿之者ニ候間此上自然闕落申候へハ色部迷惑之由申候間吾分らゝへ召寄尤候爲其及一翰候謹言

猶々申候加様之三ヶ條申候者免忠信助置候處能々其方不忘存知彌忠信(肝)簡心候以上

七月廿九日

謙信(花押)

鮎川孫二郎殿

覺書

覺

- 一其國侗之干戈始末如何之事
- 一助勢之事
- 一證人之事

以上

三月朔日(謙信)朱印(印文ハ阿彌陀日天辨才天)

十八日能登ノ守將鱒坂長實謙信ノ卒去ヲ聞キテ諸將ノ誓書ヲ景勝ニ致ス

〔渡部文書〕〇上杉家記所收

謹而言上今度之御仕合言語同斷無是非御事因茲早速御飛脚被爲差登候奉存知其旨然者御様子於越中當國內々無其隱之由候間昨十八日諸面々爲召登内證之通爲申聞候處何も驚入申候即於座中各神血可致之歟之由申候處何分にも指圖次第與申候之條出案文爲致誓詞血判差上申候先以當地備之儀乍恐可御心易候就之愚意之旨以條數長尾堅佐申含差越申候此旨宜預御披露候恐々謹言

天正六年三月十八日

四五二

越中ノ將士謙信ノ死ニ驚ク
長實諸士ヲシテ誓書ヲ景勝ニ納レシム
長尾堅佐

天正六年三月二十四日

(天正六) 三月十九日

鱒坂備中守

四五二

吉江信景

(信景) 吉江喜四郎殿

三條信宗

(信宗) 三條道壽齋殿

二十四日、子、壬謙信卒去後、上杉景勝、同景虎トノ間ニ、繼嗣ニツキテ爭論アリ、景勝、越後春日山城本丸ニ入りテ、謙信ノ後ヲ嗣ギ、コレヲ小島職鎮等ニ告グ、尋デ、本庄繁長等コレヲ賀シ、且ツ、其命ニ從フコトヲ誓フ、

〔上杉家古文書〕

態用ニ書候、爰元之儀可(無脱カ)心元候、去十三日、謙信不慮之虫氣不被執直遠行、力落令察候、因茲遣言之由候而、實城(春日山城本丸)へ可移之由、各強而理候条、任其意候、然而信關諸堺無異儀候、可心易候、扱亦、吾分事、謙信在世中別而懇意、不可有忘失儀肝要候、當代取分可加意之条、其心得尤ニ候、猶喜四郎可申候、穴賢々々、

追啓、謙信爲遺言、刀一腰、次吉作秘藏尤候、以上、

(天正六) 三月廿四日

景勝(花押)

小島六郎(職鎮)左衛門とのへ

上杉景勝書狀

天正六年三月二十四日

四五三

吉江信景

三條信宗

吉江喜四郎殿

三條道壽齋殿

長實(花押)

二十四日、壬子謙信卒去後、上杉景勝、同景虎トノ間ニ、繼嗣ニツキテ爭論アリ、景勝、越後春日山城本丸ニ入りテ、謙信ノ後ヲ嗣ギ、コレヲ小島職鎮等ニ告グ、尋テ、本庄繁長等コレヲ賀シ、且ツ、其命ニ從フコトヲ誓フ、

〔上杉家古文書〕

態用一書候、爰元之儀可(無脱カ)心元候、去十三日、謙信不慮之虫氣不被執直遠行、力落令察候、因茲遺言之由候而、實城(春日山城本丸)へ可移之由、各強而理候条、任其意候、然而信關諸堺無異儀候、可心易候、扱亦、吾分事、謙信在世中別而懇意、不可有忘失儀、肝要候、當代取分可加意之、(吉江信景)条、其心得尤ニ候、猶喜四郎可申候、穴賢々々、

追啓、謙信爲遺言、刀一腰、次吉作秘藏、尤候、以上、

(天正六)三月廿四日

小島六郎(職鎮)左衛門とのへ

景勝(花押)

上杉景勝書狀

世用一書し、爰元之儀、心元候、去十三日、謙信不慮之虫氣不被執直遠行、力落令察候、因茲遺言之由候而、實城へ可移之由、各強而理候条、任其意候、然而信關諸堺無異儀候、可心易候、扱亦、吾分事、謙信在世中別而懇意、不可有忘失儀、肝要候、當代取分可加意之、(吉江信景)条、其心得尤ニ候、猶喜四郎可申候、穴賢々々、
追啓、謙信爲遺言、刀一腰、次吉作秘藏、尤候、以上、
三月廿四日
小島六郎(職鎮)左衛門とのへ
景勝(花押)

天正六年三月二十四日

(天正六)

○景勝、石黒左近藏人ニ送リシ書狀、前文ト同ジ、但シ、遺刀ハ吉景作トス、

[吉江文書] ○羽

御書之趣精拜領、抑、今度謙信様御他界、乍恐萬民之浮沈此時候、然而被任御遺言、即御實城江御移、各馳走千種萬歲御目出奉存候、隨而愚入事、奉對御當代、急度可走廻、由被仰下候、如斯被入御手、御説與云、惣躰別心無之與云、自今已後無二可抽忠信存意候、委曲之旨桐澤左馬允方へ申達候由、可預御披露候、恐惶謹言、

桐澤左馬允

本庄入道

(繁長) 全長(花押)

四月廿日

(信景) 吉江喜四郎殿

[雲洞庵文書] ○越

爲代替御祝儀、青銅百疋贈給候、畏悅之至候、猶目出彌可得貴意候、恐々謹言、

雲洞庵景勝ノ嗣立ヲ祝ス

卯月廿二日

(南魚沼郡上田村) 雲洞庵

景勝(花押)

(追記) 天正六年戊寅卯月十七日ニ立テ廿五日カヘル、使長察

[上杉家譜]

輝虎

系譜

天正六年三月二十四日

景勝

天正六年三月二十四日

景勝初顯景 喜平次 彈正少弼

實ハ、越後上田城主長尾越前守政景永祿四年七月五日野尻池ニ卒年三十九、二男、母ハ長尾信濃守爲景

女慶長十四年二月十五日米澤ニ卒、弘治元年十一月廿七日、越後上田城ニ生ル、永祿二年輝虎ノ養

子トナル、五月十一日元服シ、喜平次ト稱ス、天正四年正月十一日、彈正少弼景勝ト

稱ス、同六年三月相續、十月廿日、武田大膳大夫勝頼妹ヲ娶ル、慶長九年二月十六日卒、又、四辻大

納言公遠女ヲ娶ル、慶長九年八月十七日卒、○中略

景虎

景虎初氏秀 國増丸 三郎

實ハ、北條左京大夫氏康七男、元龜元年四月人質トナリ、越後ニ來ル、輝虎養テ子ト

ナシ、景虎ト名ツケ、長尾越前守政景女ヲ以テ天正七年三月二十四日卒、之ニ妻ハス、春日

山二ノ丸ニ居ル、天正六年三月輝虎卒スル後、景勝ト家督ヲ爭ヒ、御館ニ入ル、憲政

戦ヒ克タス、同七年三月廿四日、鮫尾城ニ自殺ス、年廿六、

〔上杉年譜〕二十

○上文ハ、十三日(三月)、同月、管領兼テ仰セ付ラレタルト云、屬續ノ砌リ、相

定マリタル旨ニ任セ、御家督ノ儀、景勝公ニ相定ル、老将ノ内ニ疑心ノ族モ是アルト

イヘトモ、往歲上杉ノ御名字御相續ノ御書、景勝公ニ御附與シ玉ヘリ、誰カ敢テ他ヲ

顧思センヤ、彌、景勝公ヲ守護シ、國君ト尊崇シ奉ル、

景勝ノ嗣立ニ異議アリ

〔上杉年譜〕二十

上杉中納言藤原景勝公ハ、越後上田城主長尾越前守平政景ノ二

君ナリ、御母ハ、同國三條城主長尾信濃守爲景ノ御女、謙信公ノ姉君ナリ、人皇百六代

後奈良院、弘治元年乙卯十一月二十七日辰刻、上田城(南魚沼郡)ニ於テ誕生シ玉フ、乳名ハ卯松

殿ト申奉ル、永祿二年己未、卯松殿五歳ニテ、上田ヨリ三條ヘ御引トリ、謙信公ノ御側

ニ近侍シ玉フ、同年卯松殿御元服ナサレ、喜平次殿顯景ト申奉ル、○中略、政景溺死、政

景ニ二男二女アリ、嫡男ハ右京亮義景、次男ハ喜平次殿、一女ハ上條彌五郎義春ニ嫁

ス、二女ハ北條三郎景虎ニ嫁ス、○中略、天正六年春、謙信公卒、中風ヲ煩ヒ玉フ、祈禱更ニ

其効シナク、同月十三日午刻、享齡四十九歳ニテ逝去シ玉フ、○中略、謙信葬送、御家督

者景勝公御相續ノ旨、御病中ニ彌御遺言ナリ、去ル天正四年、御名字讓與シ玉フ事モ、

今日決定ス、近臣等評議シテ、景勝公ハ本城ニ居シ、三郎景虎ハ二ノ丸ニ移ス、此時ニ

至リ、諸臣景勝公ニ屬スル者モアリ、三郎景虎ニ順フ者モアリ、此節ニ至、群士ナニト

ナク氷ヲ聽ノ疑アリ、○十三日、

〔北越軍記〕四下

○上略、謙信病氣、

直江山城守兼續本庄越前守繁長、長尾權四郎景

路ヲ始、老臣共内談シテ、謙信御逝去有時、トカク他家ヘ被取シヨリハ、甥ト云、同姓ト

云、又子分ニ約束セラレタル事ナレバトテ、上田ノ喜平次景勝ヘ、上條民部少輔義春

老臣議シテ景勝ヲ迎フ

天正六年三月二十四日

景虎ヲ擯
斥スル理
由

ヲ遣シ、内證ヲ云入、迎ニ遣ユヘ、景勝潜ニ本丸へ入、上田者、黒金上野介宮島參川守、栗林肥前守ヲ、本丸ノ大手搦手門々ノ番ニ置、上杉三郎景虎ヲ、本丸へ不寄付候、但、三郎モ、景勝妹婿ニテ、然モ謙信養子ニ定候ヘ、上杉家ノ仇敵北條氏康ノ子ナルユヘ、越後侍共上下是ヲ主君トセン事ヲ不悅、家臣モ上條民部モ、喜平次景勝ヲ謙信家督ニ立ント志テ、相賀ノ三郎越後ノ家督トナラバ、小田原ノ氏政、貪欲不義ノ人ニテ、頓テ越後ヲ北條領分ニセラレン事、目ノアタリナリト、了簡ナリ、如此ナルユヘ、景勝本丸へ入タル事ハ、三郎ハ不知、謙信ノ病氣窺ノ爲、本丸ニ附置タル山中兵部ヲモ、上條民部指圖ニテ二ノ丸へ出ス、

〔關八州古戦録〕^十

上杉謙信逝去付春日山ノ城邑動亂事

○上略、謙信卒去、急病タルニ依テ、領知所務分ケノ遺命モナク、養子上杉三郎景虎ト、甥長尾喜平次景勝ト家督ヲ争ヒ、譜代ノ被官等多クハ景勝ニ屬シ、本丸ヲ取敷テ是ヲ守護シケルマ、景虎二ノ廓ヲ出奔シ、前管領憲政入道ノ居ラレタル御館ノ城ニ楯籠リ、敵味方ノ色ヲ立ラル、^{○下}

〔北條五代記〕^七

三、上杉三郎景虎滅亡の事

○上略、謙信、景虎ヲ養子トナスコトニカ、ル、其上甥の長尾喜平次景勝妹を、三郎殿の妻となし、上杉三郎

景虎御館
ニ遁ル

謙信景虎
景勝ノ居
所

景虎油斷
ス

景虎と改名し、家督をつき、春日山に居給ひぬ、然に氏康は、元龜元年十月三日に逝去、輝虎は、天正六年三月十三日頓死也、謙信居所は、春日山の本城、景虎は二の曲輪ふり、景勝はならひの曲輪に有しか、野心をさしはさみ、越後國をうはひとらんと計策をめぐらすといへ共、景虎、此くはたてを夢にも志らす、謙信第一の家老北城丹後守を（條景廣）はしめ、諸侍景虎を尊敬により、其心付なく油斷する所に、時日に移さず、景勝、十三日人数引つれ、本城へはしり入て門をかため、二の曲輪を目の下に見て弓を射かけ、鐵砲をはなしかくる、景虎たゝかふといへ共、こらへず出城し、越後の府中お館の城に取こもる、^{○下}

〔甲陽軍鑑〕^{二十}

○上、他界（謙信）此日十三日より、居城國の越後噪きよつ、其子細は、小田

原北條氏康の子息、氏政の舍弟三郎を、謙信養子になされ、景虎と名付、又甥の喜平次をも養子に定、謙信存生久しかるべきと、ひとかはし思案あり、すへく國を澤山よ治めば、跡を二箇よと思召候へ共、人間不定世界の故、四十九歳よて、戊寅三月十三日、他界なり、十四日、十五日は、喜平次と三郎と、謙信の跡をあらそひ、春日山城内にて、本城二のゑるわと、互に弓鐵炮のせり合あり、^{○中}三郎殿、景勝取合は、謙信他界の砌、景勝は春日山の城本城を謙信にゆつられたりと云て、即時に景勝本城へいる、三郎

は此行に心つかず、右より春日山の城二のくるわに御入候、本城より景勝衆弓鐵炮にていかけうち懸仕る故、三郎殿たまらずして、越後の内、府中のた館と云城へ取籠給ふ、春日山城より御館の城へは、上道一里半、東道九里なり、

○謙信、義子喜平次顯景ニ加冠シ、諱ヲ景勝ト更メ、彈正少弼ト稱セシムルコト、三年正月十一日ノ條ニ見ユ、

二十五日、丑、癸謙信卒去ニツキテ生害ノ説アリ、是日、北條氏照、コレヲ荒井釣月齋ニ質ス、

〔會津四家合考〕九

去比者道無相違歸國候ツル哉、無心元候、然者長尾輝虎生害之由、方々同説候、實儀定而其地江可聞召届候、委細可披露回報候、恐々謹言、

(天正六)三月廿五日

(北條)氏照(花押)

釣月齋

(荒井)釣月齋

二十六日、丑、景勝使ヲ上野厩橋城ニ遣シ、北條輔廣・景廣父子ニ、關東ノ動靜ヲ窺ハシム、是日、父子答報シ、謙信ノ喪ヲ祕シテ人心ノ動搖ヲ鎮ム、

〔歷代古案〕六

〇羽前

使者市瀨
右近允

就其許御仕合、當口之儀、無御意元之由候て、(右近允)市瀨方被指越候、過分忝候、於様體者、委彼方へ令面述候事候、重而可申候、恐々謹言、

追而、御前可然様ニ、御心得任入候、以上、

(北條)北丹

(天正六)三月廿六日

景廣(花押)

同安入

(輔廣)芳林(花押)

(吉江信景)吉喜

(三條信宗)三道

御宿所

〔吉江文書〕〇羽

兩度之御書、具拜見、過分之至ニ候、内々疾ニも可及御請候之處ニ、萬端致朦昧ニ付而、遲延寔以令迷惑候、此般上様御逝去不及是非候、當表之事、御威光不淺上、動搖以外ニ候つる、雖然御味方中令相談、于今御煩之様ニ取成候、於様體者市瀨右近允申分候、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

北條丹後守

味方申合
謙信ノ喪
ヲ祕シ病
中ト稱ス

天正六年三月二十六日

三月廿七日

景廣(花押)

四六〇

同安藝入道

芳林(花押)

(信景)
吉江殿

岩代蘆名盛氏、小田切孫七郎ニ命ジテ、謙信卒去ノ虚實ト、本庄繁長ノ鮎川盛長ニ對スル舉止トヲ探報セシメ、尋デ、謙信ノ喪ニ乗ジ、越後ヲ侵ス、

〔伊佐早文書〕

○羽前伊佐早謙氏所藏

重而越國口様子到來、大悦候、謙信遠行必然候哉、併於爰許者實否叵計候、能々聞届、重而到來待入候、自本庄鮎川へ取刷候哉、無心元候、萬端重而注進待入候、恐々謹言、

(繁長)(盛長)
三月廿六日

(蘆名盛氏)
止々齋(花押)

小田切孫七郎殿 ○越後赤谷城將

〔平等寺藥師堂題書〕

○越後

天正六年(戊辰)三月十三日、謙信さぬ御とんしニ付而、三郎殿喜平次殿御名代あらそひ、國中いこくに候条、三月末、黒川とのき衆、小國之地より亂入、四月十六日、ふてうきニ而さいなく、引こゝ候、十八日(略)全文ハ、五月二

三月ノ末
蘆名氏ノ
兵越後ニ
亂入ス

○景勝、蘆名盛隆ニ、謙信ノ卒去ヲ告ゲ、併テ家督ヲ繼グヲ報ズルコト、四月三日

ノ條ニ、盛氏ノ兵越後ヲ侵シテ敗退スルコト、四月十六日ノ條ニ見ユ、

二十七日、^{丙寅}織田信長、謙信卒去ノ風説ヲ聞キテ、コレヲ羽柴秀吉ニ報ズ、

〔黒田文書〕

○上

一謙信事相果候由、風説候、賀州より注進狀共爲披見遣之候、彌様體聞届可申聞候、珍事候者、自是も可申遣候、又言上尤候也、

(天正六)
三月廿七日

(織田信長)
(黒印)

○信長、佐々長秋ヲシテ、河田長親ヲ誘ハシムルコト、四月三十日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔甲陽軍鑑〕

二十

○上人間不定世界比故、^(謙信)四十九歳まで、戊寅三月十三日、他界ふ

り、十四日、十五日ハ、喜平次と三郎と謙信の跡をあらそひ、春日山城内よて本城二のくるわと、互よ弓鐵砲のせり合あり、是を見て、信長より、越後謙信の下につめてをき、上方へ御用あるとめよとて、指をうる、使者、^(長秋)佐々權左衛門、謙信の御用をもつて伊

天正六年三月二十七日

四六一

信長ノ使
佐々長秋

謙信ノ用ヲ以テ伊豆守トナル
信長越後ヲ柴田右馬丞ニ與フ

謙信卒去後信長ノ北陸經略

信長神保氏ヲ計ル

神保氏張謙信ノ卒去ヲ悔ム

豆守ノ成つるより、いつまでも我等ハ越後ノまわりあるべきと申せ、口展轉して早々暇乞ふし、馳上り、謙信御他界うらひふしと、道より早飛脚を信長へさし越、佐々伊豆もやうて安土へつき、越後の躰申故、信長大きよるこび、柴田右馬丞と申者を召寄、越後を其方よとらせへきとある書付を自筆よ出さる、○書付、新編武藏風土記ニ見ユレ内よきこへ、加賀越中能登衆、信長へ手をいる、故、加賀ハ信長被官佐久間玄蕃よ給（盛政）ハる、是も柴田修理（勝家）甥ふりとさく、能登の國ハ前田又左衛門よ給ハる、越前ハ柴田修理よ給ハる、越中ハ謙信他界をさし、神保運をひらき、う絡てより信長内證よて、謙信へ楯をつくハ、信長妹むこよ神保ありとる故也、然も共、信長大形ふらぬ表裡の大將故、そへ、神保をさし給ハんとめよ、佐々内藏介と云、信長内よて、柴田修理よおとらぬ剛の武士を、神保ういそへよさしこそと事よせて、次第に神保をかそめ、越中ハ内藏介よ給ハると此もやうふきども、神保もいづうとへと、ふより申べきうとあけよば、結局敵の謙信他界を悔也とハ後知候。

二十八日、己景勝、越後三條城將神餘親綱ノ異心アルヲ聞キ、使ヲ遣シテ詰ル、是日、親綱コレヲ分疏ス、

〔吉江文書〕前

詰問使林部三郎右兵衛楡井親忠親綱近邊ノ實ヲ取リシ理由

地下迄動搖

山之内新瀉津ニハ手ヲ入レズ

六ヶ所ヨリ人質ヲ取ル

下田領長敷衆

爰元相騒申之段、自世間雜意申上ニ付而、爲御仕置、林部三郎右兵衛方楡井修理亮方被指越候、則、各々江様體之儀申談候、就中當家中之面々ノ證人計御要害ニ被指置、自余之儀者差歸可申之段、被仰越候之間、是も御兩衆へ致手日記指渡申候、扱又、今度近邊證人取申義者、先年會津口ニ雜意申廻時分、境目爲御仕置源五殿様吉江織部（山浦）佐方被指越、近邊之證人當地仁可被召置候間、可致手日記之由御理ニ候之條、則、御日記致之差上、近邊證人共取申、一兩年拙者ニ御預ケニ候キ、今度之儀も、所之地下等迄殊外動搖仕候間、先年之御かまらとるへく候と存、不得御説候得共、證人之儀をも驗置候、此内をも山之内新（瀉）と津（津）ふとの義者手引不申候之間、自拙者重而者不申届候、子細之段者、是も御上使江申渡候、扱亦、爰元諸領所中に、證人之儀申理之由、其元御披判之段及承候、淵底御兩衆江證人之致手日記如差渡申候、當家中之面々證人之外者、六ヶ所ふらてハ證人召寄不申候、此外相渡由申仁候ハ、被爲引合御尋可被成事、各々御前ニ可有之候、先年證人出申所も、下田領其外取不申候、淵底是も御上使被聞召届候間、可被御申上候、然者當地長敷衆上府之儀、上様御遠行之砌より再三申理候、尤此度之儀者、各々如御見聞種々及意見申候、併、面々存分之儀をも、御上使衆江被申上候之

天正六年三月三十日

四六四

間定而委可被達上聞候、子細猶重而可申達候之條、不能詳候、恐々謹言、
追而啓上、此度拙者無如在、以神血御上使衆可懸御目之由有之申候得共、無御説處、
爭見可申之由深御理ニ御座候之間、先以延引申候、何様重而各々頼入可得其旨候、
併以神名拙者無私曲通ニ御兩衆江奉頼候、此等之段可然様各々奉任之候、以上、
(神餘小次郎)

(天正六)

三月廿八日

(吉江信景)

吉喜

(北條高常)

北下

(三條信宗)

三道

參御報

親綱(花押)

吉江信景
北條高常
三條信宗

○神餘親綱、景虎ニ黨シテ、蘆名氏ノ兵ヲ越後ニ誘フコト、五月二十八日ノ條ニ、
黑瀧城將等ト戰フコト、七年十月廿八日ノ條ニ、三條城陥リ、親綱殺サル、コト、
八年八月二日ノ條ニ見ユ、

三十日、巳、辛景勝、越後坂戸城將深澤利重ニ命ジ、上野國境ノ守備ニ對シテ、防備ヲ
速成セシム、

〔磯部文書〕○岩代

直路ニモ
守備セシム

其以來者、其表不聞届無心元迄候、然者、先日書中差越、堺目無事之段目出候、彌無油斷
普請以下早々出來候様ニ相稼專用ニ候、直路之事も偏ニ入念、自其地も意見候て簡
要候、此由治部少輔トへも可申越候、猶目出萬々重而謹言、
(都)(坐)(頭) 猶々與部トさトう、早々人ヲ申付、(負)(ツアヘセカ) うトふトせ可差越候、自以前度々自三村トへも申越

候へ共、トうトうトす候や、于今こへす候、うトふトらす與いちさしこすへく候、以上、
(天正六) 三月卅日 景勝(花押)

(利重) 深澤形部少輔殿

○景勝、景虎黨ノ越後侵入ヲ、上野猿ヶ京ニ邀撃シ、利重ヲシテコレヲ應援セシム
ムルコト、五月二十一日ノ條ニ見ユ、

是月、元信濃深志城主小笠原長時、越後ヲ去リテ、蘆名盛氏ニ會津ニ頼ル、

〔小笠原家譜〕

正親町天皇御宇、平信長

天正六年戊寅三月、謙信卒、長時在越州、難

爲本位計策、欲去而行他邦、先要使入通三浦本蘆名、平四郎盛氏奥州會津、臣星備中法

星備中

末倚盛氏、備中告盛氏、且富田美作(氏實)守左祖矣、盛氏許諾、而使備中行迎、長時早起、越

盛氏長時
ヲ弓馬ノ
師範ト爲
ス

後到津川、會津於此備中謁見、長時直奉之到若松、會津使長時入備中館、盛氏厚接、而爲

弓馬之師範矣、備中扶助、士卒監見内外矣、

天正六年三月是月

四六五

〔小笠原歷代記〕

十年過而寅年六十歲而若松御下、貞慶御懇意之衆富田美作守御取成、蘆名盛氏御馳走、弓馬之御弟子衆御悃意無申計、貞慶(天正七)己卯年御下有其參會、辰年六月末、御上洛之刻、御重代透通御劍御書物少不殘、御請取目出度御仕合候、其後長時六十五、天正十一癸未二月廿五日御逝去、法名長時院殿麒麟翁正麟、御內室同日逝去、法名梅室春光、葬雞山寺、曹洞宗之於會下修之、長時御辭世、コレホトニ廻ルヲ知ラスシテ遠ク尋子シテツ悔シキ、

○長時、攝津芥川城ヨリ越後ニ來ルコト、永祿十一年十月是月ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔榛原文書〕○信濃

今度越府へ指立候衆上下共ニ、標葉但馬守細河兩人指圖次第可走廻候、少も如在之輩ハ、兩人加成就候共、下知候之間、不可有異儀者也、

九月十八日

標葉但馬守殿○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

(小笠原貞慶)
黒印

四月壬午朔

三日、甲申景勝、蘆名盛氏ニ、謙信ノ卒去ヲ告ゲ、且ツ、其家督ヲ繼グヲ報ジテ舊好

ヲ修メントス、尋テ、盛氏父子答謝ス、

〔上杉家古文書〕

態啓述、仍、去月十三、謙信不慮之煩、不被取直遠行、恐怖可有御察候、爾而任遺言、景勝移實城、萬方仕置等、謙信在世ニ不相替申付候、可御心安候、扱亦、其國別而深重之筋目、淵底見聞、當代猶以不可有別儀之條、彌、入魂可爲快悅候、隨而見合候之條、具足一領甲一加進之候、猶、兩使可申候、恐々謹言、

追啓、雖無見本候、寒物一ツ進之候、御自愛可爲喜悅候、以上、

(天正六)
卯月三日

景勝(花押)

蘆名四郎殿

〔武澤源五郎氏所藏文書〕○羽前

先日者、從盛氏父子預使節喜悅之至候、其以來無音之條、雖無差儀候、今般及使札候、乍每度可然様執成任入候、仍、當國逐日令靜謐之間、可心安候、將又、盛氏先書ニ如承者、不違前代對盛隆以神血可申合之由、尤同意歡悅候、其方事、謙信已來別而懇切之儀候間、不相替猶以當代懇意可爲祝著候、巨碎時武式部丞可申候、恐々謹言、

追、爲音信籠手三具進之候、以上、

天正六年四月三日

四六七

誓詞ヲ交
換セント
時武式部
丞

具足甲ヲ
贈ル

天正六年四月十五日 十六日

六月晦日

景勝(花押)

四六八

布澤信濃守

布澤信濃守殿○蘆名家臣

○盛氏、上杉氏ノ内訌ニ乗ジ越後ヲ侵スコト、三月二十六日ノ條ニ、敗退スルコト、四月十六日ノ條ニ見ユ、

十五日丙申、景勝、北條長門守ヲシテ、北條輔廣父子ノ指揮ニ從ヒ、警備ヲ嚴ニセシム、

〔北條文書〕○羽前

如聞得者、於其地、別而走廻之由、神妙候、諸堺仕置手堅申付之條、越山不可有程候、其内(北條輔廣景廣)彌安藝入道父子舌頭次第、堅固之仕置肝要候、謹言、

(天正六)卯月十五日

景勝(花押)

北條長門守殿

十六日酉、蘆名盛氏、景勝・景虎相闘ギ、越後ノ騷擾スルヲ諜知シ、其兵ヲシテ、小國ヨリ越後ニ亂入セシメ、是日、敗退ス、

〔平等寺薬師堂内題書〕○越後

天正六年(成ノ誤)とらへ三月十三日、謙信さほ御とんまニ付而、(景虎)三郎殿(景勝)喜平次殿、御名代あら

黒川ののき衆

そひ、國中いこく(蘆名氏)に候条、三月末、黒川ののき衆、小國之地より亂入、四月十六日、(不調)うさ(儀)ニ(敗北)而(取)を(北)い(儀)なく、引こ(儀)と候、○下略、全文ハ、五月二

○蘆名盛氏、謙信ノ喪ニ乗ジテ越後ヲ侵スコト、三月二十六日ノ條ニ、ソノ將小田切治部少輔、越後ニ戦ヒ敗ル、コト、五月二十八日ノ條ニ見ユ、

三十日辛亥、織田信長、謙信ノ卒去ニ乗ジ、河田長親ニ、本國近江ノ地ヲ與フルヲ以テコレヲ誘フ、長親從ハズ、

〔上杉家古文書〕

態令啓達候、仍、謙信不慮御死去被、成候儀、言語之外候、尤、近年雖可申達候、御國御法度大切候、而、乍、存知、無音候キ、隨而、(河田長親)豊州御身上之義、此節候條、(織田信長)上様へ御一味被、成可然存候、於、御同意者、御報ヨリ御前之儀、涯分馳走可申入候、越國之内方々ヨリ御佗言申仁多候得共、其方より于今何共不被承候、左候てハ、江州御本國之儀候間、御分別可行之儀候、(氏張)神保殿入國之儀付而、爲御使、飛州迄被、下候、幸之事と存知、豊州へ以書狀申入候間、御内存可蒙仰候、近日可被、上候條、可達上聞候、將亦、先年給候、定器未所持候、御懇意之段、忘不申候、次、拙者名乘判形少替リ申候、御不審候ハん間、如此候、恐々謹言、

佐々權左衛門尉

天正六年四月三十日

四六九

神保氏張

長親ノ意ヲ決スベキ時

佐々長秋

若林助左衛門尉

天正六年四月三十日

卯月晦日

若林助左衛門尉殿○河田長親部將御宿所

猶以、從前之御入魂候事候間、如此申入候、是非共此時御一味可然存候、縱豐州何うと被仰候共、達而御異見尤候以上、

〔上杉年譜〕二十

天正六年四月、信長ノ家臣佐々權左衛門ヨリ、越中ノ士若林助左

長親長秋ノ書狀ヲ出ス

衛門處へ一封ヲ通シ、謙信公逝去ノ虚實ヲ伺フ、河田豊前守長親、此節信長ニ一味スル様ニ取持スヘキ由、色々ノ計策ヲ申遣ス、則豊前守ニ談シ、權左衛門方へ返翰ヲ遣シ、件ノ來書ヲ越府ニ差上、豊前守助左衛門全ク變心存サル旨申上ル、

上野由良成繁、上杉景虎ノ、謙信ノ後ヲ嗣グヲ聞キ、書ヲ景虎ノ近臣遠山康光ニ送リテコレヲ賀ス、

〔歷代古案〕一羽前

不思儀之便候間、以切紙申候、さて、近年於其國之御苦勞、不及申次第候、景虎江御家督〔讓カ〕候、由承及、目出御本望令察候、然者、小田原御一類、何茂無何事、御繁昌候、可御心安候、就中愛滿殿、氏直へ一段御意能御奉公之間、可爲御悦喜候、自新四郎殿去十日計以前ニも、貴所之御左右有御聞度候、由示給候キ、御世上在御一統、以面上連續之義

愛滿

上山又六

申承度心中迄ニ候、將又、此方無何事候、可御心易候、上山又六殿御堅固候哉、御床敷之由御傳語頼入候、申述度儀雖千万候、殘筆候、恐々謹言、

卯月晦日

遠左〔遠山康光〕御宿所

〔附記〕北條三郎殿臣遠山左衛門越後ニ有之

五月壬子朔

三日、寅河隅忠清、飯田長家、越後春日山城在庫金ヲ注記ス、

〔伊佐早文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

惣あり金之一紙

御利平之金

利息之金

少い金

所々より參金〔笈〕御おひよりの入申て御座候、

一八百枚、一貳百八拾七枚八兩一分一朱、中小朱中あり金合千八拾七枚八兩一分一朱、中小朱

天正六年五月三日

天正六年五月三日

四七二

中 八百八拾八枚 一朱中小朱中 金合千八百兩 一朱中小朱

一八百この(外) 參拾八枚三兩二分 (別) ちつして御あつけふされ候

惣都合千百貳拾六枚一兩三分一朱中小朱中

土藏在金

(土藏) とそろう一紙

惣一紙

黄金之

一千五百八拾八枚四兩三分二朱糸目

此内

一貳百貳拾六枚

御前江參

景勝手許
金
善光寺御
もと金

此内六まひ(枚)ハ善光寺へ御もとニ

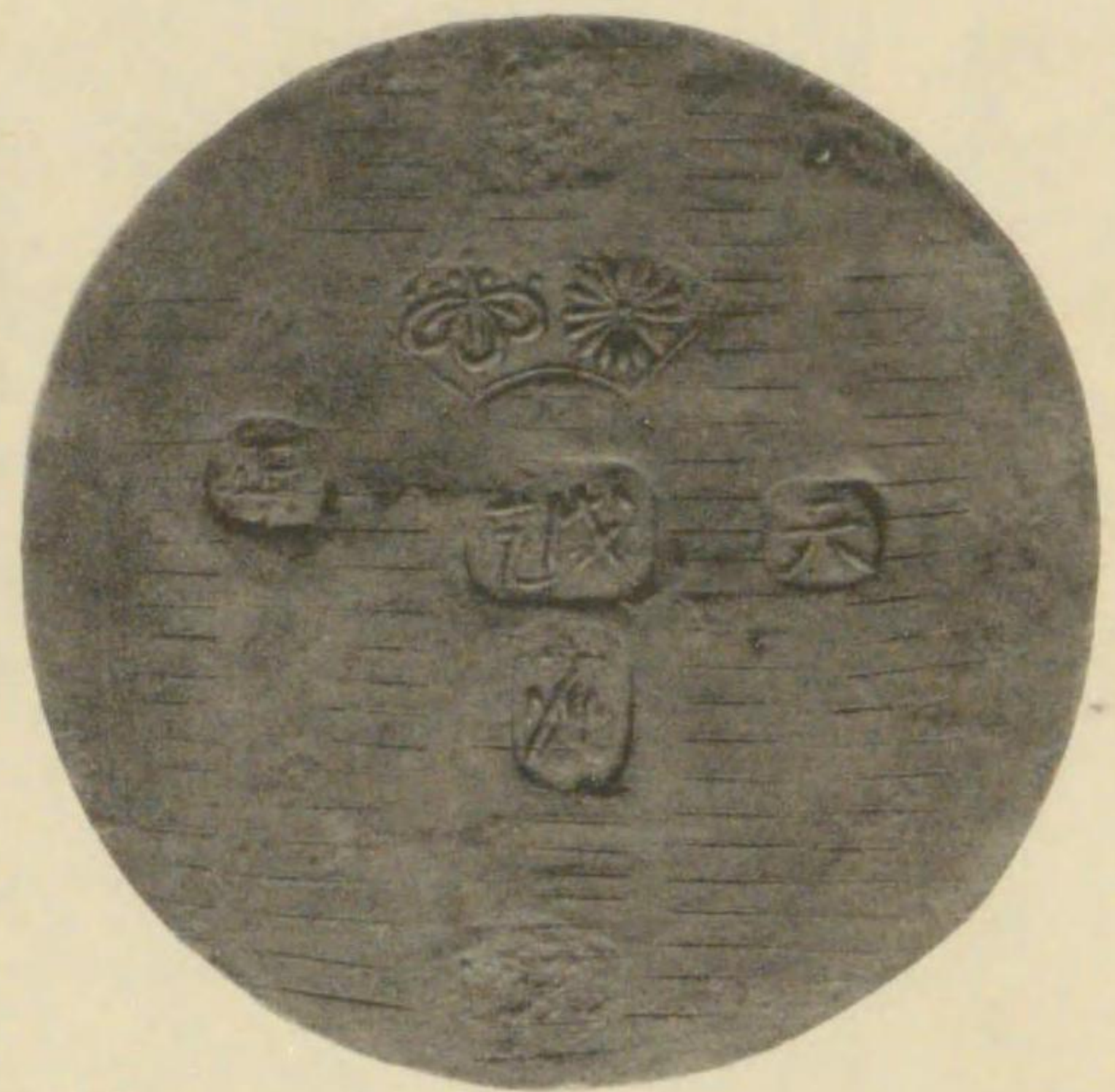
残而

一千參百貳拾貳枚九兩一分三朱糸目 あり金

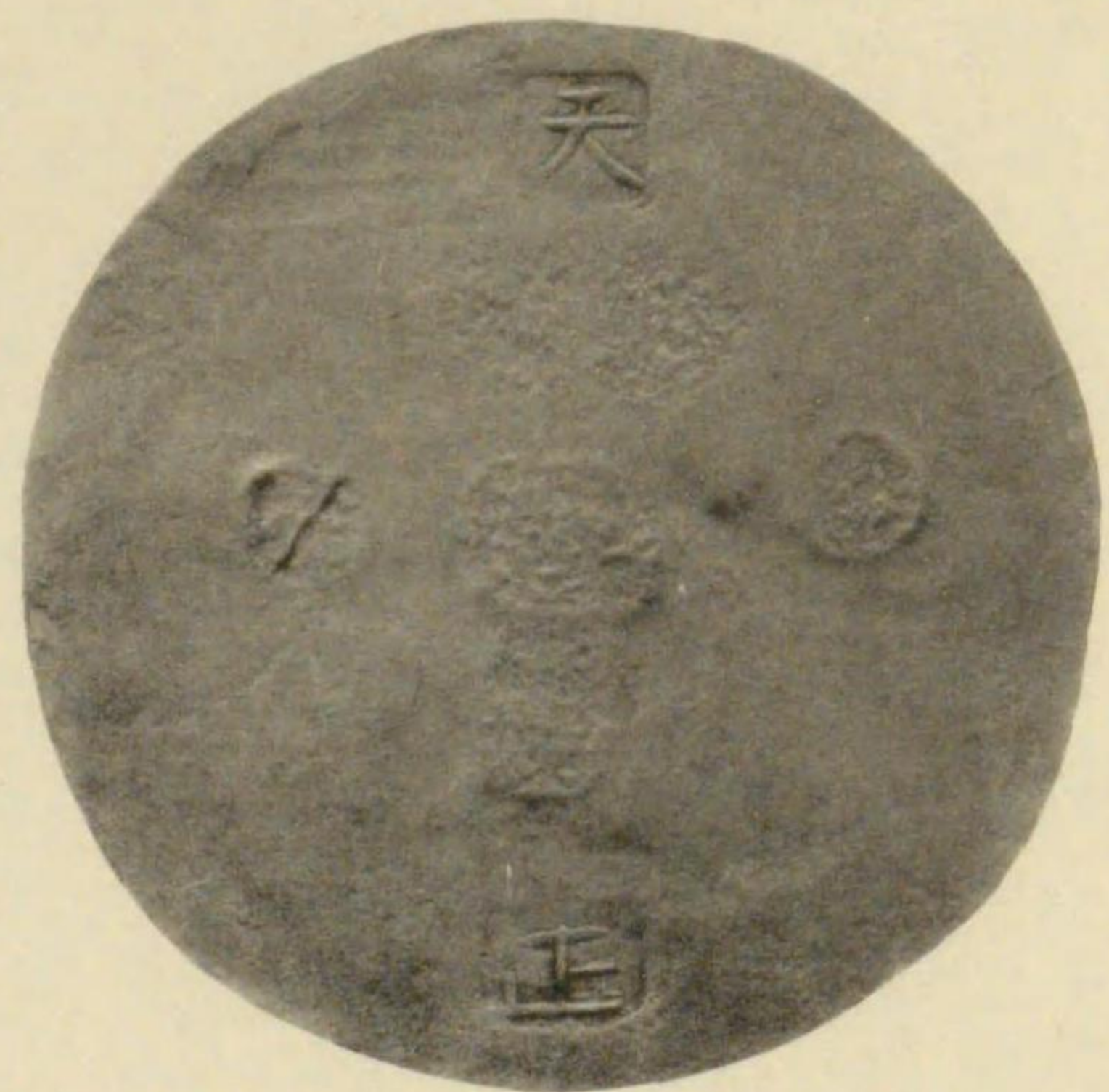
此内四枚三分一朱府内御利子さつり

河隅

天正越座小判



(表)



(裏)

羽前上杉神社所藏

天正六 寅

五月五日

忠清(花押)
飯田 長家(花押)

とめ様

とめ様

〔参考〕

謙信小判

〔天正越座小判〕

上羽前神社所藏

謙信

小判

捺シ云フ

越座

純金

量四匁餘

圓形

徑一寸五分

五分

表ニ菊

紋アリ

〔國家金銀錢譜續集〕

謙信小判

位重

サ四匁

吹トイヘドモ

厚サ三厘

コレヲ

謙信

〔金銀圖錄〕

凡正品ハ必金色醇古ニシテ

制作精雅ナリ

上字金

雁金

申古

金謙

謙信丸小判

信丸小判ノ如キ問ズシテ眞品ナルコトヲ知ル

謙信ハ

疑金

銀ヲ用キタルガ如シ

レドモ

姑ク茲ニ掲グ

〔金銀圖錄〕

佐渡ノ金ハ

宇治拾遺物語ニ見エテ

越後ノ謙信

ソノ金ヲ採テ

國用ヲ足慶長六年ニ至テ大ニ盛ナリ

〔佐渡志〕

越後ノ謙信

佐渡ノ金ヲ採テ

軍國ノ用ヲ辨セシト云フモ

多クハ西

佐渡ノ金ヲ探ル

三川村ノ砂金也

天文十一年ノ夏

越後國ノ商舶

澤根ノ浦ニ纜ヲ繫テ

終夜天色

ヲ望ムニ

金銀ノ氣空中ヲ衝クヲ怪ミ

逆旅ノ主人ニ相謀リテ

地頭本間氏ニ告ケ

礦

脈ヲ尋テ

鶴子山ヲ開キケレトモ

功未タ成サルヲ嘆キ

後越後ノ國ノ領主上杉謙信

天正六年五月三日

天正六年五月五日 十日

四七四

謙信上田ノ金穿リ人夫ヲ移シテ鶴子山鏡ヲ掘ル

ニ訴ヘケレハ、入道カ下知トシテ、同國魚沼郡上田村ノ金穿リ人夫數百人ヲ渡ラシメテ、天文ノ末弘治ノ頃迄ニ、銀銅ヲ得タル中ニ、金モ少シク交リタレトモ、費用ヲ補フニ至ラズ、○下

五日、丙辰景勝ノ兵、景虎ノ兵ト越後大場ニ戰フ、尋デ、景勝、下倉城主福王寺兵部少輔ノ一族彌太郎ノ戰功ヲ賞シ、且ツ、兵部少輔ヲシテ、坂戸城將深澤利重ト議シ、防備ヲ嚴ニセシム、

〔歷代古案〕ハ

○羽前

從其地飛脚歸候間、其方ニ爲知候、五月五日（中頸城郡春日村）（孫カ）ニ於大場彌太郎走廻候事、神妙思召候、其地深澤刑部致相談、堅固抱可有之候、爲其飛脚申付候仍如件、

天正六

五月十六日

景勝御書判

福王寺兵部少輔殿

○是後、大場ニ戰フコト、七月九日、二十七日、九月二十六日ノ條ニ見ユ、

十日、辛卯北條高常父子、景虎ヲ立テ、謙信ノ嗣トナサントス、景勝、岡田十左衛門ヲシテコレヲ誅セシメ、是日、十左衛門ノ功ヲ褒ス、

片野元忠

〔歷代古案〕五

○羽前

（北條高常其子片野元忠）片野父子依逆意引籠之處、即時ニ討捕之段、無比類勵神妙候也、

天正六

五月十日

景勝御判

岡田十左衛門殿（附記）但馬守子

〔景勝一代略記〕

略○上天正六年戊寅三月十三日（謙信）御遠行被成、此名跡をば、景勝様御

直有之、御祝儀等相濟、國中ノ諸士連々御屋形様と奉仰處、相州小田原ノ北條氏康之御子息三郎殿は、謙信様御養子也、彼人御名字ノ御あらそひ有之て、御中御不合也、然處、北條（高常）下總守といふ小侍有、いか成筋目候哉、三郎殿へ忍々にいひ寄、かたふと也、逆意ノ企をなす、此事、景勝様被聞召、時刻不移、彼仁於殿中御成敗被成けり、○下略、十三日ノ條參看、

〔毛利北條系圖〕

輔廣

高廣

高常北條下野守天正六年五月六日被誅

高常六日ニ誅セラ

越後栃尾城將本庄秀綱、景勝ニ背キテ、與板城及ビ芹河ヲ襲フ、景勝、赤田城將齋

天正六年五月十日

四七五

天正六年五月十日

四七六

藤朝信ヲシテ與板ヲ援ケシム、與板ノ將直江重總等、秀綱ヲ擊退ス、是日、景勝、
戰功ノ士ヲ褒ス、

〔天寧寺文書〕○丹

急度以脚力申届候、仍從與板(三島郡)如注進者、本庄清七郎向彼地及行由候間、時分(柄力)雖可爲

大儀候、自其地與板へ早速加勢を被入置尤ニ候、有遅々者不可有曲候、偏ニ頼入候、扱

亦、近庄相替儀候者、節々可被申越、猶萬吉重而謹言、

五月六日(天正六)

景勝(花押)

齋藤下野守殿(朝信)

〔別歴代古案〕十二

御書拜見、向與板、本庄清七郎就可致行、加勢之義被仰付候、不可有如在候、委細被御使
可被申上候條、可預御披露候、恐惶謹言、

齋藤下野守

五月十日

朝信

齋木四郎
兵衛

〔四郎兵衛〕齋藤朝
齋木殿信部將

〔別歴代古案〕五

猶々其地、何邊ニも行可然様可抽忠功專一ニ候、

一與板晝夜之粉骨、數度之勝利、謂無比類、與直江式部(久家)今井儀ハ、謙信以來老功之武士

也、

一高梨事ハ、道七(長尾爲景)以來、一家之侍也、家ト云、武邊共ニ其家也、

一力丸、金澤、篠井、高森、志田、土橋ハ、直江一家之侍、代々武邊之家也、

一長田、梅澤、曾我、小野、澤、澁谷、青柳事ハ、直江家老之輩、代々與板之者也、其外皆共ニ

至迄、稼名譽之次第也、猶本意之上、宜感之條、彌以可抽忠功事專一ニ候也、仍狀如件、

天正六年

五月十日

景勝

高梨外記殿

直江式部殿

今井源左衛門殿(久家)

〔上杉家古文書〕

〔上包〕專柳齋

直江家中

御書謹而拜見、仍當地へ從(柄下同)、尾相動候事、達御上聞、委曲被仰下候、冥加至極候、今度芹

天正六年五月十日

四七七

直江今井
ハ謙信以
來老功ノ
武士

高梨ハ爲
景以來一
家ノ侍
直江一家
ノ侍
與板直江
ノ家老

高梨外記

直江式部

今井久家

芹河

栃尾下田ノ兵ヲ破ル

天正六年五月十三日

四七八

河之地從當方相抱申候之處、(南蒲原郡)下田之以入數取懸候之處、不移時刻馳向、爲宗者廿餘人打取申、手負數多御座候故敗軍、其以往者不及行候、將亦赤田(刈羽郡)へ、當方加勢之儀被仰出候由、過分頼敷奉存候、尤爰元之仕置、別條無之候、此等之趣、御披露所希候、恐惶敬白、

直江左近將監

(天正六)五月十二日

重總(花押)

今井源左衛門尉

久家(花押)

山崎秀仙

(山崎秀仙)專柳齋

(上杉年譜)二十

今度、自(古志郡)栃尾、(河カ)芹澤之地、江取掛候處、相稼、負手被疵申由、無比類存候、恐々謹言、

五月十一日

直江與兵衛

信綱

直江信綱
木村新助
ノ芹河ニ
於ケル戰
功ヲ褒ス

木村新助殿

十三日、(天正六)景虎、春日山城ヲ出デ、府内御館城ニ據リテ、景勝ニ對抗シ、上杉氏管

内ノ將士兩黨ニ分屬シテ互ニ攻戰シ、越後亂ル、

(歷代古案)九

(羽前)

其以來不申届候間、定而爰元之模様可無心元候、右ニ如申遣候、(景虎)三郎被取除當城、雖被及、(防)鋒楯候、於坊戰者、涯分申付候間、可心安候、縱世間如何様ニ成行候共、其地有堅固者、景勝本意無疑候、此度之儀候條、普請用心無油斷被申付、(肝)簡要候、世間並ニ有之者、口惜次第候、何様靜謐之上、何も進退可引立候、此義努々偽無之候、猶萬吉追々可申越候、謹言、

(天正六)五月十九日

景勝

嶋倉孫太郎殿

山田彦右衛門殿

長尾孫八郎殿

嶋倉孫太郎
山田彦右衛門
長尾孫八郎

(歷代古案)三

(羽前)

就謙信遠行之儀、預使僧忝候、仍先段如申入候、(景勝)少弼無曲擬故、去十三、當館江相移、備堅固候、春日山之儀押詰不爲開外張候、爰許様體可御心易候、(中)尙彼使僧口上申含候、條不能細筆候、恐々謹言、(全文ハ、五月二十日ノ條ニ收ム、)

天正六年五月十三日

四七九

蘆名盛氏
謙信ノ死
ヲ申ス景
虎之ヲ答
謝シ併テ
景勝トノ

景勝諸將
ヲ激勵ス

抗争ヲ告

天正六年五月十三日

(天正六) 五月廿九日

蘆名修理大夫殿

(三郎) 景虎

四八〇

[平等寺薬師堂内題書]

越

天正六年ひの三月十三日、謙信さま御とんまに付(景虎)三郎殿、喜平次殿、御名代あらそひ、國中いこくに候条、三月末、黒川まのき衆、小國の地より亂入、四月十六日ふてうきこ而をいなく、引こと候、五月一日、三條手切候間、十三日、三郎殿春日を引のき、御城之内へ御入候(山本寺孝長)三郎殿を始、十余人御味方候間、春日と日々の御調儀候、○下略、全文ハ、五月二十八日、ノ條ニ收ム、

[上杉古文書] 十一

羽前

宗心院様御代之御事

天正六年、戊寅、三月十三日、謙信様御他界之後、即御家督ニ被爲直、國中大小之諸士御祝儀申上奉、仰然處、連々三郎殿下御中不快ニ依而、同五月十三日、從春日山御館之地へ三郎殿御取除、

[景勝一代略記]

○上文ハ、十日、ノ條ニツ、十六日、

館へ御取除、國中の大小名、屋形様守護奉人も有、又、三郎殿御味方と成も有、鉢ヶ嶺御

御館方ト
御城方ト
對抗ス

山本寺孝
長景虎ニ
屬ス

景虎謀叛

館の間七里、せり合、日夜隙なし、乍去、御館方無勢也、御城方大軍なれば、館際迄推寄責入り、既落居程有ましき處ニ、○下文ハ、十六日、

[上杉家譜]

天正六年三月十三日、輝虎卒ス、遺命ニ依リテ、景勝嗣テ立ツ、移テ春日山本城ニ居ル、初メ輝虎、北條氏康ノ七男三郎氏秀ヲ養テ子トス、上杉三郎景虎ト

稱ス、立テ争テ謀叛ス、御館ニ據リ、屢景勝ト戦フ、此歳、景勝、武田勝頼ノ妹ヲ娶ル、後四辻大納言公遠ノ女ヲ配ス、

[上杉年譜] 二十

謙信公御逝去故、諸臣悲歎ノ涙乾サルニ、北條三郎景虎變心有テ、

五月朔、日夜陰ニ紛レ、二ノ丸ヲ退キ、御館ニ楯籠ル、景勝公實城ニ御座ス、是ヨリ兩將、鉢ヶ嶺ニナリ、玉ヲニヨリ、自今、越後ノ從士氷ヲ聽ノ疑ヲナシテ、父子兄弟ノ内ヲ疑フ、街談巷説、續紛トシテ止ム事ナシ、三郎景虎ハ、北條左京大夫氏康ノ三男ニテ、武田四郎勝頼ハ、姉婿ナリ、兩家ノ後援ヲ思惟シテ、越國ノ諸士、三郎景虎ニ志ヲ通スル者多シ、中ニモ、栃尾城主本庄清七郎綱秀、鮫尾城主堀江駿河守宗親、信州飯山城主桃井伊豆守義孝、上州前橋城主河田伯耆守重親、北條安藝守輔廣、同丹後守景廣、米山寺城主篠宮某、三條ノ町奉行東條佐渡守猿毛地ニハ、柿崎一族、琵琶島城主琵琶島彌七郎、其外、本田石見守ヲ始メ、小身ノ軍士マテ、悉ク從屬ス、并直峯坂輪旗持、越中ノ不動山根

景虎ニ屬
スル諸將

天正六年五月十三日

四八一

知ノ將士等及ヒ郷民マテ志ヲ通スル者多シ春日山ニモ一騎當千ノ義士共籠城ス、
上田城ニハ御兄長尾右京亮義景ヲ始メ究竟ノ勇士相集ル所々ノ壘ニモ兵士ヲ置
嚴ク要害ヲ設ケ守ラシム、

〔續本朝通鑑〕

二百

(天正六)

三月壬午朔

○中略、謙信卒去、

ル、

養子北條景虎

與長尾景勝

爭國、景

勝曰、謙信一生不娶妻、則無子者衆之所知也、我其姉之子也、嘗既有爲嗣之約、其後北條

三郎來、此爲養子、以其俄死、故無讓國之遺言、我爲親族、彼爲他姓、我何從彼哉、乃馳入春
日山城、景虎入上杉憲政館、聚其黨、略

〔參考〕

〔越後古實聞書〕

元龜三年、關八州を御治メ、越後ハ御本國、其外能登加賀越中佐渡、

信州關八州御治メ、弓箭の御名譽日本よ肩をふらぬる大將ふし、されども御一代
御前なけむハ、御子息なし、上田政景の御養子喜平次景勝公、又小田原北條氏康の
御子三郎殿と申を御養子に被成、喜平次様御姉婿ニ被成、景虎の御名乗被爲進、御
二のちうちゆう曲輪ニ居置玉ふ、御子も被爲出、喜平次様と彌御入魂にあり、
一天正六年戊寅三月十三日、謙信様御歳四十九歳、御遠行被遊、越後七郡ハ不及
云、他領御分國之民百姓迄、世の亂れむとなげく、其ごとく、岐阜の織田信長、兼て越

たうちゆう
う曲輪

織田信長
上杉氏ノ
領國ヲ取
ラントス

景勝ノ勢
少ナシ
父子兄弟
敵視ス
安田顯元

井地峰源
太長澤道
壽齋等ヲ
味方トス

後へ御馳走此とめ、人付置尊敬ふれども、謙信様御他界と聞より諸國へ發向、御持
分之國々へも勢を遣、越後ハ上下愁の眉をひそめたるよ、いまだ御忌中過ざる間
よ、三郎殿謀叛たくみ、たうちゆう曲輪へ兵具を運び、被聞召、御本丸よてハ、
四方の御門堅め、用心嚴敷被遊、三郎殿一家ハ、關東よ氏直、甲州よ勝頼ふれば、重達
大將兩國よ控へたる間、三郎殿利よらむと思ひ、越後の大小人共、皆二丸よ馳集
り、御城勢ハ無勢也、乍去、二心ふく、一騎當千の者計り、御城よ残る、岩井和泉守弟式
部少兄弟ハ三郎殿へ付とも、和泉守が一子源藏ハ、御城よ籠る、親子の内さへ引別
き、忠の高下如此也、か様有之砌り、安田惣八郎思ひ、喜平次様御事、眼前の主
筋成り、是を捨て、諸人三郎殿へ隨ふハ侍の筋目ふきとて、起請を書て二心ふき由
申上ル付而、安田の思入、感じ被遊、御落涙程の御事也、安田も彌難有と存申上ル様
ハ、弓箭ハ勢の多少よらざと申せば、御人數不足は、結句慎と深しと承る、御勝利
よハ疑ふしと申、喜平次様思召、皆過去次第よ有ふれば、運よ任せよと被仰候て、御
人數不足と思召の御氣しき無りたる、安田思ひ、あつそれ頼母敷御大將
也、是に井地(後新發田重家)も源太引付申さば、勝利疑ひあらじと思ひ、長澤道壽齋所へ行て云
けるハ、相互よ御恩蒙る事ふれば、疾と案じ見るよ、喜平次様御事ハ、謙信様の甥御

よて、主の筋目也、三郎殿事ハ、いづみ北條殿成とも、關東御手ニ入候てハ、侍輩成る所より、うしろ立目利してふど云ハ、まふバ、名字の恥辱成るを、御城方より、て名をと、むべしと思ふハ、いづよと語、道壽齋はくはくと案じ、尤也と申しける、安田ハ嬉しく思ひ、然らハ井地を源太引付給へ、源太變るふらバ、三郎殿方千騎のおくれ成べし、御本意の上ハ、三條の城を始、其外差立、城望次第よと約束して、道壽齋才覺よて井地峰源太引付る、森野名(毛利秀廣)左衛門川田軍兵衛杯云一人當千の者共引付る、皆々へ城を約束して、喜平次様へ引付申段申上ル、御感不斜、萬事之儀安田に任せ玉ふ、○八年九月二十三日ノ條參看、

道壽齋ノ素性

長澤勘五郎

安田顯元ノ計策

一井地峯源太(新發田尾張守長敦)柴田出羽守弟也、(五十公野)いぢみを此城代よて、幼少より人よ勝れ、十三の歳、春日山々林泉寺へ夜中よ御使いたし、うぢめと云ぞけ物おく、又、長澤道壽齋と云者ハ、能登國湯山の城代長澤筑前守小姓也、永祿十二年己巳、能登國責取玉ひて後、此小姓御望被成ニ付而、其身の苗字よてハ恐ふりとて、筑前が同苗ふして長澤勘五郎と云て、御座を御免被成ル、後いぢみを源太と契約して、懇意の上よ、源太の妹嫁よして一門よ成、謙信様御法體被遊時分、勘五郎法體して道壽齋と云、一安田惣八郎、彼者共御城へ引入、心の儘よ思ひ、時刻移さぞ三郎殿打取申さんと思

景勝母仙
桃院計策
ヲ景虎ニ
漏ス
北條高常
疑ハレテ
殺サル

御館城ノ
形勢
大場口ハ
大手居多
口ハ搦手
春日山城
鉢ヶ峰ノ
要害

春日明神
愛宕權現
清水井

へども、喜平次様の御母仙(桃)洞院さぬ、三郎殿よ被成御座、三郎殿御前も喜平次様御姉さぬよ被成御座候得ぞ、是を御城へ引取御申可然の旨申上ル、則、御文をばし、御母上へ被遣ル、仙洞院さぬ御文御覽じて驚き思召て、御文を三郎殿へ見せ玉ふ故、此御手術とも不調、夫故御母上様と御一代御中不和と申也、御城方北條(高常)下總守と云者思案よて、御本丸と二の丸此間よての事ふれば、計策手たてもふらぞ、三郎殿をくし出して忠信と思ひ、一身の分別よて、五月十三日の夜、御館の城へ三郎殿をくしのけて、忠信と思ひしに、逆心と被爲聞、其儘殿中よて下總守御成敗被成也、○十日ノ條參看、御館の城ハ、弘治年中よ懸上ケ玉ひ、管領憲政公を居置玉ふ故、御館と申、場敷狭し、大場町、小田町とて大手搦手よ町あり、其名よて大手ハ大場口、からめてハ小田口と云、御城より東に當りて、七里隔て海端也、春日山御城、爲景公御代迄ハ鉢ヶ峯と申、いそぎハ、鉢をふせよとく成る山成るよより、謙信様御代上杉御苗字御繼ぎ、春日此明神勸請被遊てより、春日山と云、此山よ兼て愛宕御立被成る、麓より峯迄七里と云、山(敷)のまきハ一日よ廻り逢ふ事ならぬ程也、(天)てん上よ土藏立、脇よ清水の井あり、少し心き下御殿立、少し除て掛作りあり、是より東を見まバ、(鼠ヶ關)袴ヶ崎と云所迄見へて、舟の往來景也、山半ふく程よ、前山土手のことく引廻し、諸木茂て、山七分程よ清水出る、